563-81イ
1200600033678
563
81/1

3.8.14

系大學美スプツリ

第七分冊

品術藝と照觀的美

稲垣末松全譯

東京同文館藏版

帝國圖書館藏

リップス
美學大系
第七分冊

美的觀照と藝術品

稲垣末松 全譯

東京 株式會社 同文館藏版

昭和三年 帝國圖書館

563-81

目次

第一章　感情移入に關する事項……八〇五

一　感情移入と「表出」との差異(八〇五)　二　感情と悟性上の作用との關係(八〇八)　三　感情移入の對象としての働作(八一三)　四　感情と智力的働作(八一九)　五　働作感情或は生活感情としての感情(八二三)　六　積極的感情移入と消極的感情移入、同感(八二九)　七　感情移入と聯想(八三二)　八　美的事物の「聯想的要素」(八四〇)

第二章　美的觀照……八四五

一　美的觀照の一般的本質(八四五)　二　美的事物の「美的理念性」(八五一)　三　美的內容の「美的離隔性」(八五五)　四　「美的客觀性」(八五五)　五　「美的現實性」(八六四)　六　美的深さと美的同感(八六八)

第三章　藝術品の美的觀照……八七八

一　藝術品の美的に優勝なる主點(八七八)　二　藝術品と合現實性(八八四)　三　摸倣性、藝術的享樂と再認識に對する歡樂(八八八)　四　再生的藝術に於ける「美的眞實」(八九五)　五　美的眞實と歷史的眞實(九〇五)

第四章　藝術品の享樂……九一三

一　藝術品の享樂の特質(九一三)　二　美的象徵と非美的象徵物(九二二)　三　藝術品の「內容」と「形

「リップス」美學大系　第二卷

目次

式」（九三一）　四　藝術品と享樂的主體（九三三）　五　藝術品と藝術家（九三六）　六　「藝術的享樂」に關する概說（九三九）

第一篇　美的觀照と藝術品

第一章　感情移入に關する事項

一　感情移入と「表出」との差異

吾人は此の美學書の第二卷に對する序論の形式に於て、先づ始めに美的感情移入の概念に立歸る。通常いふ所の「感情移入」とは、先第一に、吾人が「吾人の中に於て感情を起す」といふ事を言明するのである。けれども吾人は、吾人の中に於て、千差萬別なる感情を起す事が能きる。之を例へていふと、吾人が、自尊若くは悲哀、若くは憧憬等の感情を起す時には、此等それ〴〵の感情をば、吾人の中に於て起すが如きである。かくて吾人は、各の感情をば、吾人の中に於て起す事が能きる。更に第二に、「感情移入」とは、右の如き感情が、吾人以外の或るもの、卽ち吾人と異なり居る一の事物と結合され居るといふ事、換言すれば、吾人の直接的印象に對し、此のやうな事物の中に「存在」するといふ事を言明するのである。

そこで此の如く述べ來るといふと、吾人は、感情移入といふ語の代りに、それと正しく同一の事を言明する所の他の語を使用する事になる。他の語とは、吾人に對し、一の事物中に、或るものが「存在する」といふ語である。尙之を一般的にいふと、その事物の中に、內部精神的の或る興奮が存在するといふ語である。或は又、此の種の語の代りに、吾人は、吾人に特に熟知されてある所の他の言辭を使用する事も能きる。曰く、吾人と異なり居る感官的の或る事物が、內部精神的の或るものを「表出」すると。例へていふと、或る狀貌が吾人に對して悲哀を表出するといふが如きである。

その實をいふと、右の如く使用されたる「表出」といふ語は、かの「存在」といふ語と同樣に、「感情移入」なる語と同一の事柄を言明するのである。けだし吾人は、喜悅なるものをば、目視したりする事も能きなければ、又聽取したりする事も能きない。之に反し、單に吾人の中に於て、體驗、卽ち此のやうな感情を起す事が能きる許りである。そこで、かゝる喜悅にして、吾人に對し、吾人が目視する所の或る感官的のものゝ中に「存在する」とか、又は或る感官的のもの、例へば狀貌が、かゝる喜悅を「表出」するとかと言明するならば、然る時には、かゝる言明は、吾人がかゝる狀貌に接し、吾人の感情を起す。卽ち吾人が此の狀貌の中に感じ込むといふ事を意味せしむるに外ならぬのである。

されど又「表出」といふ概念は、かの「存在」といふ概念と同樣に、感情移入といふ概念よりも、より多くのものを意味するのである。

之を例へていふと、文法上いふ所の文章なるものは、判斷或は思認を「表出」する。卽ち所信とか、內部的一致とか、現實又は假想的認識とかの作用を表出するのである。而も此の種の判斷、或は思認、所信等は、かの感情と同樣に、吾人により體驗される。同時に又、吾人は、かゝる判斷を下す際には、判斷しつゝあるものとして吾人を體驗する。その狀恰も、各の感情、例へば快感に於て吾人を心持よく、不快感に於て吾人を心持惡く體驗すると同樣である。けれども彼れが此の如くあるにも拘はらず、右の作用は是感情たるのではない。詳しくいふと、一の思認や所信を體驗するといふ事は、決して一の感情的體驗たるのではない。少くとも吾人が通常「感情的體驗」といふ語の下に理解する所のものたるのではないのである。

さうして正しく此の如くあるが故に　吾人は、一の文章の中に於て、一の判斷が吾人に對して「存在する」とか又は此の如き判斷が「その中に表出されてある」とかいふ事をば、感情移入とは呼ばないのである。

本來、判斷とか、思認とか、所信とかいふものは、是眞理に關する意識現象である。卽ち效力に關する意識現象（ゲルツングスベヴストザイン）である。さうして斯く述ぶると共に、吾人は又、此の種の現象なるものは、たとひそれが正當のものであらうと將た過誤のものであらうと、兎に角一の感情ではないと言はざるを得ないのである。何人も理解し贊同するであらう。眞理なるものは、感情上の事項ではなくて、悟性上の事項であるといふ事を。さうして吾人にして此の如く斷定するといふと、吾人は、悟性と感情、卽ち判斷、思認、所信上の體驗と感情的體驗とをば、それ〴〵異なりたる或るものとして對立するに至らしむるのである。

而も又此の如くあるが故に、吾人は繰返して云はねばならぬ。吾人が聽取する所の一の文章中に於て、吾人に對し、一の判斷、思認、所信等が「存在する」のを認知するといふ事は、是固有嚴密なる意義に於ける感情移入

をなしたのではないといふ事を。假りに吾人にして、「一の文章の中に判斷の感じ込み、即ち感情の移入」といふ語を判然使用し、さうして之により、一の判斷が、吾人に對し、その文章中に「存在する」、即ち「表出」されてあるといふ事を意味せしめようとするならば、その時には、吾人は之を美的感情移入と區別する爲に、知力的感情移入と呼ぶのである。兎に角此等の次第であるから、吾人は今茲では、右の兩者を包括する所の一般的の感情移入に就いて語らないで、單に現實的の感情移入、即ち吾人が感ずる所のものをば、吾人と異なりたる或る他のものゝ中に於て感ずるといふ體驗をば語らうとするのである。要するに、判斷とか思認とか所信とかいふ感情を吾人は起さない。此等の作用の體驗は、どこ迄も感情的體驗たるのではないのである。

二　感情と悟性上の作用との關係

けだし右のやうな思認、所信、判斷等の悟性上の作用、或は此の如きものゝ體驗は、決して一の「感情的體驗」たるのではなく、隨つて何人も思認、確信、判斷しつゝあるとの感情を吾人の中に起すと決して言明しないが、併し思認、確信、判斷しつゝあるを體驗するとは常に言明し、又言明する事も能きるのである。さうして之に就いては相當の理由が存する。それは次の通りである。感情なるものは、その固有の意義からすると、快、不快といふ兩根本的反對者によつて規定されてある。言ひ換へると、感情とは、快感又は不快感、即ちその本性上、快感的色彩又は不快感的色彩を帶ぶる。そこで若しも吾人にして、吾人の中に感情を起すといふならば、それは即ち何等かの快又は不快の感情を吾人の中に起すといふ事を意味するのである。かくて快感的色彩及び不快感的色彩といふ兩反對者は、吾人が感情と稱する所の一切のものに、必然的に附着する事になるのである。

ところが又吾人は、たゞ何等かの働作、即ち何等かの內部的勞作、內部的作業を根據となして始めて快又は不快の感情を起し得るのである。此の際、吾人は、「働作」といふ語の下には、「吾人が活動の感情を有する」と言明する時に何人も思ひ出す所のものを意味せしむる事にする。詳しくいふと、かゝる働作といふ語によりては、吾人は、內部に於ける前進的努力の運動、即ち吾人の運動となつて居る努力といふものを意味せしめようとするのである。更に換言すると、之は、吾人により直接に體驗されたる向目的の內部的進行といふ意である。されど又、此の如き働作の中には、今用ゐた所の「勞作」とか「作業」とかいふものが意味せしむる所の或るものがいつでも存するのである。即ち吾人の中に於ける「力」、又は力の發動といふ事が存する。ところが、一の働作の體驗といふものは、先第一に、一の感情である。何人も、己れ自ら活動して居るとの感情を有するといふ語句は、常に使用し居るのである。

併し吾人は、此の如く働作の感情を起すといふと、快又は不快をば、正しくその働作の色彩として感ずるのである。さうして此の如くあるが故に、吾人は快及び不快をば又感情と呼ぶのである。勿論之は、今いふやうに、感情的色彩、或は働作感情の色彩と呼ぶ方が、よりよく適當するのである。

げにや吾人は、決して單なる快又は不快の感情を起さない。之に反し、吾人が快又は不快の感情を起す時には吾人は常にそれ〴〵の色彩を有する働作の感情を起すのである。或は之を換言すると、吾人は、吾人の働作、即ち內部的力の發動中に於て、快又は不快の色彩の附加せられ居る感情を起すのである。かくて感情を起すといふ

のと、働作の感情を起すといふのとは、同一の事柄を表示する所の二種の語たるに過ぎない。けだし吾人は吾人の生活の各の瞬間に於て、何等かの働作の感情を起し居るが故に、此の各の瞬間に於て、吾人が快又は不快の感情を起し居るのは、決して怪むに足らないのである。

而も此の如く述べ來るといふと、働作感情なるものは、快、不快といふ兩反對者に對して、恰も色の感覺が、明、暗の兩反對者、又は音の感覺が、高低といふ兩反對者に對するが如き關係を有する。更に之を換言すると、働作感情なるものは、快感、不快感の必然的根據、即ち必體的基體である事、恰も、白、黑、綠、赤等の色が、その明暗に對する必然的根據であると同樣である。吾人は尙此の上に言明する事が能きる。此の働作感情が、快不快に對する基礎感情である事、恰も、色の感覺及び音の感覺が、明暗及び高低の感覺に對する基礎感覺であると同樣であると。明暗といふ兩反對者は、若しも吾人にして、色を思念しないならば、全然その意義を失ふ。さうして正しく之と同樣に、快不快といふ兩反對者は、若しも吾人にして、快又は不快の色彩を帶ぶる所の働作、即ち內部的力の發動といふ事を思念しないならば、全然その意義を失ふに至るのである。

されどかゝる働作の特徵となつて居る所の凡てのものゝ中の何物も、かの單なる思認、所信、判斷、現實又は假想的の認識中には存在しない。吾人にして、或るものが之々の樣にあると確信するならば、然る時には吾人は正しくさういふやうな確信を起す。即ち吾人は內部的一致の作用を實行し、或るものを「是認したり」「受納したり」する。けれども吾人は、これと共に、內部的に何等の「働作」をなさない。即ちその是認や受納をなす中には、少しも努力的運動、內部努力的の進行、力、緊張、勞作等は存在しない。併し又、その此の如くあるといふ事は、吾人が、一の思認、所信、判斷に迄到達する爲に、多くの勢力を使用し、甚だ强力に活動してあつたといふ事を妨げない。けれども吾人は、吾人が、正しく一の內部的働作に「よつて」一の判斷に「迄」「到達」したといふ事を言明する事により、吾人は、判斷そのものが、一の內部的働作でないといふ事を承認するのである。否吾人は、此の如き語句中に於て、劃然、判斷を發生せしむる所の働作、即ち知力的働作をば、判斷そのものと區別する。

して又、思認とか、所信とか、判斷とかの體驗が、何等の働作的體驗でないから、此等は、それ自體としては快又は不快の色彩を帶ぶる事は能きぬ。さうしてそれが正しく此の如くあるが故に、換言すれば、判斷といふ作用には、一切の感情に對して必要である所の、快感的色彩と不快感色彩との兩反對者が缺損するが故に、それが一の感情である事は能きぬ。さうして此の如き事實關係であるから、「吾人は判斷したり、思認したり、確信したり、現實又は假想的に認識したりするといふ感情を起す」といふ通俗の語が、何等の意義を有しない所以である。更に、或る文章の中には、吾人に對し、一の思認、所信、現實的又は假想的認識、簡言すれば一の判斷が「存在」するとか、又は一の文章がそのやうなものを「表出」するとかいふ事實をば、固有の意義に於ける感情移入と呼ばないといふ事も、右の理由により正當化せらるゝのである。

併し吾人が、思認とか確信とかいふ作用そのものゝ中、即ち或る事實の單なる「是認」といふ作用中に於て、快感を有する事の能きないのは自明である。之はちやうど、吾人が內部的一致の作用、或は「之は之々のやうにある、若くは之々のやうにあらぬ」との單なる意識中に於てかゝる快感を有する事は能きないといふのと同樣で

ある。但し之に關しては、吾人は固より二個のものを判然次のやうに區別せねばならぬ。けだし何人も否認しない。吾人が知得する所の事實、若くはそれが發生するであらうと確信し、思認する所の事實に對し、快感又は不快感を起すといふ事を。換言すると、吾人がその現實を確信する所の或物、現象、事實關係等に對し、快感又は不快感を起し得るといふ事を何人も否認しない。ところが、今茲では此のやうな事を問題として彼是推究して居ない。之に反し、その推究して居る問題は次のやうな事である。かの如き事實の是認、確信、現實又は假想的認識、思認等、簡言すれば判斷それ自體が、吾人の現實又は假想的認識の內容、卽ち判斷の對象たるものを別にして、更に換言すると、その現實を確信する所のもの、性狀を別にするも、尙快感又は不快感を起し得るや否やといふ事である。

此等の事に關しては、吾人は唯次のやうな事を顧慮して見ればよい。吾人は、吾人の眼を開く各の瞬間、並に過去を回想する各作用中に於て、或るものに就いて確信し、ある効力意識、卽ち眞理意識を起し、判斷、思認、見解、現實又は假想的認識を取得する。卽ち吾人にして眼を開く度毎に、並に過去を回想する度毎に、吾人は、之々のものがあり、又はあらぬ、之々のものが發生した若くは發生しなかつた。簡言すれば之々のものが效力を有する若くは有しないとの意識を起す。さうして此の際吾人は確に、此の如くして得られたる現實意識、事實意識、效力意識の內容に關しては、喜んだり、怒つたり、不快感を起したりする。けれども吾人は、單なる知識又は認識、簡言すれば效力意識そのものが、それ〴〵の內容を別にして、愉快のものであるなどとの體驗を決して得ないのである。

吾人は今此の事を茲で特に高調する。何となれば、世には、判斷そのものに、此の如く愉快なる性質を附與する者があるからである。卽ち認識そのものに對する愉快といふ事が語られ、甚だししきに至りては、最も多く異なつたる種類に屬する所の美感をば、「悟性及び頓智」の此の如き作用に歸着せしむる者もあるのである。併しながら事實は正しく之を反駁する。卽ち吾人の內部的經驗は吾人に言明するのである。此の如き悟性的作用そのものの快感的性質などは少しも認められないと。之に反し、かゝる作用は、その性質上、全然、快、不快と無關係であるといふ事を指示するのである。此の際にも吾人は正しく、かゝる悟性的作用に對する謂ふ所の快感と、此の作用の結果、その現實、事實的、又は效力を確信する所の事物そのものに對する快感とを區別せねばならぬのである。

要するに、判斷、思認、所信、現實又は假想的認識の「感情上の中性」、かゝる悟性的作用そのものが有する「冷淡性」といふものは、旣に述べたる如くに、此の種の作用が、一の働作、力の働き、內部的勞作をその中に包有しないといふ事より來るのである。

三　感情移入の對象としての働作

以上の如く述べ來るといふと、自然に、之を逆にして、次のやうな事が同時に言明せらるゝのである。吾人が固有の意義に於ける感情移入をなす時には、換言すれば、吾人以外の事物、例へば或る狀貌の中に感じ込む時には、此の如くして感じ込まれたるものは、一の働作卽ち働作體驗であると。此の種の働作體驗たるや、或は特定

の各個的働作であることもあれば、或は又、吾人の働作の方法、樣狀、性質でもあり、又內部努力的運動の經過の方法でもあり、更に內部的勞作、卽ち一般的の作業、力の活動の方法でもあるのである。之は、或る場合(甲)に於ては、自由、愉快なる、內部的働作、卽ち內部努力的進行の方法であり、他の場合(乙)に於ては、かゝる內部的働作の、妨害壓屈された方法である。前者に於ては、働作の豐富が存在し、後者に於てはその貧弱が存在する。吾人にして、若しも或る狀貌の中に歡樂を感じ込むならば、その時には、此の甲種の働作の方法を感じ込むことになる。然るに人間の容狀の中に、內部的空虛、遲鈍を感じ込むならば、それは乙種の內部的働作の方法を感じ込むのである。

併し今此の如く區別をするといふと、かゝる「働作」といふ語に對し、吾人が何を意味せしむるか、又何を意味せしめないかを、尙一層明瞭に言說する事が必要になつてくる。吾人は、此の語に對しては、實際に於てかゝる名稱を價する所の一切のものを意味せしむる。同時に吾人は、此の語をして特に、一定の意識的に設定された所の或る目的に單に向注された働作、取得すべき或る結果の方に思想によつて統配されある意識的の「意志的働作」を意味せしめない。それから吾人は、外部身體的の意識ある意志的働作などは少しも意味せしめない。之に反し吾人は、一方に於ては、想像的働作、又は感官的事物の把捉考察、並にその中に於ける精神的逍遙の働作、他方に於ては、盲目なる衝動的働作の各の種類を意味せしむるのである。

更に吾人は、特に名づけられある所の能働的働作を意味せしむるのみならず、尙又、受働的働作、卽ち吾人の留意を要求する所の之若くは彼のものに對する打任せ、隨つて各種の被驅使や獻身をも意味せしむる。

尙之を一言で以て覆ふと、吾人は、直接に體驗された內部的運動の連關せる全經過にして、さうして次のやうな點によつて單なる事實的の現象と異なる所のものを意味せしむる。それは、かゝる經過中に於て、常に働作といふ要素、卽ち努力的進行、一點から他點への向注、驅使及び被驅使、促進及び被促進といふ要素が存在するといふ事である。吾人はかゝる「經過」といふ語によりては、一切の單なる內部的存在、又は一點に於ける靜止といふ事に反對するものを意味せしむる。更に之を簡言すると、吾人が何時でも「內部的運動」といふ語を以て表示しようとする所のもの、卽ち吾人の生活感情の中に於て知得する所の一切のものを意味せしむる。けだし一切の「生活」なるものは正しくこれ働作であるからである。

ところが一切の働作はこれ力である。或は力といふものをば、その不可分の要素として包有する。此の故に吾人は又次のやうに言明する事が能きる。曰く、吾人は今此の所では、働作といふ語を以て、他の所に於けると同樣に、大なり小なりの力をその中に包有する所の一切の內部的體驗、一又は多くの「力」の各の活動又は活動の方法、更に言ひ換へると、吾人をして一の「力」の活動を體驗し得せしむる所の一切のものを意味せしむると。

さうして吾人が特に高調せねばならぬのは、吾人は玆で働作といふ語の下には、啻に個々の働作又は個々の行爲のみならず、更に吾人の內部的働作の方法、卽ち吾人の中に於ける一般的の力の活動の方法をも意味せしむる換言すると、吾人、卽ち吾人の中に於ける力を働かすに就いて生ずる個々の行爲の中に存する方法のみならず、又吾人の「生活力」の可感的活動の一般的方法をも意味せしむるのである。

併しながら又、此の如き意味の「働作」なるものは、吾人の中に於て、十分なる內部的「靜止」及び外部的「靜

止」をする際にも起る。即ち之は、各の意識的の靜止せる生存中に於ても起る。けだし吾人が體驗し感ずる所の「靜止」なるものは、かの石の靜止のやうに、運動や、働作の缺損といふ事ではない。之に反し、内部的働作、即ち吾人の中に於て働く力の活動の靜止的均衡といふ事を意味するのである。

さうして凡て此の如き「働作」は、快感又は不快感の色彩を帶ぶる。之はそれ〴〵、その性狀に應じて此の色彩を異にする。此の際に於ても亦、吾人は、一方に於ては、吾人の全働作中に於ける個々の働作、即ち個々の動力、他方に於ては、内部的力の總活動といふものを區別する。前者は、之若くはそれの働作に應じて色彩を異にする。例へていふと、之若くは彼の事物に關係せしめられ、かくて必然的にそれ自身にそれ〴〵種類を異にする事により、快感又は不快感の色彩を異にする。次に後者、即ち全内部的働作、吾人の一般の内部的力の活動といふものは、その全性質、即ちその經過の方法、或は内部的「韻律」、その中に働く力の量、その經過の活潑又は遲緩、自由又は妨害、その中でも、働作の豐富又は貧弱に應じて、それ〴〵色彩を異にするのである。

かういふ譯であるから、かの前にいうた「歡樂」といふものは、全内部的働作の經過の特定の方法を示すのである。即ちかゝる歡樂なるものは、働作、即ちそれ〴〵その性質に應じて有する快感的色彩を合せての全内部的働作の經過法の謂である。然るにかの悲哀なるものは、此の如き全内部的働作の經過の單に反對する所の方法たるに過ぎないのである。

之は特に不快感といふ色彩を帶ぶべき性質を有する所の働作法の謂である。さうして之と同樣の說明は、熱情感興奮の情緒、又は内部的空虛や遲緩の情緒に對しても、施す事が能きる。

之に反しかの純然たる悟性的作用なるものは、右の如き一切の働作と反對に立つものである。悟性的作用とは或る事實の單なる受納、知識、確信、判斷、效力意識等の謂であつて、此等は、内部的力の活動ではなくて、吾人に對立する所の事實の單なる受納、それに對する一の態度、それが吾人の中に及ぼす效果といふ事である。勿論此の際吾人は、一の事實を内部的に肯定し之を適當又は不適當のものと「發見」する。けれども吾人の中に於ける此の種の現象、即ち彼れが如き「發見」といふものは、吾人の中に於ける力の使用、その活動から、嚴密に區別されねばならぬ。之は、一切の働作とは全然異なつたものであり、さうしてかゝる悟性的作用に於ては、吾人の中に於ける力は活動しないから、此等は、それ自體としては、快感又は不快感と少しも交涉をなさない。して又、其の此の如くあるといふ事は、此の種の作用は感情たるのではなく、隨つて嚴密なる意義に於て「感じ込まれる」事は能きないものである。

かゝる悟性的作用が、感情たるのではなく、又それ自體として快感又は不快感の色彩を帶ぶることが能きないといふ事をば、次のやうに簡言する事が能きる。曰く、之は、感情に對しては、恰もかの白と黑が、諸種の色彩に對すると同樣の關係に立つと。

但し上來述べたるものに對し、一の補說を加ふる事は勿論必要である。その補說とは次の如きものである。快感又は不快感の色彩を帶ぶるものは、啻に體驗された現實の働作、即ち今實行された働作である許りでなく、更に働作の能力もさうである。即ちそれは現實的働作の體驗である許りでなく、又潛勢的働作の體驗もさうであり啻に吾人の中に於て吾人が直接に體驗したり、感じたりする所の生活のみならず、直接に體驗された生活可能、又啻に

力の活動のみならず、活動する事が能き、さうして此の如きものとして吾人により體驗せらるゝ所の吾人の中に於ける力もさうである。けだし働作の能力の感情なるものも、亦一の働作感情である。吾人は、吾人が爲し得る所の働作の意識を隱默の間に有する事なしに、吾人が活動し得るとの意識を有する事は能きぬのである。併し之に關しては、吾人は確言せねばならぬ。潛勢的働作、即ち働作の能力の感情なるものは、特異なる種類の働作感情であるといふ事を。言ひ換へると、働作感情に於ては、現實的働作の感情と潛勢的働作の感情との二つの可能は、判然區別されねばならぬのである。

されど同時に吾人は、此の兩者をば唯一つの語に於て結合する事が能きる。働作なるものは、吾人の云うた通りに、一の力の活動である。さうしてそれが此の如きものであり、且つそれに於て力が現實的のものとなつたといふ事は、正しく之をして働作とならしめ、かくて快感、不快感の色彩の根據とならしむる。即ちそれを感情となるに至らしむる。されど働作の能力の感情なるものは、今現實的のものにならずにある所の存在的力の感情たるのである。

此の如くあるが故に、現實的働作と潛勢的働作との兩者は、「力」といふ一つの語に於て統括され得る。吾人が兩場合に於て感ずるところのものは實に力である。さうして吾人が感ずる如何なる場合に於ても、その感ずるものは力の感情である。之は、現實となつたか、又は單に存在する所の潛勢的力の感情である。さうして一切の快感又は不快感といふ色彩は、此の甲若くは乙の種類の力の感情の色彩である。詳言すると、單に存在しそれかというて尙體驗された力と、今使用された活躍せる力との感情の色彩たるのである。

四　感情と知力的働作

以上述べたる所のものを基礎として、吾人は今や容易く、上記の斷言、即ち判斷、知識、所信、思認、效力意識、現實又は假想的の認識等が、それ自體としては、決して快又は不快の色彩を帶ぶる體驗ではないといふ事、並にそれが何等の働作的體驗でないが故に然かあるといふ事に對する反對論を、容易く排斥し得るのである。その反對論を唱ふる者は、一の疑問を起す。曰く、若しもかのやうな知識、判斷、現實又は假想的の認識等にして吾人を喜ばせず、吾人に滿足を與へないならば、如何にして吾人が此等のものを取得しようと努力するに至るかと。

ところが此の如き疑問に對しては、既に一部分は上に解答され居るのである。

之を例へていふと、吾人は一の認識又は「判斷」をば、時としては袖手傍觀少しも骨を折らないで仕遂ぐることがある。即ち既に擧げたる場合に於けるやうに、吾人にして單に吾人の眼を開き、さうして或る事物を吾人の助力なしに吾人の視界に顯現せしむる時、又は此の如き感官知覺を基礎としてかゝる事物の存在を認識する時、若くは此の知覺よりして直接に、「事物が存在する」との判斷を下し、進んではそれが之々の性狀であると判斷する時などには、さうである。又之と同樣に、或る事物が之々にあると他人から報告されたり、又は一の確言中に存する所のものに內部的に同意を表したり、若くは、吾人が此の確言を正しいと思ひ、或はその確言の所因を否認する能はさるが故にそれに同意を表したりする時には、均しく骨を折らないで知識を取得するのである。凡て此等

の場合に於ては、吾人は、現實に關する意識そのもの、或る事實の單なる受納、承認、その所因の確信等が、その事實の性質を全然別にして、即ち純然たる判斷、認識の作用そのものとして、快感又は不快感の色彩を帶ぶるといふことは、到底理解し能はざるのである。

併し他の場合に於ては關係は異なり、彼れが如き內部的一致の作用「之々にある」といふ意識、內部的首肯等を吾人の中に於て發生せしむる爲には、吾人は大なり小なり骨折つて作業をなし、內部的勞作を實行し、力を使用し、活動をなさねばならぬ事がある。

而も此の種の作用に於ては、吾人は確かに吾人を幸福に感じたり、又は不快に感じたりする。併しながらかゝる場合に、快、不快の感情の根據たるものは、働作、又は働作の特殊の種類である。かゝる働作、即ち內部的運動に於てこそ、吾人を歡喜せしめたり又快樂を得たりする。之はちやうど、かの感官的に知覺された事物が現實といふ效力を有するとの要求に對して、無活動の同意を表したり、又は或る報告を單に受納したり、若くは該報告が眞實であるとの要求に同意を表したりする事、隨つて或る報告に對する單なる確信の作用が、それ自身に於ては、即ち吾人が現實として認識する所のもの、簡言すればその報告の內容を別にしては、決して快感、不快感と關係を有しないと同樣である。

併しながら之に關しても尙、吾人は、或る働作と、其の働作の成功との間に區別を立てねばならぬ。詳しくいふと、一つの判斷に到達するに至る所の知力的働作、即ち思惟といふ精神的勞作に於て、吾人を歡喜せしむる所のものは、第一には働作そのもの、換言すれば力の費消、吾人の中に於ける力の內部的活動である。第二には、此の如き內部的働作、即ち內部努力的運動を手段としての目的の遂了である。さうして此の第二の場合に於てはその働作が目的とする所のものゝ現出により、緊張が弛緩さるゝといふ狀態が存する。して又如何なる時にも此の如くあると同樣に、此の場合に於ても、一方に於ては働作そのもの、他方に於ては働作即ち骨折の成功といふものが歡喜せしむるのである。

但し此のやうな成功といふ事に關しては前では問題として居なかつた。之に反しその問題として居つたのは、前行する所の働作、その成功、並に働作の際に抱かれ居る目的の遂了等を別にして、吾人の中に於ける判斷の單なる存在、單なる受納、確信自體等であつた。言ひ換へると、此の場合に取上げて居つた問題は、判斷そのもの純然たる內部的の肯定又は否定の作用、效力意識そのものが、快不快の色彩を帶ぶるや否やといふ事である。

けれども又、吾人は、前のやうに、吾人が依りて以て一の判斷を取得する所の精神的働作、並にその働作の成功が快感の色彩を帶び、又帶ぶる事が能きると言明する丈では、未だ十分言明し盡さないのであつてそれは次の理由に基く。

けだし吾人が、或る事柄に關する一の判斷、一の知識、一の意見を取得したといふ意識は、それ等知識判斷の事柄即ち內容を別にするも、快感の根據となる。吾人は吾人の知識によりて吾人に關する感情を起し、吾人が自尊的のものにして他人に優越するとの感情を起す。換言すると、吾人は之々、又は之丈多くを知る所の吾人その人に對して快感を起す。此の際に於ては、知識、判斷、現實又は假想的認識の作用が、それ自身に於て、即ちその內容を別にして、快感の色彩を帶ぶるやうに見ゆる。

併しながら之に關しても亦、吾人は、作用（アクテ）そのものと、それから發生し若くはそれによつて可能になる所の働作といふものを區別せねばならぬ。世に知識は力であるといふ。恐らく此の際には、先第一に、外部的の力、事物を超越しての力、自然界の事物の實際的支配（ディーポセイカイト）といふものが意味せらるゝであらう。されど又、此の事を別にするも、尙知識は力である。卽ち之は內部精神的の力であり、又かゝる力を與へるのである。さうして此の事は吾人が、吾人の知識を以て、內部的にあらゆる種類のものを始め得るといふ事を言明する。吾人は、吾人が既に取得して居つてさうして吾人の精神的所有物となり居る所の知識、判斷をば、今利用する事が能きる。詳しくいふと、吾人は之を基礎として、諸種の疑問や問題を解決したり、吾人が知得する事物に對し、現實の連絡中に於ける位置を與へたり、之を或る槪念の下に統括したりする事が能きる。更に之を簡言すると、吾人は吾人の知識を基礎として、吾人の精神に提示せらるゝ事物を取上げて作用し、それを處理する事が能きる。吾人はかゝる事物を精神的に支配し、その際、自由と優越との感情を起す。

ところが又、斯かる內部精神的の力、並に右の實際的力の意識は、是働作の意識たるのである。換言すると、之は先第一に働作能力、卽ち潛勢的力の意識である。併しながら既に述べたる如く、吾人が活動して居る。若くは今いうたやうな方法に於て處理し得るといふ意識、卽ち內部努力的運動の可能といふ意識は、是働作、卽ち內部努力的運動の意識である。勿論吾人が働作し得るといふ意識は、吾人が今働作して居るといふ意識ではない。けれどもかゝる意識の中には、一種特異にして詳しく言說し得べからざる方法に於て、働作意識といふものが存在する。さうして又、此の如き可能なる働作に對しても、吾人は歡樂を起し得るのである。

併し又、吾人は、彼れが如き力卽ち能力の意識をば、知識、判斷の意識そのもの、卽ち效力意識そのものから區別する。兩者は同一のものではない。之に反し後者は前者に對する前提である。すべて知識といふものは、能力卽ち働作能力の意識に對する基礎である。之は「働作」の可能なる實質である。之は存在して以て能力の意識を根據づける所のものである。さうして云ふ迄もなく、各の知識は、かゝる働作能力の意識を根據づける事が能きる。吾人は知識の意識を有する事により、常にかゝる働作能力の意識、並に吾人が實行し得る所の働作の意識を同時に有する事が能きる。隨つてそれ丈の程度に於て、各の所有さるゝ知識は、その中に働作能力が存在する限りに於て、直接ではなく間接に、快感の根據となるのである。

五　働作感情或は生活感情としての感情

以上の如く述べ來ればとて、吾人は未だ、「快、不快の感情なるものは、その基體として一の働作感情を有し、さうして單にかゝる感情の色彩に過ぎない」といふ命題が、普遍的に效力を有するといふ事を確實に知得し能はざるのである。

此の如き命題の普遍的效力に反對するものは、或は云ふかも知れぬ。曰く、吾人は、日常、色とか味とか香とかに對して快感を起す。而も果して斯くあるとするならば、此の色や味や香も亦一の「働作」であるかと。

併しながら此の如く提起された反問は、是上述したるものを全然誤解したるものである。卽ち吾人は、働作又は働作體（ボディ）をば、快感の必然的對象（ゲーゲンシタンド）ではなく、之に反しその必然的基體（スブストラート）となした。而も快感の對象と基體卽ち基

礎とは、絶對的に異なりたるものたるのである。

此の如くして、吾人は今や快感の可能なる對象に留心せざるを得ないやうになるのである。かゝる對象は二種類に區別される。第一には、吾人は、吾人と異なりたる或る事物、即ち或る感官的の事物に「對して」快感を起す。第二には、吾人は、吾人、即ち吾人の働作、又は此の働作の經過法に「對して」快感を起す。そこで此の第二の場合に於ては、働作なるものは、啻に快感の基礎であるのみならず、更にその對象でもある。けれども第一の場合に於ては、之は基礎たるに止まるのである。

さうして此の第一の場合に關し言明さるゝ事柄は、世にある事柄中の最も明瞭なるものである。若しも吾人にして或る色に對して快感を起すならば、敢へて此の色が、吾人の知らない、世界のどこかに存在するといふが故に快感を起すのではない。之に反し吾人が此の色を目視する時に之に對して快感を起すのである。さうして此の如き「目視」といふ事は、此の場合には次のやうな事を言明する。曰く、吾人の中に於て快感が發生するに就いては、吾人は先づ色を把捉し、精神的に之を領得し、之を觀察、統覺せねばならぬと。併しながら吾人が此の種の事をなしつゝある間には、吾人は一の働作をなす。即ち正しく把捉働作と統覺の働作とをなすのである。そこで今や問題が起る。此の種の働作は如何なる性狀のものであるかと。かの色とか味とかいふ事物は、吾人がそれを把捉せん事を吾人に要求する。かくて此の事物は、吾人に對し、全然特定なる把捉働作を要求する。即ち吾人は任意のものではなく、正しく此の特定の事物を把捉すべき事になる。そこで更に問題は起るのである。或る特定の場合に於て吾人に要求せられたる働作、即ち此の如き特定の種類の働作は、吾人の自然的の働作需要、即ち吾人の本性中に存する把捉働作の傾向に對して如何なる關係に立つかと。詳しくいふと、吾人は、吾人に要求せられたる働作をば、彼れが如き需要、即ち自然的傾向と調和して遂行し得るや否。隨つて吾人は、心内に於て何等の障害衝突なく、内部的自由に之を仕遂げ得るや否。或は又、吾人にしてかゝる把捉働作を遂行すべならば、かゝる働作は、一方に於ては、此の如き事物を把捉すべき要求、即ちその事物の性質に合當する所の把捉働作を遂行すべき要求、他方に於ては、把捉働作をなすべき右の需要、自然的傾向との間に、不調和、矛盾を包有するや否やと。さうして此の如き場合の甲又は乙なるに應じて、吾人の把捉働作は、それ〴〵異なりたる色彩を取得するのである。即ち甲の場合には快感、乙の場合には不快感の色彩を帶ぶる。

此の種の事實關係は又次の如く表出する事が能きる。吾人は、事物により、快感的又は不快感的に吾人を「要求」されて感ずると。さうしてこれは正しく下の事を意味する。把捉働作の遂行に對する「要求」、即ち吾人に要求された把捉働作なるものは、吾人の自己活動の自然的傾向、即ち自然的需要に對し、調和又は矛盾の爲に、快感又は不快感の色彩を帶ぶると。詳しくいふと、吾人にして把捉働作を遂行するといふと、吾人は之を體驗し、さうして之を遂行する所のものとして吾人を體驗する。吾人は此の働作を感じ、さうして之をば、時としては、無妨害、無衝突、即ち自由なるものと感ずる。されど之と共に、吾人は正しく之をば、快感の色彩を帶ぶるものとして感ずる。或は又、吾人は、之をば、内部的衝突、不調和なるものとして感ずる。此の場合には、之を不快感の色彩を帶ぶるものとして感ずるのである。

此の故に、此等の場合に於ては、事實は正しく次のやうにある。働作なるものは快感又は不快感の色彩を帶び

て居る。或は之を逆にいふと、快感と不快感とは、かゝる場合に於ては、疑もなく、或る働作の色彩であると。さうして同時に吾人は理解するのである。働作なるものは、若しもそれが無妨害、無衝突、隨つて內部的に自由なる働作である場合には、快感といふ色彩を帶ぶる。さうして若しも、妨害、衝突、矛盾、簡言すれば不自由がその中に存る場合には、不快感といふ色彩を帶ぶる。而も彼れが如き「自由」とは、把捉さるべき事物により吾人に要求された働作と、吾人に自然的にして、かくてかの要求を別にして、吾人の本質中に存する所の、自己活動の傾向との間の、自由なる調和といふものに外ならぬのである、さらに右の矛盾とは、吾人の把捉働作中に於て、常に必然的に共働する所の此等兩動力間の矛盾たるのである。

謂ゆる感官的快感に關する吾人の上に擧げた實例は、單に個體的實例であつた。けれども之に依りて、一切の感官的快感、即ち吾人と別の何等かの事物一般に對する快感といふものは、代表されてある。そこで此の如き吾官的快感に對立する唯一のものとして、吾人その人に對する快感、換言すれば根源的自己感情、即ち同感的自己感情といふものがある。併し此の種の快感は、もはや働作を根據となす所の快感ではなくて、働作に對する快感たるのである。

吾人は云うた。吾人は色又は味を統覺し、さうして斯かる統覺をなす事により、吾人は統覺の働作、並にその色彩を體驗する。換言すると、快感又は不快感を起すと。ところが吾人は、此の場合に於ては、色又は味といふ感官的事物を統覺する事により快感を起すが故に、吾人の意識に對しては、必然的に、快感は、かゝる事物、隨つて吾人と異なりたる或るものに迄關係せしめられる。即ち之は、吾人の意識に對しては、事物に「對する」快感となる。吾人が或る事物の統覺に於て得る所の感情なるものは、此の如くして、いつでも統覺された事物に關係されてある。否、一の感情が、或る事物に迄關係されてあるといふ事は、次の事以外のものを意味しない。それが事物の統覺中に於て起る。即ち之は、吾人が事物を統覺する事により、吾人が得る所の働作感情の色彩であると。

併しながら此の種の可能には、尙他の可能が對立する。他の可能とは、吾人が、敢へて吾人と別である事物を統覺し觀照しない。即ち之に對して活動して居ない。之に反し、吾人が、働作そのものを統覺し觀照するといふ事である。されどかゝる言明に對しては、直に附說されねばならぬ。曰く、吾人は、吾人自らの働作をば、それが同時に吾人に「要求」されてあるといふ事なしには、即ち吾人の中に於てそれを今再び遂行したり、若くは或る方法に於てそれと同樣に活動しようといふ一の傾向を發生せしむる事なしには、觀照したり、之を心裡に浮出せしめたりする事は能きないと。之を例へていふと、(一)吾人にして、吾人が構成した所の一の思想を浮出する或は或る事柄に對する一の見解に到達した內部的骨折を浮出すると假定する。(二)若くは吾人が幸にも落着成就せしめた所の實地上の計畫を浮出すると假定する。ところが此等の事は、兩場合に於て先第一に意味するのである。吾人は、それ〴〵此の際に遂行さるべくある所の內部的勞作、又は努力、內部的作業を浮出するといふ事を而も吾人は、此の如く過ぎ去つた働作を十分「浮出」せしむるには、どうしても之を內部的に現存せしめ、吾人の中に於ける現在のものとなさゞるを得ない。言ひ換へると、今內部的に之を遂行したり、再び自己體驗をなしたりする事なしには、その浮出は困難たるのである。

時によりては、吾人は此の如き事を全然又は十分になさないで、唯概略總觀的に遂行する事がある。併し此の如き時に於ても尙、新に十分なる自己體驗をなさうといふ傾向は、吾人の中に於て發生し、さうして吾人にして益〻多く過去の働作を「浮出」せしむるならば、かゝる傾向は益〻確實となる。今や吾人の過去、特にかゝる過去に屬したる働作は、吾人の現在の體驗中に進透し、かくて今再び吾人の中に於て存現しようとの勢力を取得する。

茲に至つて一の問題は起るのである。吾人現在の自我が、己れの中に存する內部的活動の傾向に對して如何なる態度に出づるか。それが之と調和してあるや否。即ち觀照せられ、さうして之と共に吾人現在の體驗中に進透する所の過去の働作が、かゝる傾向と調和してあるや否やと。而も之が調和してあるや否やに應じて、吾人は快又は不快の感情を起す。して又、かゝる感情とても、正しく吾人現在の働作中に於ける調和又は不調和の感情たるに外ならない。即ち此の場合に於ける快感なるものは、一方に於ては、過去から、吾人、即ち吾人現在の體驗中に進透し、その中に進向しようとする所の働作、他方に於ては、吾人現在の內部的狀態中に存する所の、吾人の活動の傾向との間の調和の感情である。さうして不快感なるものは、之に該當する所の不調和の感情たるのである。

されど此の場合に於て觀照し統覺せらるゝものは、吾人と異なりたる所の別の事物ではなく、之に反し正しく吾人の過去の働作であるから、之が故に、吾人の快感及び不快感も、かゝる働作に迄關係せしめられてある。又此の働作は吾人がその中に於て働作してある限りに於ては、或は過去の働作中に於て、各の働作に於けると同樣に吾人が存在してある限りに於ては、吾人に迄關係せしめられてある。此の故に感情なるものも、今や積極的の自己感情、或は消極的の自己感情となる。之は、吾人並に吾人の働作に「對する」快感又は不快感たるのである。

吾人は、此の如き狀態の下に於て發生する所の快感、隨つて吾人に對するかゝる快感をば、又、吾人の「可認」の感情、吾人に對する滿足の感情、場合によりては、前に用ゐた名稱たる「自尊」の感情と稱する。此の際の「可認の感情」といふ語の中には、判明に、それが調和の感情であるといふ事が存在する。けだし可認とは調和の謂に外ならぬからである。

して又、之と同樣に、かの不快感、即ち吾人に對する不快の感情をば、否認の感情、吾人に對する不滿足の感情、自己非難、自己否定、場合によりては、自己蔑視、慚愧の感情と稱する事が能きる。此の際に於ても亦「否認の感情」といふ語の中には、直接に、その感情が、矛盾、反對性、不調和の感情であるといふ事が存在する。そは、否認とは、內部的反對性の謂に外ならぬからである。

六　積極的感情移入と消極的感情移入、同感

右に述べた感情上の二種の可能に對して、更に第三の可能が存立する。而もかゝる可能こそ、實に感情移入のそれであるのである。上述の如く吾人は、吾人の働作に對して快感を起す。ところが斯かる働作は今や客觀化される。即ち吾人が、之を體驗する事により、吾人に對して直接に、吾人と異なりたる別の事物、例へば感官的に知覺されたる狀貌に迄、結合される。此の働作は、吾人から發出しないで、吾人と異なつたる別の事物から發出

する。即ちかゝる事物からして吾人の中に進透する。さうして今や吾人は、此の如く吾人の中に進透する所の働作が、吾人自らの自己活動の需要と調和するや否やによりて、快感又は不快感を起す。

此の種の場合と前述したる場合との關係は、容易く理解し得らるゝやうに、「異他」の働作即ち吾人と異りたる別の事物に結合された働作が、過去の吾人自らの働作、即ち過去のものとして、「吾人」即ち「現在の吾人」に附屬せず、之に反し吾人の中に進透するといふ働作に對するやうな關係である。さうして斯から過去の働作も、此の如くある限りに於ては、吾人即ち現在の吾人に對しては、客體である。簡言すれば吾人に對立する。之は恰も、かの異他の働作が、吾人の「一般的自我」に對して、客體、即ち吾人に對立すると同樣である。

されど吾人は今之に關し、特に、前に區別した二つの可能、即ち一には、吾人の中に進透する所の働作が、吾人の中に存在する傾向、即ち自己活動の需要と調和するといふ可能、二にはそれが矛盾するといふ可能に留意して見よう。此等兩場合に共通なる事は、働作が吾人の中に進透し、さうしてそれを吾人現在の體驗中に受納すべく要求するといふ事である。隨つて此の兩場合に於ては、吾人は、働作をば、先第一に、吾人の中に進透し、吾人に要求されたるものとして體驗する。同時に吾人は又、兩場合に於て異なりたる方法に於て體驗する。即ち一に於ては、吾人の現在の體驗中に吾人が自由に受納し得るものであつて、隨つて自由に受納する所の「要求」、他に於ては損害し敵對しながら吾人の中に進透する所の「要求」として體驗するのである。さうして此の第一の場合に於ては、吾人に要求せらるゝ所のものが、同時に吾人自らの自發的渴求の產物である。此の中に於ては此の如き渴求は滿足されるのである。

そこで此の兩場合に於て、吾人の中に進透する所の働作が、吾人によつて體驗せられ、さうして兩場合に於て尙、此の如く吾人の中に進透する所のものが、一の「客體」、即ち吾人と異なりたる別の事物に附屬する限りに於ては、吾人は、兩現象、即ち兩體驗をば、感情移入と稱せねばならぬ。けれども之と同時に、吾人は感情移入の二つの兩種類を相互に區別せねばならぬ。さうして之が爲には、此等をば、「積極的」感情移入と「消極的」感情移入として對立せしむる事にする。隨つて積極的の「感情移入」とは、吾人が、或る事物から吾人の中に進透する所の働作をば、自由、自發的に受納し、之を矛盾なく吾人自らの働作となすといふ事である。之に反し「消極的の感情移入」とは、働作が吾人の中に進透する。けれども之が吾人により內部的に排斥されるといふ事である。結極、積極的の感情移入は、彼れが如き調和の體驗であり、消極的の感情移入は、その不調和の體驗である。さうして其のやうな調和をば、吾人は又同感（シンパチー）と呼ぶ。その實の所、同感なるものは、吾人の意識に對しては吾人と別の事物に迄結合されてある所の或る心的のもの、即ち自我體驗が、吾人の中に進透し、吾人により自由に受納されるといふ事の意味に外ならない。之は吾人に取りて異他なる生活と、吾人自らの生活需要、即ち生活渴求との間の調和である。此の故に、吾人は又、積極的感情移入をば、同感的感情移入と稱するのである。

此の如き調和の中に於ては、吾人は、吾人自らの活動、吾人の生活衝動の滿足、隨つて一の生活肯定を體驗する。之と同樣に、かの不調和に於ては、吾人は、生活衝動の否定、生活否定、自己否定を體驗する。此の如くあるが故に、吾人は更に言明する事が能きる。積極的の感情移入とは、吾人が、或る「他のもの」から來る所の生活活動中に於て、吾人自らの生活肯定を體驗し、消極的の感情移入とは、或る「他のもの」から發生するものと

して、吾人が一の生活否定を吾人の中に於て體驗するといふ事である。之を換言すると、積極的の感情移入は、或る「他のもの」即ち吾人と別の事物中に於て體驗された生活肯定であり、消極的の感情移入は、或る「他のもの」に於て體驗された生活否定たるのである。

して又、純粹なる美的觀照に於て、吾人が依りて以て彼れが如き生活肯定を體驗する所のものを稱して、吾人は、「美」と呼ぶ。次に均しく純粹美的觀照に於て、吾人が依りて以て生活否定を體驗する所のものを稱して「醜」と呼ぶ。結極する所、美と醜との感情なるものは、客觀化されたる、即ち或る事物中に於て體驗されたる、生活肯定、又は生活否定の感情たるに外ならぬのである。

七　感情移入と聯想

以上の如く論述して來るといふと、吾人は尙一度、本書の第一卷中に於て、既に相互に對立せしめた所の感情移入の可能なる多くの場合を簡單に區別せねばならぬ。

但し之が爲には、吾人は、唯「一般の統覺的感情移入」と「自然への感情移入」といふ名稱を持出す丈の事にする。さうして之と同樣に、吾人が最終に擧げた所の「氣分的感情移入」といふ名稱をも持出す。

之に反し、吾人は尙一度、人間の感官的顯現への感情移入の本性に迄判然說及する。之に關し先第一に再び高調すべきは、人間の狀貌、言語、運動、靜止的の形、並に自然界の音響中に、一の內部精神的のものが、存在し（ヴーゲン）その中に於て表出（アウスゲルツケン）されるといふ事である。

そこで此の「存在」とか「表出」とかいふ事に關しては、是又前に、此の事實關係の一種の說明に對する吾人の反對論を確然提唱して置いた。吾人の反對せる一種の說明とは、此の如き「存在」、即ち他人の感官的顯現とその中に存在する所の生活との間の關係が、吾人に對し、一の比論（アナロギーシュス）の樣式に於て發生すると解釋するものである。此の種の說明法に對しては、今玆で力を盡して辨駁する事にしよう。

特に之に關して留意すべきは、此の如き比論は、その實可能ではないが、假りに可能であるとするも、尙單に、或る狀貌、運動、言語に迄、一の意識生活、例へば情緖が「附屬する」といふ事の知識を與ふるに過ぎない。然かはいふものゝ、此の如き生活發現に對し或る內部的のものが「附屬する」例へば悲哀の狀貌に悲哀が、「附屬する」といふ事などは、今此の所にて彼是論究すべき問題ではない。之に反し、かのやうな「存在」とか「表出」とかいふ事が問題である。而も此等の語たるや、全然右と異なりたる或るものを言明するのである。

かの石の可觀的性狀に迄は、堅硬といふ事が「附屬する」。併しながら此の堅硬といふ事は、かのやうな性狀中に、「存在」もしなければ、又その中に於て「表出」もされて居ない。之と同樣に、かの電光に迄雷鳴が「附屬する」。更に化學的物質の何等かの混合並にそれを熱する事に迄、一の爆發といふものが「附屬する」。されど之にも拘はらず、電光中に雷鳴が「存在」もしなければ、又化學的物質の混合中に爆發が「存在」もしない。さうして雷鳴中に於て雷光、爆發中に於て化學的物質の混合といふものが「表出」されてあると言明するなどは、何等の意義をなさないのである。

吾人は此の事をば、尙別の文句を以て發表する事が能きる。曰く、電光と雷鳴との間の連絡は、吾人に對して

は、一の聯想作用により發生すると。之と同樣に、今述べた石とか、化學的物質の混合と、それ〴〵の性狀との間の連絡も、亦此の聯想作用から發生するのである。之に反し、或る狀貌、例へば悲哀の狀貌中に於て、悲哀といふ情緒が「存在」するといふ事は、兩者が相互に聯想されるといふ事を言明しない。之に反し、かゝる心的のものが、かのやうな感官的に知覺さるべきものゝ中に「存在」するといふ事を言明するのである。

その實の所、此の如き「存在」とか「表出」とかいふ語の意義はかうである。吾人が他人の感官的顯現、即ち悲哀の狀貌の如き彼れに於ける一の生活發現を目視し、把捉する事により、同時に吾人は、その中に於てそのやうな情緒を把捉すると。即ち兩者は合體して唯一不可分の體驗を構成するといふのである。

但し斯く述ぶればとて、感情移入に關する事實關係は、未だ十分に說示されない。之に反しかゝる關係中に存する一の動力に對して、尙留意をせねばならぬ。而もかゝる動力（即ち次項に於て述ぶる働作）は、「表出」とか「發現」とか單なる「告知」とかいふ語の中に存するものよりも、恐らくは尙一層明瞭なるものなである。之を例へていふと、吾人が悲哀の狀貌を目視するならば、吾人が此の狀貌を唯事實的に「此の中に於て」目視する、即ち單に狀貌の中に於て、又狀貌と共に之を把捉するといふのではない。之に反し、吾人は同時に、狀貌をば、悲哀を告知する所のものとして把捉する。即ち悲哀をば、狀貌により告知されたるものとして把捉する。かくて悲哀といふものは、唯漠然と狀貌の中に存在する許りではない。更に此の中に發現されたもの、之により告知されたものとして存在するのである。

ところが此の如き告知とか發現とかは、是一の働作である。併しながら又、意識的か又は意識的に意志されたものではなくて、之に反し本能的或は衝動的働作たるのである。さうして此の事をば、吾人は又かういふ樣に言明する事が能きる。曰く、悲哀が、狀貌の中に於て、吾人に對し、悲哀により發生されたる或るものとしてそこにあると。此の如きものゝ中には、働作といふ動力は十分判明に存在する。けだし働作なるものは、正しく發生といふ事から成立するからである。

されど又、右の如き言明だけでは、玆に問題として居る事實關係は、未だ判然一義的に說示さるゝに至らない。即ち人によりては先第一に抗論するかも知れぬ。化學的物質のかのやうな混合からも、爆發は發生する。即ち爆發はかの混合により發生せしめられると。併しかゝる抗論に對しては吾人は答辯せねばならぬ。曰く、此の場合に於ては、發生といふことは、事實關係の中に、吾人により單に投入移植されたものであると。吾人にして、若しも爆發が物質の混合に繼いで起るのを目視する場合には、發生といふが如きものを目視しない。即ち發生に關する何ものをも目視しない。之に反し吾人はその繼起を目視する許りである。さうして吾人は同時に知得する。兩現象のかゝる繼起は是必然的のものであるといふ事、即ち經驗から發生した法則に基いて吾人により思念されざるを得ないといふ事を。然るにかの悲哀の場合に於けるやうな「發生」といふことは、繼起といふ事實を意味しない。又必然的に思念さるべき繼起をも意味しない。之に反し此の如き「發生」といふ語は、全然特異なる意識體驗を表示するのである。

更に他方に於ては、吾人は他の場合に、此の如き發生をば十分明瞭に體驗する事がある。例へていふと、吾人は直接に、或る不協和の表象からして、その不協和を弛解すべくある所の樂音、即ち和諧といふ表象が、如何に

して發生するかを感じたり體驗したりする。吾人は彼れが如き表象が、如何にして此の如き表象を發生せしめ、それを吾人に强制したりするかを感ずる。

併しながら此の如き第二の場合に於て、發生といふものは確かに體驗せらるゝには相違ないが、さり迚之は、「發現」や「告知」といふものではない。卽ち不協和の表象なるものは、それを弛解する所の樂音、卽ち和諧の表象の中に於て告知されない。之を他語を以て表出すると、不協和といふ表象中には、かの一の情緒が狀貌中に「存在」するといふ意義に於て、弛解する所の和諧といふ表象の特異にして直接なる「存在」といふものは缺損するのである。

此の如くあるが故に、吾人は最後に言明せねばならぬ。かの狀貌の例に就いて云ふならば、悲哀の狀貌と悲哀との間の連絡は、全然特異なるものであつて、此の上言說し得べからざるものであると。さうして斯かる連絡は啻に特異なる性質を有するのみならず、同時に又、特異なる一の親密性を有する。吾人にして若しも次の如く言明するならば、吾人は之を判然承認する。曰く、兩者間の關係は、一種の同一性といふそれである。而も此の同一性たるや、かの論理的同一性と少しも交涉をなさないものたるのであると。畢竟するに悲哀が「表現」しその表現は狀貌である。或は狀貌なるものは、表現された悲哀である。此の故に又狀貌は悲哀である。勿論之は悲哀自體ではなく、之に反し正しく表現された悲哀である。此の如くあるのは誠に奇妙な事である。何となれば、他方に於ては、之にも拘はらず、狀貌と悲哀とは相互に絕對的に比較し得べからざるものであるからである。されど正しくかゝる奇妙なる事は存在し、さうして此の事は、如何に一個人の狀貌、並にその一般の感官的顯現中に於て、吾人に對し、一の內部的のものが存在するかといふ方法の特殊の本質となる。之は恰も吾人に對し、個人の身體と精神とが相互に結合されてあると同樣である。吾人は又言明する事が能きる。右の事は吾人が人間の身體と呼ぶ所の物體が、吾人に對し、此の如きもの、卽ち一の精神を有するといふ事、卽ち吾人と同種類なる心靈的の或るものを表現するといふ、意識の特異性となり居ると。

而も此の如き特異性は、かの比論とか、又は合經驗的の聯想とかを持出す事によつて、決して說明さるゝ事は能きない。假りに吾人にして、今用ゐた所の特異なる「同一性」といふ槪念を棄却するも尙、各の場合に於て、狀貌と、その狀貌が告知する所のものとの關係、換言すれば　一個人の感官的顯現と、その中に於て吾人に對して存在する所の內部的のものとの關係、或は之を一般的に云へば、かゝる兩動力、並に兩動力の交涉に關しては、吾人は次の如く主張せねばならぬ。第一には、悲哀が狀貌中に於て告知され、その中に迄流出若くは放散し、それに對して此の如き能働的關係、卽ち働作關係に立つといふ事である。第二には、悲哀が、狀貌中に於て必然的に同時に把捉せられ、直接にその中に存在するといふ事である。されど兩動力並に兩動力の交涉に就いて、隨つて、一方に於ては狀貌中に存する所のもの、他方に於てはかゝる狀貌との間の關係、尙之をより一般的にいへば、一の感官的のものと、その中に存在し、その中に於て表出さるゝ所のものとの間の連絡の特性を確定する所のものは、かの「聯想」などの中には存在しないのである。或は同一の事項の發表になるのであるが、此等一切の關係は、彼の、與へられたる感官的のものと、或る事物との單なる連絡に關する經驗的意識、卽ち經驗から發生し經驗的事實から歸結された意識中には、存在しないのである。

されど玆にいふやうな事實關係の、比較し得べからざる特異性なるものは、それに應當する所の、その發生の特異性を前提するのである。言ひ換へると、事實關係の特殊の說明を要求するのである。さうして此の種の特殊の說明とは、曾て唯一の可能なる說明として擧示したものに外ならぬのである。卽ち吾人は曾て、此の事實關係をば、一方に於ては摸倣の衝動、他方に於ては、內部的現象、興奮の發現の衝動に歸着せしめた。さうして此の如くして、吾人は、各人により知得せられ、各人により許容せられたる一般的事實に迄、右の事實關係を歸着せしめたのである。併しいふ迄もなく、かゝる一般的事實とても、此の上何ものにも歸着せしむる事の能きない最終のものたるのである。

之をより精密にいふと、各個人の外部的顯現と、その中に存在する內部的のものとの間の連絡の發生、卽ちかゝる連絡の吾人に對する發生は、次のやうに思念さるべくある。吾人自らが悲哀を感ずるといふと、吾人は先第一に、悲哀の狀貌に於て、それを發現し告知しようとの傾向を體驗する。かゝる傾向は何人も知得し居るのである。之は各人に對し、若しも何等かの事情からして、悲哀の心態中に於て、喜悅し居る狀貌をなすべく强制さるゝ時には、可感的の傾向となる。されど此の際、吾人の直接なる體驗の言明によると、情緖の身體的發現のかゝる傾向は、實はその情緖に對して附加せらるゝのではない。卽ち之は情緖と並列して居る體驗ではない。之に反し情緖から可感的に發生する。隨つてその根源に於ては、その中に包有されてあり、その中に、その本質の一方面として直接に包有されてあるのである。

さうして今吾人が、他人に於て悲哀の狀貌を目視するとする。此の場合には、吾人の中に於て摸倣の衝動が働く。すべて他人の狀貌の知覺、把捉は、吾人がその進行の如何にあるかを知る事なしに、かゝる傾向を喚起せしむる。併し之に關しても吾人は直に言明せねばならぬ。かゝる身體的働作卽ち「發現」の傾向は、摸倣の衝動の際に、他人の狀貌の把捉作用に迄附加せらるゝ別の或るものではない。之に反し、かゝる把捉作用中に、その一要素として直接に與へられてあるのである。

此の如く吾人により今體驗された傾向なるものは、正しく、以前に悲哀の情緖中に於て直接に與へられた傾向そのものなのである。此の如き體驗の一部が、此の故に今再び吾人の中に於てある。さうして斯かる一部は、今や合自然的に、卽ち一般的の心理法則に基き、己れ自らを完充しようとする。詳しくいふと、今吾人の中には、曾て體驗されてかの傾向に迄附屬して居つた情緖狀態に迄復歸しようとの傾向が發生する。さうしてかゝる傾向は、若しも妨害するものがなかつたなら、實現せらるゝのである。

併し此の種の情緖は、一方に於ては、知覺された狀貌に迄結合されてある。或は吾人が右にいうたやうに、その狀貌の把捉作用中に於て、直接にそれの要素として存在する。更に他方に於ては、此の狀貌中に、均しく直接に情緖が存在する。さうして之と共に、此の情緖も亦、目視された狀貌に迄結合されてある。卽ち此の中に存在する。されど同時に、此の情緖は、その中に於て、己れ自身からその狀貌の發生を遂げようとする所のものとして、卽ちその中に於て發現さるべく進向するものとして存在する。

そこで今上述したる凡ての事項を統括すると次の如くなる。吾人は、他人の狀貌中に於て直接に、情緖をば、その中に於て告知さるゝものとして體驗する。此の逆に、此の如き方法に於てのみ此の事實は解釋さるべくあ

る。

最後に、吾人は、之に關し、勿論前に高調したものを想起せねばならぬ。それは、かの狀貌が、發哀の發現であり、さうして悲哀は、狀貌中に於て、その中に發現さるゝものとして直接に存在すると同樣に、かの判斷や思認や確信等は、一の文章中に於て發現せられ、その中に於て直接に存在するといふ事である。そこで此等二つの場合に於ては、吾人は、吾人が本能的に發現を要求するものとして體驗した所のものをば、吾人に對立する所の一の感官的のものゝ中に於て客觀化をする。さうして兩場合に於ても、此等事實關係の發生顚末は同一たるのである。

然かはいふものゝ、兩場合の異なる點は、既に述べたる如く、思認や確信や判斷が、何等の働作ではないといふ事である。之に反し、悲哀なるものは、成程各個的の働作ではない。けれども之は、精神的働作、卽ち吾人の內部的活動の方法である。換言すれば吾人の中に於ける一般的の力の活動の方法である。但し吾人は、上に述べたる理由よりして、唯可感的のものゝ客觀化のみを感情移入と稱する。さうしてかゝる可感的のものは唯働作のみであつて、且つ之と共に、かゝる働作の色彩も亦可感的のものとなる。此の故に吾人は、此の際、一の文章の中に一の判斷が存在するといふ意識をば、單に自己の客觀化と稱し、さうして働作並に働作の可能の客觀化に對してのみ、感情移入といふ名稱を附與する。

八　美的事物の「聯想的因素」

以上の外に、吾人は今此の所で、特に次のやうな說明に關連する所の一の補說を附加せねばならぬ。先づその說明とは、一の感官的のものゝ中に、或る內部的のもの、一の生活、卽ち吾人自我の一の働作、又は總働作の方法が、吾人に對して存在するといふ事は、決して兩者が聯想によつて結合されてあるといふ事を意味しない。簡言すれば感情移入といふ反動なるものは、聯想ではないといふ事である。

そこで、吾人が此の如き說明に對して附加しようと欲する所の補說なるものは、次述の如くかゝる說明中に存する見解の擴張を遂げようとするものである。

古來、美的事物の「聯想的因素」といふ事は常に語られて居つた。ところが斯かる聯想的因素なるものは、一般的には存在しないのである。言ひ換へると、美的事物の直接感官的に與へられたる因素に聯想されてある所の何ものも、かゝる美的事物には附屬しない。卽ち此の如き如何なる要素も、美的觀照に對して一般的に存在しない。隨つて之は、かゝる事物を美的のものになすに就いての貢獻をなす事は能きぬ。

更に又世に、「必然的にして且つ一義的なる」聯想と、必然的一義的でない所の聯想との區別を試みる者もあるが之とて十分しない。けだし最も必然的にして又最も一義的なる聯想と雖も、それが正しく必然的にして一義的なる聯想以外のものでない間は、美的事物又はその感官的顯現と聯想されたるものをば、その美的因素となす事は能きぬ。之を簡言すると、美的事物の聯想的因素といふ語、並に「フエヒナー」がなした所のそれの「直接的」因素と「聯想的」因素といふ區別も、全然成立し得べからざるものたるのである。

之を例へていふと、一の繪畫が親愛者から吾人に贈與されたと假定すると、その繪畫と「親愛者」との間にも、

最も密接なる聯想が發生する。けれども其の此の如くあるといふ事は、少しもその繪畫の美的本質と交渉をなさないのである。

人によりては或は云ふかも知れぬ。かゝる聯想は是一義的にして且つ必然的なるものではないと。併しながら若しも此の如くあるとすると、一體一義的にして且つ必然的なる聯想とは如何なるものであらうか。之に對し彼等は右の實例に就いて單に次の如く言明するのである。曰く、繪畫と、それが親愛者から吾人に贈與されたといふ事情との間の聯想は、決して一義的にして必然的のものではない。即ち繪畫そのものゝ中には、之に關する何ものも「存在」しない。此の「存在」といふ意義をば、一般に、一義的にして且つ必然的なる聯想といふものは有すると。併しながら一の感官的に知覺されたものゝ中に、直接に或るものが「存在」するといふ事の中には、正しく單なる聯想以上のものが常に「存在」するのである。

吾人が茲に就いて語り居る所の親愛者、或はそれをして親愛者たるに至らしむる所のものは是一の心的のものである。されど吾人は今、一の物的のものが感官的に知覺された或る事物と「聯想」せらるゝ所の一の實例を取りて見よう。

かの何等の支持物なく空中に懸垂する所の重量ある物體の表象に對しては、落下の表象が結合されてある。さうしてかゝる聯想は、他の聯想と同樣に「必然的」のものである。併し其の此の如くあるといふ事は、藝術家が重量ある物體をば懸垂しつゝあるとして描出するを妨げない。さうして經驗は指示するのである。落下といふ思想なるものは、此の場合に美的に問題とならないといふ事を。人にして若しも之に對し、「美的觀照に對しては、此の如き聯想は何等の必然的のものではない。美的觀照に於ては、聯想なるものは、存立して少しも效果を及ぼさない」と答ふるならば、かゝる答への中には、最も必然的なる聯想と雖も、尙美的事物に對しては無意義であるといふ事の承認以外の何ものも存在しないのである。さうして此の事は更に意味するのである。經驗的聯想なるものは、一般的に、純然たる聯想そのものとしては、美的に少しも交渉を及ぼす所はないと。吾人は今擧述したやうな聯想に關しては、更に言明する事が能きる。聯想なるものは、美的には無意義である。何となれば、それがよしや可能的に必然的のものであるにもせよ、懸垂といふ狀態の中には、落下といふ思想は少しも「存在」して居ないからであると。

かゝる言明に對しては、都合によると反對する者があるかも知れぬ。曰く、右の如くあるにも拘はらず、吾人は繪畫中に於ける物體の平面的描出をば、三次元的(チヤンシヨナル)のものと解釋する。例へば一の家の透視畫法的に異動された狀景といふものは、吾人に對しそれ自身に於て透視畫法的に異動されて居ない家を表現する。さうして其此の如くなるのは、是經驗的聯想中に於てその根據を有するからである。同時に又、此の如き三次元的解釋は、決して不適切のものではない。かゝる解釋は、吾人が繪畫より取得すべくある所の美的印象の重要なる前提である。之と同樣に、吾人は、繪畫の後方に於けるより小さく描出された形體に對し、經驗的聯想により、その現實の大さを與へる。而も此の如きは、繪畫の美的觀照に對して重要なる意義を有すると。

併し此の種の場合に關しても亦、吾人は、繪畫と、それが「表象する」ものとの間の連絡は、全然其の語の通常の意義に於ける聯想であるといふ說に反對せざるを得ない。但し此の如く反對するのは、此の場合にも亦感情移入

作用が存するといふ事を意味しない。けだし透視畫法的に描出された家の現實の形體、小さく畫かれた人物の現實の大さは、確かに知覺されたものゝ中に感じ込まれないには相違ない。けれども又吾人は、此等をば直接に「此の中に於て」「目視」する。即ち此等は吾人に對しその中に於て「存在」すると云はねばならぬ。吾人は、かの懸垂する所の物體の知覺に對して落下の表象、或は石の光學的知覺に對して其の堅硬の表象を結合すると同樣に、今目視する所のものを目視し、さうしてそれに迄現實なる事實關係の表象を結合しない。之に反し吾人が感官的眼を以て目視する所の平面的繪畫中に「於て」、吾人は三次元的物體を思念する。即ち精神的眼に對し三次元的物體が提示せらるゝのである。之と同樣に又、吾人は同一の「精神的眼」を以て、小さくされた形體中に於て、それ自身に於て決して小さくなく、之に反しそれが前方に於て立ちし時と同樣に大きくある所の人間を「見」る。かくて吾人が感官的眼を以て目視する所のものは、吾人に取りては、それを用ひて意味せしめたもの、即ち精神的眼を以て「見るものゝ」代表者即ち象徵である。之は吾人に或るものを「表出」しない。之に反し或るものを「意味」せしむる。之を簡言すると、吾人が目視する所のものと、吾人が目視しないが、それかというて美的事物に迄附屬する所のものとの間には、一種の象徵的關係が存立する。かゝる關係の發生に際しては、經驗といふものが甚だ多く關與するとはいへ、而も斯かる關係は、單なる合經驗的結合と同意義のものではない。茲にいふ象徵的關係なるものは、或る狀貌と、それが表出する所のものとの間に存立するが如きものと同一ではない。之に反し、之は、「現象」と「その現象中に顯現する」所のもの、即ちその中に思念さるゝものとの間の象徵的關係である。併しながら此の如き象徵的關係とても、その究極の根據、その固有の心核に於ては、各の單なる經驗的聯想とは原理上異なり居るものたるのである。

此の如くあるよりして吾人は又同時に理解するのである。一方に於て、美的事物の感官的に知覺された要素、即ち其の「直接」なる因素、他方に於てはその美的事物に迄附屬する他のものとの間の關係が、あらゆる場合に如何なる種類のものであるかといふ事を。之はいつでも一の象徵的關係である。されど彼れが如き要素と、美的事物中に「表出された」心的のものとの間の關係は、「感情移入的關係」といふ特殊の名稱を帶ぶる所の一種の象徵的關係たるのである。

かゝる象徵的關係の研究、特に感情移入的關係の研究、「意義」特に「表出」といふものゝ特殊の本質を構成する所のものに關する思索は、感情移入の概念、隨つて又美的同感の概念、並に知覺物中に直接に與へられたるものゝ外に、何が美的事物中に迄附屬し、若くはその事物を構成するかといふ問題等を深く研究するに就いての、各人に對し缺くべからざる條件たるのである。

第二章　美的觀照

一　美的觀照の一般的本質

以上の如く述べ來るといふと、吾人は尙一度、一般的の感情移入、隨つて特に積極的の感情移入と消極的の感情移入との兩者に共通なる點に迄、復歸するやうになる。併しながら吾人が此の如く復歸するのは、今他の方向

へ吾人の考察を轉ぜんが爲たるのである。

そこで此の兩者に「共通なる點」とは何であるかといふに、之は、或る事物から吾人に迄、生活或は働作、或は生活活動の方法等が進透するといふ事である。して又かゝる進透は、二つの假定の下に立つのであつて、而もかゝる假定たるや、之迄隱默の間に與へられたるものと認められて居つたのである。けだし美的感情移入といふ概念中には、之は常に包括されてある。併し又之が故に、尙一度次に之を說述せねばならぬ。

吾人は曾て述べた。吾人が表象し思念する働作なるものは、其本性として、吾人が今此働作を再び體驗しようとの傾向を起す事なしには、得て表象したり、思念したり、觀照したり、浮出したりする事の能きないものであるといふ事を。然るに吾人は常に任意の人間に對し、任意の感情、卽ち任意の働作、又は內部的活動の任意の方法、例へば心からの歡樂等を思念し込むことが能きる。さうして吾人は、たとひその人間の中に、かゝる心態がその實存しないといふ事を知得するにもせよ、尙此の如き事をなすのである。但しかゝる場合に此の如き事をなすならば、吾人により思念し、さうして其の人間の中に思念し込まれた歡樂なるものは、吾人自らのものとはならない。更に、吾人にして、その人間の中に實際歡樂が存しはしないかと想像するにもせよ、尙之を感ぜない。卽ち吾人の中に於て之を體驗しない。否啻に之に止まらない。その人間がたとひ眞に歡樂して居るといふ事を吾人が知得すると假定するも、吾人のかゝる知得は、彼の狼星（シリウス）が太陽よりも甚だ大であるといふ事の知得位に止まる。さうして斯くある極、吾人が感情移入と稱する效果は發生するに至らない。而も又此の如く述べ來る事により、吾人が上に擧げた感情移入の二つの條件は略示されたのである。

吾人は先第一に云うた。感情移入作用なるものは、他人の中に思念し込まれた歡樂を他人が實際感じないといふ事を吾人が知得する場合には、起生しないと。或は都合によると彼れが歡樂して居りやせずやと想像する場合にも、之は起生しないと。そこで此等の場合に於ては、吾人は成程歡樂をば人間の中に思念し込むが、併しかゝる事をしてはならぬといふ事を知得し居る。卽ちかゝる事をせねばならぬ理由を發見する事が能きない。さうして之は、兩場合に於て次のやうな事を意味する。働作卽ち內部的生活活動の方法の表象、例へば歡樂なるものは吾人の中に於ては、確實卽ち無抗爭、無疑惑のものとして存在しない。之に反して抗爭される。詳しくいふと、之は、此のやうな表象作用を遂行する事を禁止する所の事實により、又はその表象作用が果して適當するかとの疑惑により、抗爭される。卽ち此のやうな表象作用は實行されぬかも知れぬといふ思想、更に換言すれば此の如き表象作用に反對する所の思想によつて抗爭されるのである。されど其の如くあるといふ事は、表象された働作が、それ自身に於て、吾人により今體驗さるべき傾向を有するといふ事を妨げない。併し又、若しも此の表象に反對し矛盾する所の表象にして興起するならば、かゝる傾向に反對する所の傾向が起つてそれを消滅せしむる。さうして此の如くあるが故に、今や實際に於て、吾人現在の體驗中に、表象された働作の進透するやうな事はない。ところが此の如く進透するといふ事こそ、感情移入作用の第一條件たるのである。

さうして之と同時に言明せらるゝのは、感情移入作用が起生するが爲には、その感じ込まるゝ働作の表象が不可抗爭的のものでなければならぬといふ事である。卽ち一の「反對表象」が興起せず、さうしてそれの吾人の中への進透が禁止さるゝといふ上述の如き意義に於て、不可抗爭的のものでなければならぬのである。

されど感じ込むべくある所の心的のものゝ表象の此の如き不可抗爭性といふもの丈では、感情移入が事實的に發生するには十分しない。吾人は右に第二場合として述べたのである。或る他のものが歡樂を感ずるといふ事を表面的に知得すると雖も、尙之は感情移入とはならないと。感情移入なるものは、積極的に言說すると。次のやうな事を意味する。若しも感情移入が起る場合には、卽ち表象された働作が吾人現在の體驗中に進透する場合には、吾人共の人の側に於ても、その働作をなし居る所の人間の中に、或る意義に於て「進透」し、かくて思惟的に進透せねばならぬ。換言すると、吾人は、彼れがある如き人間、特にその人間の働作に對し、觀照的に吾人を打任せ、さうして觀照的にその中に停留せねばならぬと。吾人にして、彼れの中に於ける內部的興奮を單に思念するのみならず、更にそれに觀照的に吾人を打任せる事が多ければ多い程、益ゝ多く吾人は、此の興奮、卽ち右の場合に於ては歡樂が吾人の中に進透するのを感じ、その結果之により高上愉快にされて吾人を感ずるのである。

今玆に述ぶるやうな感情移入の二個の條件は、美的感情移入に於ては、必然的に充たされる。之は美的感情移入の前提を構成し居る所のものにより、直接に與へられる。さうして斯かる前提とは、取りも直さず純粹なる美的觀照たるのである。

さうして之と共に、先第一に言明せらるゝのは、各の感情移入が、美的感情移入ではないといふ事である。その實の所、感情移入には、二種の可能がある。之を例へていふと、吾人は悲哀に打たれ居る或る人間を見る。卽ち彼れの狀貌が、吾人に悲哀の印象を與へ、同時に吾人はかゝる印象が現實の事實關係に該當するといふ事を知得する。此の故に、吾人は、此の人間が悲哀を感ずるのを知得する。かくて吾人にして吾人が「目視」する所のもの、並に同時に現實に該當する所のものとして認識する所のものに、吾人を打任す事により、悲哀が吾人自らの中に進透し、吾人が之を感じたり共同的に體驗したりする。併しながら又、吾人は、此の如き場合の特殊なる點に迄留意をせねばならぬ。卽ち此の場合に於て吾人が感じ込むものは、同時に客觀的の存在を有する。さうして之が善に事實的に存在するのみならず、吾人は又此の事を知得する。そこで斯かる感情移入をば、吾人は「實際的の」感情移入と稱しようと思ふ。かくて此の「實際的の感情移入」とは、感じ込まれたものゝ客觀的現實の知識と結合せられて居る所の感情移入たるのである。

併し此の如き場合の外に、吾人は尙他の一の場合を對立せしむる。今再び前の例を取上げ、吾人が悲哀なる狀貌を目視すると假定する。さうして此の場合に於て、若しも吾人にして、「此の狀貌の根柢には現實の悲哀が存するや否や」との疑問を提起するならば、之に對しては、吾人は然りと答へる事もあらうが、又都合によりては否と答へる事もあらう。けれども實際に於て、吾人は此の如き疑問を全然提起しない。之に反し單に狀貌の與ふる印象に迄吾人を打任かす。さうして吾人は、斯かる印象に迄吾人を打任かす事により、吾人は共同的に悲哀を感ずる。吾人は、よしやかのやうな疑問を提起せず、隨つてそれを敢へて肯定しなくとも、尙此の悲哀を感ずる。而もかゝる感情移入こそ、實に美的感情移入たるのである。之を一般的に言明すると、感じ込まれたものゝ現實を彼是吟味する場合には、之は實際的の感情移入であり、之に反し少しも之を問題としない場合には、美的感情移入となるのである。

さうして吾人が、前に美的感情移入なるものは、純粹なる美的觀照といふ前提の下に立つ感情移入と云うたの

は、右の如き疑問を提起しないといふ事を指すのである。

併し吾人は尙一瞬間、かゝる美的觀照の本性に立止まつて考察して見よう。吾人は一體あらゆる種類の事物を見地から觀照する事が能きる。例へていふと、一の藝術品をば、歷史的見地、經濟的見地、財政的見地から觀照するが如きである。ところが、此等凡ての觀照の方法とは、美的觀照なるものは異なつて居る。然らば美的觀照の特性とは何であるであらうか。かゝる疑問に對しては、吾人は、彼れが如き非美的觀照法に共通なる點を確定する事により解答する事が能きる。その共通なる點とは次の如きものである。即ち此等凡ての觀照法に於ては、藝術品をば、觀照しながら超過し去る。或は之を一般的にいふと、その與へられてあるが如き被觀照事物を超過し去るのである。そこで歷史的觀照法は問ふのである。吾人はかゝる事物から何を學習し得るかと。次に經濟的觀照法は、之から何程の金が受取られ得るかと。ところが此の如き觀照法とは、美的觀照法なるものは、單にかういふ點に於て異なるのである。それが決して斯かる問題に着觀しない。之に反し、事物をば、單にその有りの儘に觀照し、さうして其の中に、彼れが如き各の副貳的思想なしに、何が存在するかを吟味するのである之を簡言すると、美的觀照といふものは唯純粹なる觀照である。即ち或る與へられたる場合に於て、その觀照のみを問題となし居る所の事物の觀照たるのである。

但し之と共に特に或る一つの事が言明される。曰く、美的觀照なるものは、被觀照物の現實又は非現實を吟味しないと。吾人にして、之に關する疑問を提起するや否、吾人はその有りの儘の事物を超過し去るやうになる。何等の事物と雖も、それが現實に該當するとか該當しないとかの爲に、それ自體に於て異なりたる別のものとなる事は能きぬ。隨つて又、合現實か否かとの問題なるものは、その有りの儘の事物に關する問題ではない。即ちもはや純粹に事物並にその性狀に關する問題ではない事になるのである。

此の如くあるが故に、吾人は又此の事を簡單に表出する事が能きる。曰く、美的觀照なるものは、絕對的に合現實といふ問題に對し無關係に立つ所のものであると。或は之を他語を以てすると、之は、事物をば、經驗的に統覺し觀照しない。之は寧ろ之をば純粹の質的に觀照する。そこで美的觀照とは、純粹なる質的統覺である事になる。同時に又、此の美的觀照は、事物の中に進透し、その中に沈潛し、その中に停留する所の觀照である。さうしてそれが此の如くあり得るのは、それが、事物そのもの、並にその中に存在する所のもの以外のものに關し、少しも疑問を起さないからであるのである。

二　美的事物の「美的理念性」

吾人は今茲では、前に述べた美的觀照の第一種の特性に立留つて考察して見よう。吾人は之に就いては、先づ觀照された事物に關する一の區別に留意して見ねばならぬ。凡て美的に觀照された事物中に於ては、常に二種のものが區別さるべくある。第一には、感官的に與へられたるものである。例へていふと、大理石の彫像に於ては、之々に形成された大理石塊である。第二には、此の如く感官的に與へられたるものゝ中に存在する所のもの、即ちその中に描出された生活である。美的事物の此等二つの要素に關しては、美的觀照に於ては合現實に關する問題は一切提起されずにある。即ち美的觀照者は、大理石塊を目視し、その目視する儘を把捉する。さうして之と共

に、かゝる大理石塊に關するものゝ美的觀照の任務は完了される。美的觀照なるものは、之以上に進んで、かゝる大理石塊が、自然科學者に取つて如何なるものであり、隨つてそれが自然連絡中に於て如何なる位置を占むるかなどの疑問に關しては、敢へて推究をなさない。此の如くあるが故に、例へていふと美的觀照に於ては、大理石塊が死物であるとか、その性質上、その中に鼓動し居る所の人間的生活といふ思想とは不兩立であるとかいふ事などを認めない。之に反し、之に於ては單に、大理石塊を目視する。さうして之と共に、如何にそれが加工されてあるか、如何なる外觀を有するかを目視する。之に反し、直接なる感官的印象の外に存する所の省察の產物、換言すれば之を超越する所の知識の內容が何であるかの如き事には少しも關心をなさないのである。

此の事をば、吾人は曾て次の如く述ぶる事により發表した。曰く、美的觀照に對しては、その事物の感官的に與へられたるものは、單に「顯現」卽ち「形相」(ビルド)であると。併し此の事は決して次の如き事を意味しない。吾人が、大理石塊が現實的のものでないと思認するとか、恰も之が單に一の「顯現」であるかの如くに見做して一の「錯覺」に吾人を打任すとかいふ事を。之に反し之と共に言明せらるゝのは、大理石塊なるものは、吾人に對しては、正しく吾人が之を目視する時に目視する所のもの、並に吾人が之に於て直接に認知する所のものであるといふ事、且つ大理石塊が事實的に屬する所の物理的の現實連絡からは、吾人の觀照に對しては、全然それが離斷されてあるといふ事であつて、さうして是以外の何ものをも言明しないのである。

併し之と同時に又、藝術品の內容、隨つて大理石塊中に存する所の生活なるものも、吾人に對しては現實の外に取去られてあるのである。かゝる生活とても亦、吾人に對しては、たゞ吾人が吾人の前に「目視」する所のものに過ぎないのである。否吾人は、實際に於て、感官的の眼を以て此生活を「目視」しない。之に反し吾人は、此の生活を思念し、之を吾人の中に於て共同的に體驗する。換言すると、かゝる生活が吾人の體驗の中に進透する。併し吾人は、此の生活をば、正しく大理石塊に「於て」認知する。卽ち此の生活は、吾人或は吾人の直接なる觀照に對し、大理石塊中に存在するのである。更に之を他語を以ていふと、吾人は、大理石塊中に於て吾人に對して存在する所の生活をば、單にそれが其の大理石塊によつて吾人に與へらるゝが如くに受納するのである。

さうして此の事は、特に下のやうな事を意味するのである。吾人は、彼れが如き生活の現實又は非現實を彼是推究しないと。けだし大理石塊中に描出された生活なるものは、既に「描出」(ダールシテルング)といふ語そのものが示すやうに、實際に於て現實的のものではない。併し吾人は、美的觀照に於ては、それが現實でないなどゝいふ事を決して言明しない。之に反し、それが現實であるといふ事も、將た現實でないといふ事も、一切問題となさない。吾人に對しては單に一つの事實が存するのみである。曰く、生活が吾人に對してそこにあり、さうしてそれが大理石塊中に存在し、又それがある如くにあると。吾人はかゝる生活をも亦、たゞ質的に、卽ちその內容の點から觀照する。卽ちそれが如何にあり、又その中に如何なるものを包有するかといふ事のみに留心する。吾人は、正しくそれがある如くにあるが故に、それが吾人に及ぼし得る印象に對し、吾人を打任かすのである。

此等二種の事、卽ち第一に、美的觀照に於て、形成された大理石塊が如何に吾人に對してそこに存在し、さうして吾人に對立するかの方法、第二にその石塊中に存在する所の生活が如何に吾人に對立するかの方法との兩者を統括して、美的事物の「美的理念性」と呼ばうとするのである。かゝる美的理念性は、例へていふと、吾人の

感官に提示さるゝが如き美的事物、又はその中に存在する所の生活が、現實でないと、吾人が思認するといふ事を言明しない。之に反し、吾人が之を觀照しながら、かの現實も非現實も一切問題とならない範圍、即ちかゝる合現實的問題と全然無關係なる範圍、換言すれば此の如き意義に於ける純粹なる理念的世界に迄それを送り込むといふ事を言明するのである。

三　美的內容の「美的離隔性（インソリールトハイト）」

以上の如く述べ來るといふと、吾人は直に右の美的理念性のいはゞ反對面を構成する所の要素に留意をせねばならぬ。蓋し美的事物の內容なるものは、美的觀照に於ては、特に純粹なる理念的世界に迄屬する。即ち此の如き世界を構成する。されど他方に於ては、かゝる內容は、一の美的事物の內容として、常に或る感官的のもの、例へば現實の人間の感官的顯現、又は藝術的に形成された大理石塊の感官的顯現に迄、結合されてある。之は唯一般的に吾人に對してそこに存在する許りではない。更に之は、かゝる感官的のものゝ中に存在する。即ち此の如きものゝ中に迄轉置されてあるのである。

さうして此の如くあると共に、美的事物の理念的內容、即ち一の理念的範圍の中に轉置された內容は、此の他の吾人に對して理念的存在を有したり又は有し得たりする所のもの、例へば吾人の思想、想像、夢、歷史的回憶等の內容から、絕對的に區別されてある。美的事物の內容なるものは、此の如き特異なる存在法の爲に、一の特異にしてそれ自身として存立し、且つ一般的に可能なる理念的事物の世界から分離されたもの、簡言すれば、全然それ自身の中に離隔されある理念的世界となる。吾人はそこで此の如き事實をば、判然、美的事物の內容の「美的離隔性」といふ名稱を以て呼ぶ。此の如くして、美的事物の內容の「美的離隔性」なるものは、その美的事物或はそれを美的事物となるに至らしむる所の美的觀照の特異なる性質となるのである。

四　「美的客觀性」

前に述べたる美的理念性と同時に、吾人が他の所では又「美的現實性」と稱し、而も茲では寧ろ「美的客觀性」といふ語を用ゐようとする所のものが、說示せらるゝのである。かゝる客觀性といふ賓辭も亦、特に美的事物の內容、隨つてその中に存在する所の生活といふものに迄附與される。此の如き「美的客觀性」なるものは、その實の所、美的事物に迄結合されたる生活の吾人に對しての單なる存立といふ事の中に直接に包括されてある。換言すると、その合現實に關し吾人が彼是吟味する事なしに、その事物中に存する所の働作の吾人に對しての存立といふものゝ中に包括されてあるのである。

此の如くして、美的客觀性とは、正しく、美的事物の內容が、吾人に對し疑問なくそこに存在するといふ事に外ならぬのである。即ち先第一に、吾人の前に完全に、美的事物の感官的のもの、例へていふとかの形成された大理石塊が疑問なく明白に存在する。されど又、かゝる大理石塊の中には、描出された生活も存在する。此の故に、かゝる生活は、吾人に對し、感官的のものゝ中に於て與へられてある。さうして此の生活は、その中に於て單に吾人に與へられてある。即ち之は、吾人に對し、彼の美的理念性の爲に、無疑問、無疑惑に、簡言すると、

絶對的不可抗爭なる方法に於て與へられてある。吾人はそれが現實であるや否やなどとの疑問を起さないが故に又、それが此の如きものであるや否やなどと疑惑する事も能きないのである。

そこで此の如くあると共に、彼の、表象された生活の進透といふ第一の條件は充たされる。即ち前に述べた感情移入の條件の第一のものは充たされる。かゝる條件とは、感じ込まるゝ所のものが、吾人に對し全然不可抗爭的に存在するといふ事である。此の如き條件は、美的觀照の本性中に於て與へられたる美的客觀性、換言すると觀照さるゝ事物の內容が、美的觀照に於て吾人に對して有する理念性中に直接に存する所の美的客觀性（その內容の）によつて、充たさるゝのである。

されど吾人は、此の如き美的客觀性をば、尙一歩進んで明瞭にして見よう。此の目的を達する爲には、その本質を最も判明に表現し居る所の範圍中に於て穿鑿をするが最も便利である。さうして斯かる範圍とは、取りも直さずかの創作品の範圍である。

吾人は、或る創作品中の人物、例へば敍事詩とか小說とかの人物に關し、或る人と說を異にしさうして何等かの場合に於てその人物が如何に行爲したかとの方法に關するその人の說を誤謬と斷定して言明する事がある。曰く、此の場合に於ては、彼れは之々の行爲をなし、又之々の行爲をなさなかつたと。吾人は此の如き言明をば、よしやその人物が存在しないといふ事を確知し居り、その結果吾人により確言された方法、又はその他の何等かの方法に於て決して「行爲」をしなかつたといふ事を知得し居るとはいへ、尙爲すのである。但し又、吾人は此の如く言明するとはいへ、而も決して、その作者が、その作品を創作したその時に、彼れの想像上の人物に、此の如き行爲の方法を附與して置いたといふ事を言明しない。作者その人に就いては、吾人は少しも此の如き文句を以て語らない。之に反し吾人は、敍事詩又は小說の人物に就いて語るのである。作者及びその想像作用なるものは、過去都合によると數百年以前の過去に迄附屬する。併し吾人は過去に就いて語らないで現在に就いて語る。即ち吾人は作者の働作に附屬せず、之に反し彼れの創作した作品中の人物に附屬し居る所の無時間的現在に就いて語るのである。

實に、作者により一度生存せしめられた後の人物は、永久かゝる無時間的現在に迄附屬するのである。併しながら此の如くあると同時に、此の人物は、現實といふものゝ一種特異なる範圍に附屬する。さうして「現實の此の如き範圍」は、是即ち美的現實の範圍である。即ち美的客觀性の範圍、隨つてかの不可抗爭的にして無疑問、無疑惑なる存在の範圍、即ち單に事實的に吾人に對立する所のものゝ範圍たるのである。

此の如き美的現實性、或は事實性、簡言すれば客觀性よりして、右に擧げた場合の藝術家の態度といふものも亦理解され得るやうになる。即ちかの敍事的作者は報告をする。さうして彼れは、之をば正しく歷史家と同樣の形式に於てなす。彼れは物語りをする、之若くは彼の人が之を爲した、かのやうな言語を用ゐたと。之に關しても世人は云ふかも知れぬ。文章なるものは判斷の發表である。此の故に右の叙事的作者は、その人物に關して判斷を下す。さうして斯かる敍事的作品を讀む所の吾人も、判斷を彼れに摸倣する。更に若しも此の如き判斷の內容が吾人を歡樂せしむるならば、之は即ち一の判斷感情であると。そこで、都合によると、之に對し附言をするかも知れぬ。曰く、勿論吾人は此の際「確信」なしに「判斷」を下す。言ひ換へると、作者がその人物をして言明せ

しむる所のものが、實際事物の世界に於て曾て起つたといふ事を吾人は思認しない。而も確信なき此の如き判斷は、結極是「假定」又は「假作」と稱する事が能きる。隨つてかの「判斷感情」も亦、假定感情又は假作感情と稱すべくあると。

此の如き附言に對しては、先第一に答へられねばならぬ。作者なるものは、彼れが物語る所のものが曾て此の世に於て發生した。隨つて歴史的現實性を有するといふ事をば、判斷もしなければ、又「假想」「假定」もしないと。更に他方に於て吾人は、右の謂ゆる「確信」に關しては云はねばならぬ。作品上の談話なるものは、それが「確信を起さしむるが如きもの」であるといふ事を以て其の第一要件とすると。

たゞ此の如き「確信」たるや、全然特異なる種類のものである。即ち之は、作者によつて報告されたものが上述の如き美的客觀性を有するといふ事以外の何ものをも言明しない。さうして此の事は同時に意味するのである彼れ作者なるものゝ「判斷」は、かの論理學に於て語る所の判斷の意義に於ける判斷ではないと。之は「普遍效力」といふ要求を提出する所の判斷ではない。之は隨つて一の判斷たるのではないと。

若しも或る歴史家にして、一の戰爭がどこ〳〵で何時起つたといふ事を吾人に告知するならば、然る時には、吾人は、此の語が言明する所のもの、即ち戰爭といふ現象が、各個人の精神的思念とも無係にあると同樣に吾人の精神的思念とも無關係にあるといふ意識を有する。

之に反し、或る作者にして、或る計畫がその主人公に取りて成功したといふ事を告知すると假定するならば、彼は之により、計畫のかゝる成功が、それを思念する所の個人の意識の外に存在するといふ事を言明しようとは欲しない。さうして斯かる作者の語を聞いたり讀んだりする所の吾人も亦、それが此の如くあるといふ事を思認しない。されど又吾人は、同時にそれが此の如くにあらぬといふことをも思認しない。即ち吾人は、吾人の思想に於て、此のやうなものが曾て現實の世界に於て發生したといふ事を否認もしない。此の如くある代りに、計畫のかゝる成功は、唯、それが作者によつて吾人に告知せられ、吾人の前に存し、吾人によつて受納せらるゝやうに存立する。之は吾人に取りては、それが一の歴史的事實でないと同樣に、尙一の事實である。否此の種の事實は、或る意味に於ては、歴史的事實よりも一層多く爭ふべからざるものである。けだし歴史家が報告する所のものは都合によると發生しなかつたかも知れぬ。よしや又その事實が相當に保證され得るにもせよ、尙絶對的に保證されてあらぬ。之に反し、作者により告知されたる事實に關しては、それが都合によると發生しなかつたなどゝいふ各の思想は、絶對的に除却されてある。さうして其の此の如くあるのは、單にかういふ故に外ならない。作品に於ては、吾人に保證さるべくある所の發生とか不發生とかいふ事柄、即ち歴史的の發生、不發生などは、問題とならないからである。

而も之にも拘はらず、作品上の事實は發生する。さはいへ、正しく作品といふ理念的世界に於て發生するのである。さうして玆では、此の如き言明が何を意味するかを明瞭にする必要がある。

抑も作品なるものは、先第一に言語の連結體である。さうして斯かる言語がそこに存在する。即ち作品といふものがそこに存在する。此の作品が書記されてあるか、又は印刷されてあるかなどゝいふ事は、無關心的の事である。吾人に取りては、吾人が作品の內容を思念する事により、そこにそれが存在するといふ事、即ち吾人の精

神的眼の前に立つといふ事、更に換言すれば、それが吾人に對し單にそこに存在し、單に吾人に對立するといふ事丈で十分である。世の作品にして一たび創作せられ、さうして吾人が之を聞知するや否、此の如き言明は成立する。卽ち先第一に、作品、或はそれを構成する所の言語の連續體なるものが、吾人に對して明白なる存在を有し、單に吾人に與へらるゝのである。

併し言語の中には或るものが存在する。此の中に於て、吾人に或るものが「告知」される、さうして言語と同樣に、此の如くその中に存在する所のもの、換言すれば言語と同時にその中に存在する所のものも亦、吾人に對し單に明白なる存在を有する。かゝる存在は「單なる」存在である。卽ち各個人の意識から無關係といふ意義に於て、吾人がそれの現實性に關し彼是推究しないといふやうに吾人に對立する。

此の如きは一見奇異に見ゆるかも知れぬ。何となれば、作者なるものは、正しく歷史家と同樣に文章を以て語るといふ狀態は、依然として發見せらるゝからである。されど又、玆にいふ事實關係は、次のやうな場合に於てのみ吾人をして奇異に感ぜしむる。それは、珍妙にも、論理學者ですらも時に爲すやうに、文章と判斷とを同一視するとか、又は少くとも文章なるものは、常に一の判斷の發表、而も文章の中に於てその「自然的發表」を遂ぐるといふ判斷の發表たるに相違ないと思認する場合である。

されど最も卑近なる日常の經驗も、既にそれが此の如くないといふ事を吾人に敎ふるのである。之を例へていふと、吾人は戲れに一の確言をなす事がある。かゝる場合には、吾人は恰も判斷をなすかの如くに語る。併し之にも拘はらず吾人は判斷をなさない。卽ち此の場合にかゝる文章中に存する所のものは、單に、吾人自らですらも下さない所の一の判斷を他人に强制しようといふ戲れの計畫たるに過ぎない。して又、吾人の精神中に起る所のものゝ發表には、啻に文章が役立つのみならず、更に之を發言する方法も、同樣に役立つのである。

否之のみならず、吾人は、或る文章の發言に於ては、啻にそれに相當する所の判斷を下さないのみならず、それに反對する所の判斷を下し、さうして之を文章に於て發表するといふ事すらもあるのである。吾人が諷刺的に語る場合には、常に此の如くなす。さうして右の戲れの場合に於けると同樣に、此の場合に於ても亦、聽者は、文章の中に「自然的」に存在する所の判斷をば、その中から取出さないのである。

最後に吾人は又、既に日常生活に於ても、之若くは彼のやうなものを虛構し居る所の文章を發言する事がある之は敢へて聽者を欺瞞せんが爲ではなく、之に反し、彼れをして一の表象結合、卽ち當該言語中に存する所の事物の思惟的結合を遂行せしめ、かくて其の現實又は非現實に迄想到する事なしに、之によりて歡樂を得せしめたり、都合によつては不愉快ならしめたりするが爲である。さうして此の場合に於ても亦、聽者は、吾人が彼れに對して豫期する所のものを爲すのである。

但し若しも吾人にして、既に前に爲したやうに、判斷といふ概念をば、論理的判斷に迄限畫するならば、然る時には、凡て以上の如き文章は、決して判斷を發表するものではない。例へていふと、かの歷史家なるものは、疑もなくその言語により、其のやうな判斷を下し、さうして吾人も亦、之を聽取する事により、彼れの通りに判斷を下す。されど此等凡ての場合に於ては判斷の實行といふものは存在しない。いふ迄もなく、單なる表象結合卽ち事物の單なる思惟的結合なるものは、決して一の判斷たるのではない。之が一の判斷となるのは、吾人がそ

れを思惟的に實行すると否とに拘はらず、判斷の效力の意識、それに相當する、事物の事實的の結合狀態、或はそのやうな結合に關する發生の效力上の意識が伴ふ時たるのである。

そこで、事物の右の如き單なる結合といふものは、作者の言語の中にも存する。卽ちそのやうな事物の結合をば、作者は吾人に要求する。されど斯かる結合は、何等の效力を要求しない。之に反し、之は全然效力及び無效力の範圍の外に存する。之は吾人に對し、單なる存在の範圍に立止まる。併し又之と共に、之は效力要求の否定の範圍の外にも存するのである。

さうして其の此の如くあるといふ事が、作者の結合の特異なる事實性卽ち客觀性といふものを構成するのである。此の種の客觀性なるものは、作者が判斷を下す事によつて與へられるのではない。之に反し彼が判斷を下さないが爲に與へられるのである。尙之を積極的に言明すると、彼れが描出をする、卽ち單に吾人の前に提示をなす事によつて與へらるゝのである。隨つて作者の言明が、歷史的言明に附隨すべき「眞」であるや否やなどを穿鑿するのは、何等の意義を有しない。さうして此等の事が、正しくその言明の內容を絕對的の「眞」となし、それに對し、その性質上、絕對的の美的客觀性を附與するに至らしむる所以たるのである。

けだし作者によつて告知されたものゝ歷史的眞實などに關し疑問を提起するのは、何等の意義をなさない。何となれば、正しく作品であるといふ事、換言すれば、かゝる疑問からその性質上離斷されてある所の、美的觀照の範圍中に吾人を高上せしむるといふ事は、作品そのものゝ性質であるからである。

最後に、かゝる事實關係を理解する爲には、勿論一の普通の心理學的見解が前提されてある。それは次の如くある。吾人の意識が、精神中には、種々の範圍に存する。例へば事物を思惟的結合する範圍、並にそれを超越して效力、非效力の意識を發生せしむる所のより高等なる範圍の如きである。さうしてそれが正しく此の如くあるが故に、かういふ事も起り得るのである。一の聽取された文章が、成程右の初等の範圍に迄は進入するが、併し高等の範圍の前には、立留つて進入しないといふこと、換言すると、文章の聽取によりては、思惟的結合といふ初等官能は喚起されぬか、效力、非效力の問題に關する高等官能は喚起されないといふ事である。兎に角事實上此の如き異なりたる範圍は存在する。さうして此等をそれ〴〵異なりたるものと承認するといふ事は、他の場合に於けると同樣に、此の場合に於ても最も重要の事たるのである。

此の如き效力、非效力に關する問題、隨つて又效力、非效力の意識が發生する所の範圍なるものは、是論理的統覺的範圍である。さうして此の如き範圍をば、事物の單なる思惟的結合の範圍と判明に區別するのは、心理學以外の場合に於ても有益の事である。

然かはいふものゝ、美的客觀性なるものは、啻に作者の言明する所のものが所有するのみならず、美的事物の各の內容も均しく之を所有する。一例を擧げると、一つの彫像中に表現されてある情緒なるものは、戲曲又は叙事的作品の主人公の談話や行爲の如く然く「事實的」のものである。かゝる情緒は、歷史的存在ではなく、此の反對の無時間的にしてそれかというて絕對的に確實である所の存在を有する。蓋し先第一に、一の彫塑的材料中に於て再生された容狀なるものは、創作藝術に於けると言語と同樣に、精密に存在する。卽ち之は一點の疑を容れない程明瞭にそこに存在する。さうしてかゝる容狀の中に、かの星の運動からと同樣に、吾人の意向からも無關係

にある所の一の事實として、情緒が存在する。而も之は敢へて吾人の悟性に對してゞはなく、之に反し吾人の直接的印象に對して此の中に存在するのである。

五　「美的現實性」

かの美的客觀性なるものは、上述の如く、事物又は事物の結合の吾人に對しての明白不可抗爭なる存在に外ならぬのであるが、かゝる客觀性は又、事物中への吾人の進透の可能を基礎づけるのである。而も此の進透たるや一の表象された生活が吾人の中への進透の第二の條件、隨つて感情移入の第二の條件と稱せらるべくあるものである。けだし美的事物、特にその中に存する所の生活なるものは、吾人に對して單にそこに存在し、明白無疑問のものであるが故に、吾人は又、此の如き方法に於てその中に進透し得るのである。換言すると、吾人は、之に打任すべく何等の疑問や逡巡により　妨害をされないが故に、全然之に打任す事が能きるのである。

さうして此の如くあるといふと、表象された生活そのものが、全然吾人に與へられ、吾人の中に進透し、かくてそれが十分なる積極的感情移入又は消極的感情移入の對象となるといふ事が遂げられる。換言すると、吾人は事物の中に存する所の生活をば、甲若くは乙の方法に於て體驗するに至るのである。

ところが之と共に、吾人が又「美的現實性」といふ特殊の名稱を以て呼ぶ所の感情移入の要素といふものが與へらるゝのである。吾人は、美的現實性といふ語の下には、常に美的事物の內容の右の如き體驗、即ちその事物中に存する所の生活又は働作の體驗と解釋するのである。

此の如き美的體驗、即ち美的關涉は、時としては誤解される。此の故に吾人は又之に關し、特に二三言を費さねばならぬ。

即ち人によりては云ふかも知れぬ。舞臺に於て「フハウスト」の不安、急迫、失望等を目視し、さうして此の「フハウスト」の人物中に感じ込む所の何人も、現實に而も十分眞面目に、かゝる不安、急迫、失望等を己れの中に體驗する事は能きないと。更に又、忿怒といふものが藝術的に描出せらるゝのを目視するも、己れ自ら忿怒する事はないと。否進んでは、此の如く忿怒したりする所のものは是病的のものであると迄附言される。されど此のやうな思慮なき言は、容易く排斥する事が能きる。否之を排斥する必要は全然ない。その故は、かゝる情緒の美的共同體驗なるものを此の如く解釋する者は一人もないからである。

吾人は、日常生活に於て、若しも何等かの侮辱が吾人に加へらるゝ場合には忿怒する。吾人は又、吾人が脫出する事の能きない苦境に陷つた時には失望する。併しながら今此の所では、此の種のものに就いて語つては居ない。由來美的に體驗された忿怒なるものは、一の人物又は命運の一の人物中への侵害、並にその現實又は實際的の生活上の利害から發生しない。之に反し、之は、忿怒といふものゝ藝術的描出から發生する。さうして他方に於ては、その忿怒を向注せしむべき何等現實の事物はない。此の如くあるが故に、かゝる忿怒は、日常生活に於て忿怒が發生する所の源泉から發生もしなければ、又吾人の實際的の行爲を促すにも至らない。更にそれがかゝる實際的行爲を促すに至らないのは、それに力が缺損するからではない。之に反し、それが對向して發現し得る所の或る現實物に關する各の思想が除却されてあるからである。此の如くある結果として、全然たゞそれ自身の中

に立止まるといふ事は、美的に體驗された情緒なるものゝ本性たるのである。

之を簡言すると、此の種の忿怒なるものは、現實的個人たる吾人が住居する所の現實の世界から出でたとか、又は現實の世界に接しての忿怒たるのではない。さうしてそれが此の如きものであり得ないのは、それが少しもかゝる現實的個人、即ち飲食したり、生活の浮沈によりその存在に障害を蒙むつたり、又その障害に反抗したりする所の個人の忿怒ではないからである。更に又、之は、一の彫像の前の感官的現實中に立つとか、若くは劇場に於て大なり小なり安易なる座席を占むる所の現實的個人の忿怒でもない。此等の如くある事の反對に、之は美的觀照をなす所の自我、即ち美的事物に己れを打任せ、その中に停留し、その中に沒入する所の自我の中に於ける內部的興奮である。而も此の如きものゝ外の何ものでもないのである。

此の如き自我たるや、實に世に理念的自我と稱する所のものである。かゝる自我は、かくてその實の所唯次のやうなものを意味する。即ちそれは觀照をなす所の自我であつて、隨つて全然理念的範圍、即ち各の美的觀照が常に停留するといふ範圍中に生活する所の自我であると。されど斯かる範圍中に於ては、美的觀照をなす所の自我は、現實に停留する。此の故に此の如き自我は、單に思念された自我といふ意義に於ての「理念的」のものではない。之に反し、之は、實際に於て、一の現實的にして、啻に現實世界に於て生活する所のものといふ意義に於けるのみならず、更に觀照の中に沒入し居る所のものといふ意義に於ての自我たるのである。

されど前種の如き意義に於て事實關係は往々誤解された。そこで斯かる誤解を抱くものは、一歩を進めて言明していふのに、美的に體驗された忿怒なるものは、是單なる外觀上の忿怒、單なる想像上の忿怒であり、かくて美的に感じ込まれた一切のものは、是外觀上の感情、想像上の感情と稱すべくあると。さうして此の如くして、彼等は此の外觀上の感情、想像上の感情をば、その謂ふ所の「眞面目感情」なるものに對立せしむるのである。

此の種の誤解に對しては、吾人は反駁を加へねばならぬ。成程、若しも眞面目感情なるものを以て、吾人の實利的生活經驗から發生する所の感情と解するならば、美的共同體驗に於て吾人の中に起る感情は、確にかゝる眞面目感情ではない。さればというて、假りにかの外觀上の感情、想像上の感情なるものが、或るものを思念せしめ得るが如きものであるとするも、尙美的感情が此の種の感情であるなどゝいふのには、天地宵壤の距離がある。本來美的感情とても一の眞面目感情である。即ち一の現實の感情である。唯その異なる所は、それが特殊の範圍中に存し、隨つて特殊の性質を有する一の眞面目感情たるのである。かゝる性質をば、吾人は、一般的の現實性ではなく、之に反し美的「現實性」と呼ぶ。此の美的現實性といふ語によりては、先第一に、美的事物中に存在する所の感情又は情緒が特に藝術品中に於て描出されてあり、それが吾人の體驗中に進透し、隨つて又共同的に體驗さるべき傾向を有するといふ事が意味される。されど玆に語り居る共同體驗なるものは、一の任意なる體驗ではない。之に反し先第一に共同體驗であり、特に美的共同體驗たるのである。さうして之は全然特異なる性質のものであつて、世界に於ける何等他の體驗と同樣視されず、否此等と直接に比較し得べからざる事柄である。之は即ちその特性に於て正しく承認さるべき事柄である。之は各人がかの作者の言ふ所のものに迄分享すべき如くに分享し、さうして十分なる美的觀照に於て分享せざるを得ないやうに分享する場合に、例へば「フハウスト」の失望によりその作者の意圖の如くに捕捉された者の精神中に有する所のものから成立するのであ

る。されど吾人が、或る感情又は內部的體驗を「分享」するといふ事は、「吾人の側に於て」或る感情を起し之を體驗するといふ事を意味するのである。

六　美的深さと美的同感

されど上述以外の點に於ても、藝術的に形成された忿怒、又は藝術的に描出された失望なるものは、一の特異なるものである。抑も美的觀照なるものは、全然その對象に打任せたものであるから、之は決してものゝ表面に立止まらなくて、その深さに迄進透するものである。言ひ換へると、之は、上述したるが如き場合に於ては、啻にそれ自身としての或るもの、例へば單に靑空の下に於て發生したのでない所の忿怒又は失望に着目するのみならず、更にそのやうな情緖が發生するに至つた根據、源泉にも着目する。言ひ換へると、之に於ては、忿怒又は失望をば、之々の人格中に於ける內部的興奮、卽ち右の場合では「フハウスト」の人格中に於ける此の如きものとして體驗するのである。此の故に、美的觀照に於いては又、かゝる人格を體驗する。さうして之は、「フハウスト」の失望の場合に於ては、任意の方法で失望するのではなく、之に反し彼れが如き特定の內部的本質から失望する所の人格である。之は、今いうた場合に於ては、之をより精密にいふと、その作品中に於て吾人に現出し來るが如き、「フハウスト」の人格である、卽ち「骨折り努力」する所の「フハウスト」、「力と大さ」とを有する「フハウスト」の人格である。さうして此の力と大さたるや、失望中に於ても亦存在しさうしてそれをば正しくかゝる失望となるに至らしむる所のものたるのである。

さうして此の如くあるが故に、美的觀照なるものは、當に深さの中に進み行くのである。して又、此の際それが發見する所のものは、いつでも一の人間、卽ち人間的有價のもの、少くとも人間的正當化を有する所の人間たるのである。

更に此の如く述ぶると同時に、美的感情移入、特に一の人間中に於ける、それ自體に於て不快感、懊惱である所のものに對する感情移入の本質は說示される。美的感情移入なるものは、その終極の根據に於ては、常に一の人間といふものゝ體驗である。而も又、之は吾人自らの體驗である。此の故に吾人は、吾人に現出し來る所の形に於ける人間として吾人を感じ、吾人自らと、吾人の中に進透し來る所の人間との調和を感ずる。吾人は何等かの方法に於て、全般的に人間として吾人を活動せしめたり感じたりしようとの熱烈なる慾望の充實されるのを感ずる。吾人は吾人自身と、吾人の中に進透し來る所の人間との調和を感ずる。此の如き調和をば吾人は、特に「美的同感」といふ語を以て呼ぶ。かくて、かの描出された個人、又は此の如きものに於て吾人に現出し來り、吾人の美的共同體驗を强要する所のものゝ中への美的感情移入の最も一般的なる本質は、實に此の如き美的同感から成立するのである。

併しながら、吾人が、美的事物中に於て吾人に現出し來る所の人間中に於て、或る特殊の「力と大さ」とを發見するといふ事は、全然必要でない。時とすると、一の人間が、單に、深く且つ强く苦惱し、最後に沒落する事もある。或は又、喜劇的境涯に陷つたり、喜劇的に「消滅」せしめられたりする事もある。一體、一の人間の存在に對する各の此の如き侵害、各の此の如き否定は、是、人間並にそれに於ける人間的のものをば、よしやそれが

大且つ強力でなくとも尙人間的に正當化されあるならは、吾人に特に近接せしめ、さうして特に深く吾人の體驗中に進透せしむるに就いての一の手段となるのである。都合によると、吾人は、此の如き人間が、最後に道德的に沒落するのを見る事がある。此の場合に於ても亦、此の如く沒落する所のものも、尙一の人間であるといふ事が、吾人に可感的になり得る。さうして今や吾人は、時とすると特に進透的に、人間を感じ、且つその人間中に於て吾人を人間として感ずる。卽ち前にいうた所の「美的同感」を體驗する。吾人は、此の如きものゝ中に於ては、勿論吾人を滿足されて感じない。之に反し、場合によりては甚だ眞面目に且つ苦しく刺激强要せられ、それかというて、吾人の內部に於ては、何等かの工合に擴張高上されて感ずる。吾人は今や茫漠たる享樂を有しない。之に反し恐らくは苦痛なる享樂を有する。併し之とて又一の享樂たるを失はない。最後に吾人は附言せねばならぬ。世に此の如くそれ自身に於て不愉快なる否定程多く、人間の深さ、隨つて又吾人自らの深さの中に立入らしめ、さうして吾人自らをより大なる深さに於て體驗せしむるに就いての痛切なる手段はないと。そこで吾人は、美的觀照に於て、此の如き方法で深さの中に吾人が誘入せらるゝといふ事をば、判然、美的事物又は美的觀照の美的深さと呼ばうとするのである。

吾人は曾て積極的感情移入と消極的感情移入とをば相互に對立せしめた。そこで、よしや內部的のものであらうと、將た外部的のものであらうと、兎に角苦惱、結局する所沒落への感情移入なるものは、それ自體としては消極的の感情移入である。併しながら吾人は、消極的感情移入の對象によつて、右の如く深さの中へ誘入せらるゝ事により、そこに積極的感情移入の對象に接觸する。之は吾人が上に述べし所のものを意味する。卽ち吾人は深さの中に於てそこに人間を發見するといふ事である。さうして此の如くして、消極的感情移入なるものは、此の如き積極的の感情移入に對する基礎、方法、手段となる。前者は、美的觀照に於ては後者に迄變ずる。或は變ずる事が能きる。之は、それ自體に於て、その固有の心核、本質上、積極的の感情移入になる事が能きる。而も此の如くして、かの忿怒、懊惱、不安等の共同體驗は、美的享樂となるのである。

吾人は前に、藝術的に描出された情緖の現實なる體驗は是病的のものであるとの言辭を擧示した。さうして吾人は何等の程度迄、かゝる言辭が迷想と戰ふかを理解せしめた。そこでかゝる言辭に關連して、恐らく、軟弱なる「感動」は是美的行動ではなく、又此の如きものを目的とする所の藝術品、卽ち謂ふ所の「挑情劇」（リユーミシチユック）なるものは、是藝術品ではなく、多くとも低價の藝術品であるといふ指示が結合する。

ところが、此の如き斷言に對しては、人によりては次のやうな結論を試みる者がある。曰く、感動なるものは疑もなく强烈なる共同體驗である。人にして、或る藝術品により、流涕する迄感動せしめらるゝものは、是取りも直さず、彼れがその中に描出された苦惱又は歡樂をば、恰も己れ自らの苦惱、歡樂の樣に感ずるといふ事を示す。そこで若しも感動なるものにして、眞正の藝術品が主眼とするものでないとするならば、取りも直さず眞正の藝術なるものは、共同體驗を主眼とするものでない事になる、今や藝術は、描出された內部的のものが、觀照者たる吾人の中への進透を努めない。之に反し寧ろ此の反對を要求し、被描出物と觀照者との間の距離を作らうとする事になる。換言すると、描出された內部的のものが、美的事物に對峙し、彼れによりて、單に彼れに對立する所のものと認められるといふ事、卽ち之が彼れに對して全然たる物象性を有する事を要求するやうになる

と。

此の場合に於て、先第一に右の距離と物象性とを持出すといふ事は、全然正しい。實に藝術品なるものは、吾人の前に最大の距離に於て立つものにして、之は此の上の如何なる距離に於ても、吾人の前に立つ事は能きぬ。かゝる距離は是無限的なるものである。之は、現實と單なる理念的世界との間の距離が常にある如く然く無限的である。斯くて常に云はるゝのである。藝術品なるものは如何なる時に於ても、現實世界と全然絶緣せるものにして恰も天から降りたるものゝ如くあると。次に、右の第二の「物象性」に關していふならば、藝術品なるものは、吾人、及び吾人の氣儘、隨意、勝手、並に吾人の各種類の助力等から取離されたる或るものとして單に吾人に對立するといふ事を、極力主張せねばならぬ、吾人は之に關しても亦言明する事が能きる。それは恰も、天から落下したる或るものゝ如くに吾人に對立すると。さうして藝術品が「天から落下したる或るもの」として吾人に對立するといふ事は、その實二種のものを包含する。それは、一には無限的なる距離、即ち美的理念性であつて、一には物象性、即ち美的客觀性たるのである。

されど藝術品なるものが、此の如き距離と物象性、即ち美的理念性と客觀性との爲に、吾人と合體して一となるといふ事は、實にその特質を構成するのである。いふ迄もなく、之は吾人の「現實的」自我からは、永久且つ絶對的に分割されてある。併し觀照する所の自我なるものは、彼れが如き現實的自我と離斷し、「吾人を越えて」高上し、藝術品の中に沒入する事により、此の中に於て精神的逍遙をなす。或は之を逆にいふと、被觀照物中に於て觀照の固有の對象を構成する所のものが、吾人即ち觀照する所の自我の中に入り來り、吾人を全然占領するのである。

併しながら前に云うた感動なるものは如何にあるであらうか。何故に之は藝術的行動でないであらうか。何故に藝術品なるものは、感動、即ち軟弱なる融解の意義に於ける感動を目的としてはならぬであらうか。吾人は之に關する事實關係を尙一層精密に考察して見よう。此の問題に關しては、その根柢に於て、既に感動の二個の可能が區別されてある。第一には、吾人が感動されてあるか、第二には藝術品が感動を目的とするかである。換言すると、感動が、吾人の天性又は性向中にその根據を有するか、又はそれが藝術品により企圖せらるゝかである。

そこで、若しも藝術品にしてそれが感動に迄吾人を融解せしめ得るやうな性質のものであるならば、右の第二の場合となり、かくて藝術品が吾人をそのやうな狀態に誘入するやうになる。ところが之は畢竟、次のもの以外のものを言明しない。描出された人物、若くは描出された多くの人物中に於て、力、內部的勞作、爭鬪、場合によりては反抗とか滑稽とかいふものが缺損すると。之を簡言すれば、人物の中に於て、融解の傾向に反對し、それに確固たる支撐を與ふる所のものが、缺損するのである。今やかゝる人物は、是、軟弱、感傷的にして、無力無抵抗に己れを屈し、弱少、優柔なる感情の中に沒入する所のものとなる。

次に、此の種の可能には、尙他の可能が對立する。即ち、場合によりては、彼れが如き力といふ要素は、描出された人物中に於て缺損しない。されどかゝる要素が、吾人中に於て何等の反響を受けないか、又は十分强い反響を受けない事があるのである。之を例へていふと、吾人は、描出された人物中に存する所の憂愁とか不安とかを感ずる。けれども之と同一の方法に於て、憂愁、不安を己れ自らの中に體驗する所の人格の內部的の力をば、

吾人の中に於て共同的に體驗する事が能きない。さうして吾人がかゝる共同體驗をする事の能きないのは、吾人が、吾人自らの天性上、强力なる內部的興奮並に行動法に出づる事が不能であつて、卽ち吾人自らが、餘りに柔軟なる性質のものであるからである。

此等二つの場合に於ては、吾人は結局、憂愁、不安等、簡言すれば、描出せられさうしてそれ自體としては苦痛であるといふ感情によつて全然捕捉せられ、かくてかゝる感情の共同體驗に於ても融解せられ、謂ふ所の「被感動」といふ狀態に到達するやうになる。特に此の如き場合に於ては、悲劇が無力のものとなり、之と同時に眞の悲劇ではないやうになるといふ危險が存する。詳しくいふと、それ自體としては單なる共同的同情でない所の悲劇的同情の代りに、單なる共同的同情が起り、さうして共同體驗をされた苦惱の中に於ける融解といふ現象が發生するに至るのである。

最後に又、右の如く區別された二つの可能は、同一の前提の下に立つのである。それは、兩者が共に同一の「軟弱」といふ心態に陷るといふ事である。けだし軟弱なる性質のものゝみが、描出された人物中に於ける力や衝突や勤勞や自尊等の缺陷を耐忍する事が能きる。之に反し軟弱でない性質のものは、此の如き力等を要求する。此の種の人は、此の故に、此の如きものを少しも示さない所の人物に心を向けないやうになる。その結果又、彼れが如き「融解」に陷るやうな事はないのである。

されど吾人が此の如く言明し來りたるものは、より一般的の意義を有するのである。吾人は、藝術品中に於ては、常に一の人間が吾人に現出するといふ事を要求する。併し一の「人間」というたなら、單に軟弱にして感傷事である。一言を以て覆へば、藝術品が此の如きものを彼れに拒絕する場合に於て、彼れがそのやうな藝術品を故棄しないといふ事が缺點たるのである。

以上の如くあるから、感動なるものは確かに美的行動たるのではない。けれども其の理由は、それが餘りに十分なる共同體驗であるといふの故ではない。之に反し、特にそれが一の偏局的なる共同體驗であるといふ事、卽ち鹽も骨もない藝術品の矛盾無き共同體驗であるといふ事である。或は之を逆にいふと、右の如き感動を除却する所の美的行動とても、それが爲により少く十分なる共同體驗たるのではない。之に反し、之はより十全なる共同體驗である。卽ち之は內容のより十全なる藝術品が提供する所のものゝ共同體驗である。內容のより十全なる藝術品とは、取りも直さず、鹽や骨を缺損しない所の藝術品である。さうして各の此の如き共同體驗は、一種特異にして唯美的觀照に於てのみ發生する所の美的共同體驗である。之は、吾人が美的現實性といふものに就いて語る時に吾人が意味せしむる所の共同體驗である。さうして此の中に存する所の美的深さなるものは、之を簡言すると、吾人が單に藝術品により感動せらるゝ許りを以て滿足しないといふ事である。

かの美的客觀性と同樣に、美的現實性、並に美的深さ、卽ち美的觀照及び美的共同體驗の深さなるものは、結局する所、美的理念性中に根據づけられて存する。此の逆に、此等のものは、美的理念性をば眞に美的理念性となるに至らしむる所のものである。併し又、美的理念性なるものは、美的觀照が、單に有りの儘の事物に打任かす所の觀照に外ならないといふ語の中に包含されてあるのである。

「されど美的理念性と同時に與へらるゝ客觀性及び現實性の中には、正當に「美的錯覺」といふ名稱を帶ぶる所

のものが存在する。美的錯覺なるものは、美的事物の感官的のもの〻中に存するもの、特に藝術品中に描出されたものが客觀的に現實であるとして、單なる錯覺の反對である。換言すると、之は欺瞞の反對たるものである。之は畢竟、觀照の事物の無疑惑なる存在といふ事から直接に發生する無疑問なる沈潛といふものに外ならぬのである。

更に又、美的信仰或は美的確信といふものも、此の如き無疑問なる沈潛の謂に外ならない。本來信仰とか確信とかいふものは、少しも疑惑せぬといふ事を意味する。さうして吾人は、凡て二つて理由から疑惑せぬ事が能きる。第一には、疑惑の根據が存立し得べらざるものと立證さるゝからである。第二には、疑問、隨つて疑惑が、事物の性質上入る餘地がないからである。そこで、美的信仰或は美的確信の本性といふものは、此の第二の理由に基くのである。言ひ換へると、藝術品なるものは、信仰や確信を起さしむるものでなければならぬと吾人が言明する時に意味せしむる所のもの〻本性は、此の第二の理由が表示するのである。

第三章　藝術品の美的觀照

一　藝術品の美的に優勝なる主點

吾人は前章に於て既に、美的觀照の本質を說明するに足る所の實例をば、多く藝術の範圍から取り來つた。之には相當の理由がある。それは、藝術品の觀照なるものは、一般的の美的觀照の本質を明示するには、實際に於て特に適當して居るからである。

されど、美的觀照の對象たるものは、自然物か又は藝術品かである。けだし美なるものは、自然物中にも存すれば又藝術品の中にも存するからである。して又、兩者に對する美的觀照自體も、兩場合に於て同一であるし、且つ美といふ語も、同一の意義を有するのである。更に此の事を言ひ換へると、次のやうになる。「吾人にして、自然物又は藝術品を美的に享樂しようと欲するならば、孰れの場合に於ても、先第一に、一の事物が吾人の感官に提示せられ、さうして吾人は此の事物をば、當該現實關係の外に脫出せしむるやうに觀照する。卽ちその觀照の際には、その事物が現實關係中に於て如何にあるかなどの疑問を起さない」と。此の事をば、吾人は前にかういふやうに言明した。曰く、美的觀照に對しては、觀照された感官的のものは是形相或は顯現であると。ところがかゝる形相、顯現は、たとひそれが自然界の範圍に屬しようと將た藝術の範圍に屬しようと、兎に角美なる事物の有する感官的のものであるのである。

而も此の如く言明し來るといふと、尙一層進みたる事項は發生するのである。曰く、自然物の場合に於ても將た藝術品の場合に於ても、その感官的のもの〻中に存在する所の生活なるものは、一切のそれ以外のものから離斷せられ、全然それ自身として提示されて精神的眼の前に立つ所のもの、卽ち純然それ自身の中に完結されある理念的世界であり、さうして吾人は、美的觀照中に於ては、かゝる世界の中に住し、かゝる世界の中に生活し居るのであると。

されど又、之と同時に、自然美と藝術美との間の本質的差異といふものも說示せらるゝのである。由來自然美

の顯著なる實例は、現實の人間である。人間なるものは、現實界に於ては、之々の性狀を有するものであつて、さうしてその爲人といふものは、現實的關係、卽ち社會生活、更に切言すれば現實世界に於て實現さるべき目的に對し、之若くはそのやうな効果を發生せしむるのである。とはいふものゝ、此等凡ての事は美的觀照の問題ではない。此の反對に、美的觀照なるものは、人間をば、たゞそれがある通りに、而も感官に提示せらるゝ如くに取上げ、さうして此の中から、その形とか色とか、場合によりては運動とかの中に於て、各の現實的問題なしに直接的印象に對して存在する所の內部的のものを取出だし、之により快感を起したり又は不快感を起したりするのである。

之と同樣の關係をば、美的觀照なるものは、藝術美、卽ち藝術的描出、例へば人間の彫像に對してもなすのである。此の場合に於て感官的に與へられたものは、現實の人間と同一のものではない。たゞ現實的人間の容狀をその中に帶有するものである。して又、此の如く感官的に與へられたるものは單に顯現である。そこで假りに之が藝術的に形成されたる大理石塊であるとするならば、美的觀照なるものは、その大理石の性質、自然界に於けるその存在狀態、各種の目的に對するその効用等の事に着觀をなさない。之に反し、かゝる特定の大理石塊が感官的知覺に對し現出する所のもののみに留心するのである。さうして此の如くして、美的觀照なるものは、此の大理石塊中に於て直接に表現せらるゝ所の生活を觀照し、之を美的に享樂する。結局する所、美的觀照は、此の中よりして、美的享樂者に對して一の生活肯定をその中に包有する所のものを取出すのである。

されど此の如き自然美と藝術美とに對しての美的觀照の一致は、同時に一の本質的差異の存立を妨げないのである。けだし彼れが如き現實の人間は、正しく現實の世界に屬する。隨つて吾人は彼れをば、或る特殊の行爲によつて、此の世界の外に取出さねばならぬ。此のやうな人間は、之を具體的にいふと、吾人の朋友であつたり、又は敵であつたりし、或はその卓越の爲に吾人を耻ぢしめたり、又その所有する所のものゝ爲に吾人の嫉妬を起さしめたりする。ところが云ふ迄もなく、此等凡ての影響は、吾人にして彼れを純然美的に觀照する際には、不可能になる。さればとて又、此の種の純然たる美的觀照なるものは、かゝる現實なる人間の場合に於ては、自明的に遂げられない。さうして此の如くして、美的觀照が內部的に吾人に與ふる所の一切のものは、此の場合に、自明的に與へられて居ない事になるのである。

されど藝術品に對するといふと、關係は異なつてくる。藝術品となつて吾人の前に立つ所の人間なるものは、現實的のものではなくて單に描出されたものである。彼れが現實的のものであるといふ思想は、藝術品に於ては始めから絕對的に除却されてある。さうして此の如く除却されてあるといふ事は、二つの事を意味するのである。第一には、吾人が之に於て目視する所のものは、一の形相である。さうして形とか場合によりては色とかは、單に現實的のものを代表するのである。卽ち此の如き形は、現實的人間のそれではない。言ひ換へると、人間の形が通常附屬して居る所の現實關係には附屬して居ない。之はそれ自體のものである。卽ち吾人は吾人に對し、そのやうな非現實的のものに爲す手數を要しない。第二には、かゝる形の中に存在する所の生活なるものは、全然一の理念的のものである。さうして此の如き二つの事こそ、正しく「描出」といふ語の意義たるのである。此の種の理念的世界なるものは、それ自身として大理石塊の中に描出されてある。隨つて又、かゝる世界は、吾人の思想の

各の世界、或はその思想が存在する所の各の他の理念的の世界の外に取出されてある。かゝる世界は、それ自體として、即ち藝術家の行爲により觀照の爲に離隔されてある。さうして此の世界が此の如くなし得らるゝのは、單にかういふ故のみである。それは、かゝる世界、而もかゝる世界のみが、吾人の目視する所の感官的のものに迄結合されてあるといふ事である。或は之を他語を以て表出すると、此の世界のみが、それ自身として、かゝる特殊の方法に於て吾人に對立し、かくて美的觀照をなす所の自我、即ち藝術品の感官的のものゝ中に存在する所のものゝみを目視する所の自我が、全然その中に沈潛し得るといふ事である。

して又、此の如き「描出」をなすといふ事は、正しく藝術の本質を構成するのである。即ち藝術の本質なるものは、描出といふ事實の爲に、純粹なる美的觀照が、被描出物中に包有せらるゝ一切のものにより吾人に指揮限定せられ、かくて吾人がその觀照に迄昇達するを要しなく、之に反し直接に、さうして藝術品を觀照すると同時にその中に立つといふ事から成立するのである。

更に吾人は、此の事をば又かういふやうにも言明する事が能きる。藝術品の美的觀照なるものは、その本性上何等の非美的の觀照と競爭することは能きぬ。之は非美的要素により攪亂さるゝやうな危險の下に立たない。かの自然なるものは、吾人の純粹美的に觀照をなし得るものである。けれども藝術品に至りては　正しくそれが藝術品であるが故に、當然純粹觀照をなすのである。さうして此の如く述ぶると共に、既に述べたる如く、美的觀照の中に存する一切のものは、一の自明的のものとして與へらるゝのである。

されど此事は特にかういふ事を意味するのである。美的觀照の際に純粹にして而も十分のものでなければならぬ所の美的理念性と離隔性とは、藝術品の中に於ては、吾人の遭逢する一の事實として存するといふ事である。詳しくいふと、一方に於ては、描出された世界が、一切の現實性から離斷されてあり、他方に於ては、此の如き理念的世界が、吾人に對し理念的存在を有する所の他の世界と十分區劃されてある。更に簡言すると、之が現實の世界並に吾人の思想的世界と分離されてあるのである。

尙此の上に、かゝる理念的の世界は、單にそこにある。即ち吾人の前に存する所の感官的のものにより、顯然一點の疑を容れないやうに、吾人に與へられてある。藝術品の理念的世界なるものは、それ自身に於て、明白不可抗爭的の存在、即ち美的客觀性といふものを有する。さうしてかゝる客觀性と共に、此の世界は、美的現實性即ち吾人の中への自由なる進透と、消極又は積極の十分なる感情移入の可能とを有するのである。

さうして又、藝術品の中に描出されたものが、顯然理念的のものにしてそれ自身の中に離隔されたものであり同時に吾人に對して明白に存在するものであり、かくて此の意義に於て「客觀的」のものであるといふ點に於て美的觀照の深さといふものゝ條件は、必然的にその中に於て與へられてあるのである。深さに對する條件とは、かのそれ自身に於て皆無、否定、苦惱、嫌厭であるものゝ中に於て、美的觀照により發見され得る所の、人間的のもの、並に人間的に顯著なるものに迄降下するといふ條件たるのである。

藝術なるものが此の如く顯然たる理念性、容觀性、離隔性と美的觀照の深さとを作出する事により、藝術の手段を假るに非ずんば到底取得し能はざるやうな美的享樂を可能にする限りに於ては、吾人は藝術品の特性に關し後章に述ぶる所のものを別にするも、藝術品の特殊の享樂、特殊の價値、特殊の藝術美といふものを語る事も能

きれば、又かゝる美をば、異なりたる或るものとして、自然美に對立せしむる事も能きるのである。されど之に關しても、一の誤解を起し、さうして藝術美が異なりたる或るものとして自然美に對立するといふ事をば、其の種類の異なるが故と思認してはならぬ。之は唯、自然美よりも、より純粹、より確實、より安固なるものたるに過ぎない。尙此の外に、之は藝術により收得さるゝ所のかゝる特殊の純粹、確實、安固のものであるにも拘はらず、美的觀照からの享樂に係るものである。卽ち理念的にして且つ離隔せる世界からの享樂に係るものたるのである。して又、かゝる享樂たるや、如何なる場合に於ても、常に共同體驗たるのである。

更に吾人にして、藝術品の享樂をば、又藝術的享樂と稱するならば、然る時には、藝術的享樂なるものは、自然美の享樂と同一のものである。唯その異なる所は、それが、藝術が作出する所の特殊の條件の下に立ち居るといふ事許りである。

二　藝術品と合現實性

吾人は、よしや凡ての藝術に於てでなくとも、或る藝術に於ては、以上の如き美的理念性と離隔性、美的客觀性と現實性と深さといふ要素の外に、尙他の一要素を特に高調せねばならぬ。而も此の種の要素たるや、自然美と區別されて、藝術品に於て始めて問題となるのである。されど又、かゝる要素を右の要素と「共に」特に高調せねばならぬといふ事は、之が右の如き他の要素と同格的に並立共存するといふ事を意味しない。之に反し之は寧ろ、彼れが如き要素全體に對する條件たるのである。けだしかゝる要素は必要缺くべからざるものである。何となれば、之は、右の或る藝術に於ては、美的觀照の條件であるからである。換言すると、美的事物、卽ち一般的の藝術品をば、そのやうなものとして存在せしむるといふ事に對する條件たるのである。

或は之をより定確に言明すると、純粹なる美的觀照の對象としての藝術品の本質には、一切の現實的問題を除却するといふ事が附屬するとはいへ、而もかくあればとて、たとひ凡ての藝術品ではなくとも或る種類の藝術品は、現實に對する一定の關係を必然的に所有し居るのである。併し斯く言明するといふと、外見上一の矛盾を生ずるのであるが、かゝる矛盾をば、吾人は次の如く言明する事により直に消滅せしむる事が能きる。曰く、藝術品なるものは、それが、一切の現實的問題を除却し居る所の純粹なる美的觀照の對象であるといふ事、その事の故に、直に或る種類の藝術品に對しては、現實に對する關係といふものが要求せらるゝと。此の種の關係たるや、たとひ凡ての藝術に於てゞなくとも、二三の藝術に於ては、その藝術品が、一般的に一の內容を取得し、さうしてそれ丈の限りに於て此の如きものとして存在するといふ事に對しての條件卽ち前提となつて居る。さうして又、かゝる關係は、他方に於ては、此の種の內容の觀照に於て、常に現實的問題を起さしめずに置くといふ事に對しての條件ともなり居るのである。

古來の言ひ傳へとして、「藝術は摸倣である」といふ語がある。かゝる語に對しては、吾人は直に附加せねばならぬ。二三の藝術に於ては、その語の如何なる意義に於ても「摸倣」をなさないといふ事を何人も知得すると。此の如くある結果として、各の場合に於て、摸倣なるものは、一般の藝術の本質に屬するものではない。又或る種類の藝術の本質とても、摸倣から成立しない。何となれば、假りに此の如くあるとするならば、かゝる藝術の範圍

に於ては、完全なる摸倣は完全なる藝術となるべき道理となるからである。ところがその實をいふと、完全なる摸倣は是現實といふものゝ「奴隷的謄寫」といふものであつて、吾人が後章に於てより精密に述ぶるが如くに、藝術の正しく反對たるものである。各の藝術なるものは、現實から、啻に副貳的に遠かるのみならず、故意に之に遠からうとする。さうして此の一事だけで以て、かの「藝術は摸倣である」といふ語を排逐するに足るのである。

最後に又、摸倣をなす所の一の藝術も世に存しない。之に關して言明し得るのは唯、或る藝術は決して、現實ではなく、之に反し現實が有する或るものを「再生」するといふ事許りである。

そこで此の種の藝術の現實に對する關係といふものは、いつでも此の如き事の中に存在する。併し又此の言は、之をより精密に確定せねばならぬ。そこで次の如くなる。曰く、各の藝術の本質は「描出」といふものをなすにある。描出をなすとは、一の理念的のものをば感官的のもの〻中に轉置するといふ事であると。ところが或る藝術に於ては、此の如き描出は再生(現實物の)によつて遂げられる。之を例へていふと、かの彫塑が人間身體の形を再生するが如きである。併し彫塑は、此の如き事をば、一般的の藝術としてなすのではなく、之に反しそのやうな特定の藝術としてなすのである。けだし各の藝術なるものは、或るもの、即ち一の理念的のもの、生活、働作及び、生活可能、働作可能などを與へる。されど此等のものを與へるに就いての手段となるものは、再生的藝術に於ては正しく上述の再生作用である。かゝる藝術は、その本性上、再生をなす事以外によつて、右等のものを與へる事は能きないのである。

されど之に關しても、一の一般的事實が根據となり居るのである。けだし一の感官的のもの〻中に於て、生活が吾人に對し如何にして存在し得るかに就いては通常二種の可能がある。第一には、此の生活は感官的のもの〻中に於て、その質の爲に直接に存在する。之を例へていふと、音とか色とかの中には、直接に一の內部的のもの、即ち一の氣分、生活が存在する。更に換言すると、此等のもの〻中には、それが正しくこれ〳〵の性狀の音又は色であるが故のみで、かゝるものが存在する。されど第二に、かゝる生活は、吾人に對し、一の感官的のもの〻中に、經驗を基礎とする結果として存在する。例へていふと、自然生活なるものは、自然事物の中に迄、經驗を基礎として、吾人に對し投入される。さうして之が如何にして遂げらるゝかは、本書の第一卷中に於て既に述べた所である。尙之を一般的にいふと、自然事物の形が一の生活を取得するのは、吾人がかゝる形を現實の中に於て發見し、思惟的結合をなし、相互を因果關係に立たしむる時である。さうして又、人間身體の形なるものは、よしやゝ〻異なりたる意義に於てゞあるとはいへ、亦經驗によつて、その生活內容、即ちその精神を取得するのである。詳しくいふと、吾人は先第一に、異他の感官的顯現中に於て吾人に對して存在する所のものをば、吾人自らの中に於て體驗して居らねばならぬ。更に第二には、異他の感官的顯現の感官的知覺が、吾人をその顯現中に投入するに就いての機會を與へねばならぬ。かくて一方に於て、吾人自らの體驗、即ち吾人自らの內部的經驗の內容にしてより豐富であればある程、又他方に於て、吾人にして、人間の感官的顯現、特にその中に存在する無限なる運動可能及び生活發現可能の觀照及び把捉に於てより自由であればある程、益〻多く吾人は、かゝる感官的顯現を「理解」するやうになる。即ち一の內部的のものをその中に感じ込むべく學習するのである。最後に又、

言語の理解といふものは、若しもそれが無かつたなら、詩的藝術品の吾人に對する存在は不可能になるのであるが、是とて亦、吾人の經驗の致さしむる所たるのである。

さうして凡て此の種の經驗をば、吾人は現實に接して必然的に爲すのである。して又それが正しく此の如くあるが故に、造形藝術並に詩歌の範圍に於ても、此等の藝術の中に於て吾人に提供せらるゝ所の感官的內容は、經驗、並に經驗により得られたる現實の理解を基礎とするに非ずんば、吾人に對して存立する事は能きないのである。吾人は之を簡言する事が能きる。曰く、感官的のものは、此等の藝術に於ては、現實的經驗の基礎の上に、一の內容の象徵卽ちその感官的帶有者となると。さうして此の如くある結果として、此の種の藝術の作品が、吾人に對して一の內容を取得し、かくてかゝる內容に向注する所の美的觀照の對象となる事が能きる。簡言するとそれが唯現實を再生する限りに於てのみ、藝術品として存立し得るのである。

併しながら此の種の事實關係はかういふやうに誤解されてはならぬ。曰く、此等の藝術に於ては、一の感官的のものが、再生をなすが故に美的享樂の對象となると。換言すれば、吾人の享樂が、此の如き再生といふ事實に對しての享樂であると。此の如くある事の代りに、かゝる享樂の對象たるものは、吾人に與へられてある所のものである。さうしてその此の如く與へられるのは、それがある如くに實際あるからである。卽ち此の如く與へらるゝといふ事は、事實的且つ必然的に一の再生たるが故なのである。

三　模倣說、藝術的享樂と再認識に對する歡樂

上述の如き事實關係は、上に指示したるやうに、一派のものによりて誤解される。彼等は不正當なる言明をなして曰ふのに、吾人が再生的藝術品を享樂する時には、吾人は再生といふ事實に對して歡樂する。隨つて又、藝術品に對する吾人の歡樂は、取りも直さず再生卽ち摸倣に對する歡樂であると。

吾人は今かゝる言明をより精密に檢討して見よう。一體藝術品に對する歡樂が、如何にして再生卽ち摸倣に對する歡樂であるであらうか。ふい迄もなく、藝術品が事實的の摸倣であるといふ事、卽ち摸倣といふ事實そのものが、吾人の歡樂の根據となる事は能きぬ。吾人は先づかゝる事實に關して知識を有せねばならぬ。

ところが此の種の知識は、二重の意義に於て吾人の歡樂卽ち滿足の根據となり得るのである。先第一には、單にかゝる知識そのものとして根據となる。けれども此の如き根據に基く歡樂の存在を主張するといふ事は、是取りも直さず心理學上の無識を示すといふものである。詳しくいふと、吾人が曾て確立して置いた事實に對する無識を表はすのである。その事實とは、一般的の認識作用、隨つて又再認識作用も、それ自身に於て快感又は不快感の色彩を帶びないといふ事である。抑も再認識なるものは是一の判斷である。卽ちそれが解答する問題は、事物が當該のものと一致するや否やといふ問題である。して又、かゝる再認識判斷なるものは、之をより精密にいふと、一の比較判斷である。而も此等の判斷自體は、その性質上からすると、快、不快に對しては絕對的中性のものである。卽ち絕對に冷靜にして無感情的なる所の悟性作用たるのである。

けれどもかゝる言明に對しては、先第一に一の制限が加へられねばならぬやうに見ゆる。假りに藝術品にして吾人の知得せる事物に類似するものであり、隨つてその或る部分に於て兩者が一致し、さうして吾人が之に氣付

くとする。此の場合には、その事物の全表象が吾人の心中に浮出し、さうして吾人は「期待」する吾人の知得し居る事物が藝術品の中に於て完全に發見し得られるであらうと。そこで之が故に言明せらるゝのは、かゝる期待の充實さるゝといふ事は、疑もなく滿足を起さしめ、隨つて快感を發生せしむる。然るに吾人のその期待にして充實されないならばいふ迄もなく不快感は起ると。

されど此の如き論斷に對しては、吾人は次のやうに反對せねばならぬのである。若しも藝術品に對する歡樂にして、右の如き期待の充實に根據するならば、今日事實的に存する所の藝術なるものは、吾人に可能的多くの不快感を起さしむる爲に存する事になる。その故は、既に述べたるやうに、一切の藝術なるものは、現實の全然たる再生を避けるやうに故意に努力し、かくて、吾人が曾て知得せる事物をその中に於て完全に再認識し得るとの期待の充實を不可能ならしむるやうに配慮するからである。

尙此の外に、彼が如き論斷に關しては、次のやうな事にも留意せねばならぬ。けだし一の期待の充實は「滿足」を起さしむる。然るに此の滿足の感情たるや、是期待中に存する緊張の弛緩の感情である。さうして又、內部的緊張のかゝる弛緩は、成程それ自身としては一種の快感發生の條件たるには相違ない。けれども又、かゝる快感が、事實上發生するや否やといふ事は是別の問題である。その實をいふと、吾人は簡言する事が能きる。內部的緊張の右の如き弛緩は、若しもその弛緩が正しく快感的のものであるならば、快感を起さしむると。換言すれば愉快なる或るものを體驗し得べき期待が充實せらるゝならば快感的のものであると。此の反對に、若しも不快なる或るものを體驗すべき期待が充實せらるゝならば、不快感を起さしむるのである　一例を擧げると、吾人にして不快なる或る事件を期待し、さうして此の事件が事實上發生するならば、吾人の期待は「充實」される。卽ち吾人の期待を特徵づける所の緊張は弛緩される。けれども斯かる弛緩は是不快感を起さしむるのである。

併しながら今、右の如き「期待」の事に關しては之丈の事項を述ぶるに止めて置いて、單なる「再認識作用」に立歸つて推究して見よう。ところが此の場合に於ても、右と同樣の事項は言明さるべくあるのである。卽ち再認識に對する快感なるものも亦、いつでも、その再認識をさるゝ事物が歡樂的の或るものであるや否やに依從するのである。之を例へていふと、任意の人に於て吾人の朋友が再認識さるゝや否、歡樂が起る。けれども又、吾人の怨敵である所のものを再認識するといふ事は、全然歡樂ではないのである。

然かはいふものゝ、右の一派の論者は、いふ迄もなくかゝる不愉快なるものゝ再認識を意味しては居ない。それかというて又、冷淡無關心的（グライヒギルチヒ）のものゝ再認識をも意味して居ない。否、一體再認識をなすといふ機會を吾人は毎日有するのであつて、之に對しては特に藝術なるものを要しないのである。一例を擧げると、吾人は、各の敷石に於て、敷石として吾人に知られたるものを再認識する。而も之にも拘はらず、吾人は各のかゝる敷石に接して一種の藝術的享樂の如きものを得ないのである。此の場合に於ても、前と同じやうな理由で、吾人が再認識する所の事物にして、冷淡無關心的のものであるならば、その再認識作用そのものも亦、冷淡無關心的のものとなるのである。

されど又、右の一派の者の學說にして、かういふ事、卽ち再認識さるゝものは不愉快のものでもなければ又冷淡無關心的のものでもなく、之に反し吾人の積極的快感の對象であるといふ事を假定するならば、然る時には、美

的享樂なるものは、かゝる假定の爲に十分說明し了らるゝ事になる。但しかうなるといふと、此の享樂は、正しく吾人が再認識する所の愉快なるものに對する享樂となるのである。さうして又吾人が此の如きものを再認識するといふ事そのことは、吾人の歡樂を增加もしなければ又減少もしない。尙之を他語を以て云ふと、彼れが如く假定するならば、再認識は歡樂であるとの全主張は消滅するに至るのである。

併し吾人にして此の如く述べ來ればとて、再認識作用中には、彼れが如き「期待」、並に再認識物自體の快樂性を別にして、快感の一條件が存するといふ事は、否認し了られない。但しかゝる快感たるや、勿論再認識作用そのもの、卽ちそのやうな判斷作用に對する快感たるのではない。之に關しては「凡そ判斷作用なるものは感情ではない。隨つて快、又は不快の色彩を帶びて居ない」といふ一般的見解を提出する許りで十分する。

併し又、吾人が再認識する所のものが、吾人に既に知得されてあるといふ事情は、再認識物の把捉を容易にするといふ事だけは確かであつて、さうして斯かる事情の中にこそ、正しく快感發生の根據は存するのである。とはいふものゝ、斯かる快感は、その根據をば、事物其ものゝ中に有するのではなく、之に反し、その事物が既に吾人に知得されてあるといふ偶然的事情の中に有するのである。一言で以て覆ふと、此の種の感情は、一の「事物感情」たるのではなく、之に反し「結合的感情」(コンステラチオンスゲフユール)たるのである。隨つて又、吾人は、事物ではなく、結合狀態といふものを取り上げる事になる。更に詳言すると、吾人は今や吾人の眼前に存する所の事物を有價・愉快と呼ばないで、吾人の容易なる把捉作用を愉快と呼ぶのである。而も藝術品の價値なるものは、正しく藝術品といふ事物自體の價値であつて、決してそれに關する容易なる把捉作用の「價値」ではないのである。吾人にして若しも或る藝術品が美であるといふ時には、その藝術品並にその美自體に就いて語るのである。之に反し、吾人にして、若しも「把捉作用が、その把捉事物を既に知得し居るが故に容易にされる」といふ事を言明するならば、此の場合には、吾人は藝術品に就いて語らなくて、それに對して起さるゝ把捉作用並にその容易といふものに就いて語るのである。而も此等二種の事は、その性質上異なつても居れば、又吾人の意識に對しても區別されてある。由來一の藝術品の把捉なるものは、啻にそれに於ける事物を既に知得し居るといふ事によつて容易にされる許りではない。更に尙他の數千の方法によつても容易にされるし、又困難にもさるゝのである。けれども之にも拘はらず吾人はかゝる容易又は困難の責任をば藝術品をして負はしめない。之を例へていふと、吾人は、その把捉が困難であるが故に、藝術品を醜と呼びもしなければ、又容易であるが故に美とも呼ばない。否時とすると、人によりては、或る藝術品を享樂する事が餘りに容易でないが故を以て、その藝術品の美をより高度に評價する事もある位である。されど此の場合に於ても亦、吾人にして、吾人が賞美しようとする所のものに氣付くならば、その藝術品をばより高遠なるものとは賞美しない。吾人はかゝる際にも亦、藝術品の價値をば、それに對して費消された勞力の故を以て增進された價値と區別するのである。

而もその此の如くあるにも拘はらず、前に擧げた一派の學說は、吾人が實際陷らない所の混同を吾人に要求するのである。卽ち此の學說によると、吾人は、吾人の把捉作用並にその經過の容易に對して歡樂を感じ、さうして之が故にその藝術品に價値を附與するといふ奇怪事を行ふべき事になるのである。

さうして又、最後に、吾人にして、啻に再認識の際の把捉作用の容易に對する歡樂が存するのみならず、更に

再認識そのもの、卽ち再認識を成立せしむる判斷に對する歡樂が存するといふ事を假定するも、かゝる歡樂の可能が藝術品の「價値」を構成するとの主張中には、前と同樣の矛盾が存するのである。卽ち此場合に於ても亦、吾人の精神中に於ける一の現象の歡樂性と藝術品の價値との混同が吾人に要求されるのである。換言すれば、吾人の歡樂に於て、吾人と藝術品とを混同する事が要求される。その異なる點は、唯此の場合に於ては、「一の判斷なるものは歡樂性のものではなく、之に反し快又は不快に對して中性なる作用である」といふ事實の無視が、右の矛盾せる思想の上に更に加はるといふ事許りである。

以上の如く、「藝術品そのものでなく、それに於て行はれた摸倣作用が藝術品に對する吾人の歡樂の對象である」といふ主張と對立して、第二の主張がある。之に據ると、吾人は、吾人の再認識に對し歡樂を感ずるのではなく、之に反し吾人が認めた藝術家の能力、その巧妙なる摸倣に對して歡樂する事になる。されど此の場合に於ても言明されねばならぬのは、成程各の種類の巧妙、隨つて摸倣の巧妙も亦、快感の一の可能なる根據であるには相違ない。所がかゝる快感の根據に對立して、不快感の根據も、此の場合に存する。その故は、摸倣の藝術なるものが、若しも不快又は冷淡無關心的のものゝ再生に適用さるゝ場合には、吾人は不快感を起すからである。此の如き場合には、藝術家に對する嘆美は、その反對、卽ち輕蔑又は憐憫になつて了ふのである。

之を例へていふと、或るものにして、非常なる程度に、凡ての動物の聲、例へば豚の唸り聲を眞に逼る程摸倣する能力を有し、此の能力を實際働らかせたとするも、その愚劣なる行動に對する不快感は、決して摸倣に對する快感を發生せしめないのである。そこで、藝術家の巧妙も、若しもそれがより高遠なるものに適用されないならば、その巧妙は、此の種の巧妙に類似して了ふのである。而も此の如くより高遠なるものに適用されないとは若しも藝術的摸倣が、より高遠なる或るものを吾人に提供しないといふ事を意味するのである。されどかゝる事情を若しも考察の中に入るゝならば、然る時には、藝術品に對する享樂の今述べ居る說明中に於ては、此の種の享樂は既に假定されてある事になる。さうして之を說明する爲には、もはや摸倣作用、並に此の際に表出せらるゝ巧妙を嘆美する事などを要しないやうになるのである。

最後に又、藝術家の巧妙に對する歡樂は、是藝術品に對する歡樂たるのではない。之は、藝術家なるものは藝術品ではないと同樣である。さうしてかゝる言明に關しても亦、藝術品の享樂の對象は、正しく藝術品並にその中に直接に存在するものであるとの事は、依然として存立する。併し又、藝術品の中には、藝術家の巧妙といふものは、その巧妙により藝術品に一の有價なる內容が與へらるゝ限りに於てのみ存在する。但し之に對しても吾人は固より附言し置かねばならぬ。曰く、此の種の內容は、たとひそれが偶然、藝術家の拙劣なる技術により與へらるゝとも、それが爲に、それが實際あるよりも、より少き價値のものになるに至らないと。

四　再生的藝術に於ける「美的眞實」

以上述べたる所の批判的考察だけでは、再生的藝術品に對する合現實性、卽ち摸倣の意義といふ問題は、未だ解決し了られないのである。尙又此の問題は、前に言明した所のもの、卽ち「再生的藝術に於ては、象徵といふものが如何にして必然的にさういふやうな象徵となるか」との方法の叙述によりても、解決をされない。此の事

に關して前に提出された要求といふものは斯うである。再生的藝術なるものは、吾人の現實的經驗に於て象徴となり得るといふやうな象徴を使用すべしといふ事である。

ところが尙此の上に、再生的藝術に於ては、眞實といふ要求が提出される。さうして此の要求は、象徴が單なる合經驗性、卽ち合現實性のものでなければならぬといふ事以上のものを言明する。之は、特に之以上遙かに出づる所の合現實性といふものをその中に包有する。

之を例へていふと、吾人は或る再生的描出をば「的中」せるものと呼ふ。或は、「現實はその描出に於て的中されて居る」と云ふ。いふ迄もなく、かゝる「的中」といふ事は、藝術品の評價に對して重大なる影響を及ぼすものである。その證據には、吾人は或る時には一の肖像を特に「的中」して居るといひ、又他の時には、或る藝術品中に於ける人間階級又は時代の特質が「的中」して居るともいふのである。

ところが此等二つの場合に於ける的中といふ語は、全然同一のものを表出しないのである。卽ち第一の場合に於ては、之は、その固有の意義として、現實界に於て發見さるゝやうな現實の再生といふ事を意味する。然るに第二の場合に於ては、單に或る人間階級又は或る時代の特質が再生されてあるといふ事のみを意味し、さうして該藝術品が其の凡ての部分に於て、自由不羈なる創作に係るといふ事を除却し居らないのである。

而も右のやうな第一の場合と並列して、此の如き第二の場合が存するといふ事は、取りも直さず、藝術が模倣でないといふ事を、更に他の方面より證明するのである。けだし此の第二の場合に於ては、現實界に於て發見さるゝ所のものが繰返されない。之に反し、或るものが現實を模擬類同して自由不羈に構成せらるゝからである。

併し又、かゝる模擬或は類同は、是合現實性の一種であつて、さうして結極廣義に於ける模倣と稱すべくある。そこで今や一の問題は起るのである。此の如き合現實性は、右の第一及び第二の場合に於て如何なるものを意味するかと。之に關してば吾人は先づ始めに第一の場合を考察して見よう。事々しく述ぶる迄もなく、若しも一の肖像にして「的中」して居るならば、それは結構のものである。けれども、斯くあればとて、かゝる的中が該藝術品の價値を、全然、又は一部分なりとも構成するといふ事は、少しも意味されない。恐らくは吾人にして或る人の肖像畫を見るならば、先第一に、之がX君の肖像であるといふ事を思認し、さうして若しも之がX君に酷似して居ないならば、此の肖像畫を拙惡のものであるといふ。けれども若しも此の肖像畫を執筆した藝術家にして、X君に一面識もなく、さうして彼れを描かうとの意圖を有しなかつたといふ事を吾人が聞知すると假定する。斯うなるといふと、此の藝術品は右と異なりたる批判の對象となる。今やその「價値」、卽ちそれが「優秀であるとか拙惡である」とかは、その中に存在する所のものゝみに依從する事になる。殊に又、その價値は、X君に酷似しないといふ事の爲に、少しも減少されないやうになるのである。

由來藝術品なるものは、該作者が、如何なる意圖を有して居つたといふ事が明瞭になる事の爲に、異なりたるものとなる事は能きない。之は、かゝる意圖の明瞭如何に係らず同一の藝術品である。故に藝術品として其の價値も、之が爲に少しも變更されない。此の故に、それがX君に酷似しないといふ事を吾人が發見した後の價値とても、その發見以前の價値よりも、より僅少でなければ、又X君に十分酷似すると思認さるゝとも、その價値はそれが爲に少しも增加されないのである。

併しその此の如くあるにも拘はらず、吾人にしてその繪畫をX君の肖像として觀照して居る限りに於ては、再認識の可能、即ち酷似し居るや否やといふ事は、吾人に取りて決して不重要なる事柄ではないのである。

但し斯く云へばとて、かゝる再認識の可能が、該肖像の美的價値を增加するといふ事は意味されない。何となれば、若しも果して此の如くなるとするといふと、一朝觀照の見地が變ずる場合には、此の價値は減少するに至るからである、而も此の如くある事の代りに、之に關する眞の事實關係は次の如くある。再認識の可能といふものは、該藝術品の十分なる價値の把捉を遂げしむるが、その不可能といふものは、該藝術品に對する吾人の享樂即ちその十分なる價値の把捉を妨害する。更に又、かゝる妨害は、吾人が再認識の可能を故意に探求する丈の間起り、又之が故に起るのであると。

今此のやうな妨害が起るといふ事を尙一層精密に言明して見よう。曰く、そのやうな繪畫がX君の肖像であると吾人が思認した時には、如何なる經過が吾人の心中に起るかと。之に對する答は極めて簡單である。曰く、吾人は該繪畫中に於て、吾人がX君に於て知り、さうして彼れに對して特有と思はるゝ所の一定の性狀を發見しようと「期待」した。ところが此の繪畫中に於て、吾人が此の如く發見しようと期待した所のものに接する事が能きなかつたと。

然るに此の事は又、次のやうな事を意味するのである。吾人が藝術品をば、純然それがある所のものとして觀照し、さうしてその中に存在する所のものに基いて評價しようとする事に對して妨害されたと。けだし彼のやうな期待又は探求は、是該繪畫中に存在しないものに對する追求、隨つて繪畫の外に存在するものに對する追求である。而も此の如き期待や追求をなすと同時に、吾人は藝術品の美的觀照の外に驅逐される事になる。けだし美的觀照なるものは、是無拘束なる沈潛である、その對象たるや、吾人に對し絕對にして明白無疑問なる存在を有するからである。

此の種の絕對にして明白無疑問なる存在をば、吾人は曾て美的客觀性と名けた。併し今の場合では、異なりたる意義に於ける明白無疑問なる存在といふ事が問題とされて居る。異なりたる意義とは、吾人に出現し來るものゝ代りに或る他のものを吾人が期待しないといふ事である。言ひ換へると、吾人の精神中に於て、藝術品が吾人の把捉に提供するもの以外の或る他のものを把捉すべき自然的傾向が發生しないといふ事である。さうして藝術品の美的對象の此の如き新奇なる種類の明白無疑問なる存在をば、吾人は今「美的眞實」といふ名稱により呼ばうとするのである。

但し此の如く述ぶるといふと、此の種の眞實なるものが、一般的に如何なるものであるかゞ言明せらるゝのである。即ち之は、藝術品が、その與へようと主張する所のものを與へるといふ事である。而も又、之は、一般の藝術品としてゞなく、之に反し與へられたる場合に於てそれが與へようと主張する所のものを與へるといふ事である。けだし此の種の美的眞實は要求される。何となれば、藝術品なるものは、その本性上純粹觀照の對象であり、さうしてかゝる美的觀照なるものは、啻にその內容の表象の明白無疑問性、即ち吾人が呼んだ美的客觀性といふものを有するのみならず、尙その外に、反對する期待によつての無妨害といふ事をも有せねばならぬからである。更に之を換言すると、藝術品といふものは、美的理念性中に必然的に包有されて存する所の、その內容

の明白無疑問なる存在を要求するのみならず、更に反對する期待によつての無妨害といふ意義に於ける明白無疑問性をも要求するからである。

此の事は併しながら、藝術品の美的眞實が如何なる意義を有するかを同時に言明するのである。之に關しては吾人は尙一度美的客觀性の意義に於けるかの明白無疑問なる存在といふ事の意義を回想するを要する。抑も美的客觀性なるものは、敢へて、藝術品の美的內容が吾人に對して現實性を有するといふ事を言明しない。之に反しかゝる事に關する問題の起る餘地のないやうにあるといふ事を言明する。之は此の故に、先第一に消極的の意義を有する。之は現實性の存否の問題の除却を意味する。或は之を尙一層正當に發表すると、此の如く除却されてあるといふ點に於てその存在の根據を有する。ところが之と同樣の關係をば、美的眞實といふものも有するのである。此の事を吾人の前に擧げた實例が明瞭に之を證する。卽ちかゝる美的眞實といふものゝ意義はかうである。現實との一致が存し隨つて再認識をなし得るといふ事ではなく、之に反し、現存しない所の、現實との一致を期待する事によつて、藝術品の享樂が攪亂されないといふ事である。かくて之に關する原則の意義は、藝術品により何等かの再認識が可能にさるゝといふ事ではなく、之に反し、該藝術品により、その直接の充實を得ない所の再認識の期待といふものが吾人の心中に喚起されないといふ事である。

されど吾人は尙之以上のものを言明せねばならぬ。それは次のやうな事である。藝術品なるものは、一般的に現實との一致の期待を少しも吾人の心中に於て喚起せしめてはならぬ。何となれば、此の如き各の期待は、是現實に迄の指示、卽ち現實への着觀の發生であつて、隨つて藝術品の理念的世界以外へ脫出しての注目となるからである。されど又、可能なる期待にして直接に充實せしめらるゝ場合には、何等の期待は吾人に於て起らないのである。

今此の事を尙一層精密にいふと次の如くなる。再認識の何等の期待が吾人の中に於て喚起されないといふ事は、二種の事を意味する。第一には、かゝる期待を喚起し得る何物もそこに存在しないといふ事である。さうして此の第二の事は、若しも此の期待が直接に充實されないならばそれが喚起されるといふ事である。第二に下のやうな事を言明するのである。若しも期待が直接に充實せらるゝならば、之は全然期待として生起しない。換言すると、若しも現實との一致が直接に存するならば、吾人はその一致が存するや否やなどゝの疑問を起さない。吾人は、かゝる一致を直接に有するが故に、之を探求するを要しない時には、之が探求をなさないと。さうして此の如くあるから、「吾人は的中して居る肖像畫の觀照に際して、該肖像畫中に於て、之若くは彼のやうなものを發見しようと期待する」と言明するのは正しくない。吾人は此の如き「期待」をなす事は能きぬ。詳しくいふと、期待なるものは、吾人が目擊する所のものゝ中に於て直に消失するが故に、期待そのものとして決して生起する事は能きないのである。之と同樣に又、或る人間階級又は或る時代の特質のよく的中せる再生に於ても、吾人はかゝる特質を發見しようと期待しない。何となれば吾人は之を顯然發見し居るからである。

而も此の如く述べ來るといふと、「的中」といふ事が美的に如何なるものを意味するかゞ、同時に言明せらるゝのである。卽ち或る人間又は或る人間階級若くは或る時代の特質がよく的中してあるといふ事は、吾人が何等の內部的衝突なしに、卽ち何等かの期待と少しも矛盾する事なしに、藝術品中に於て之若くは彼のものを發見し、

進んでは一般的に、各の期待なしに、即ち吾人に提示せらるゝ所のものに對し、全然自由且つ內部的無妨害に吾人を沈潛せしむるを得るといふ事を意味すると。

但し此の如く斷定するに於ては、吾人が既に前に取上げた「期待」といふ概念に再び接觸するに至るのであるそは、吾人は前に、期待の充實よりして一の藝術的享樂が得らるゝといふ事を否認した。然るに今吾人は期待なるものが藝術品の享樂に對して一の意義を有するのを發見するからである。併し又、今の場合に於ては、一の期待の充實が吾人を歡樂せしむるや否やなどといふ事に就いては吾人は語つて居ない。之れに反し、一の期待の不充實が藝術品に對して有する所の意義に就いて語り居るのである。

之を簡言すると、吾人は期待の積極的意義ではなくて、その消極的意義に就いて今語り居るのである。ところが此の消極的意義とは、期待の不充實は一の期待を發生せしめ、かくて吾人をして美的觀照の外に逸出せしむるといふ事である。けだし充實されない期待なるものは、藝術品の中に存しない或るものを期待せしむるに至るから、此の如き結果に到達せしむるは當然の事である。即ち今や吾人の注目は、藝術品の外に存する所のものに向けられ、さうして上に述べたる如く、藝術品の美的內容の明白無疑問なる存在といふものは消滅される。されど此の如くある事の反對に、直接に充實された期待といふものは、美的觀照の外に吾人を驅逐しない。寧ろ之は、既に「期待物」を含有し居る所の、藝術品の內容に注目せしむる。けだし此の如く期待したものは現實に該當し居る。それかというて又、吾人は現實界に迄脫出するを要しない。何となれば、吾人がかゝる現實界中に於て發見し得る所のものは、正しく藝術品の中に既に存在し居るからである。而も此の如くあるが故に、此の場合の期待なるものは、その實何等の「期待」ではない。之は云はゞ、藝術品の內容に迄の注目、沈潛、此の中に於ける被拘束といふものに外ならぬのである。

更に又、再認識の美的意義といふものも、之により判明する。但し此の意義たるや、吾人が前に排斥した意義の正しく反對に立つものである。それは次の如くある。吾人は藝術品に接して再認識の歡樂を得んが爲に或るものゝ再認識をなさない。之に反し藝術品なるものは、與へられたる場合に於て、一の原物をば、その十分顯著なる容狀に於て直接に再認識し得、さうして之と共に、吾人が該藝術品に於て原物を認識し得るや否やなどとの問題が起らず、かくて再認識といふ意識的現象が吾人の中に於て發生しないやうに構成されてあらねばならぬ。吾人は今ちやうど述べた。よく的中せる藝術品中に於ては、それに於て再認識さるべきものが直接に存するが故に、それを探求しない。吾人は此の故に、吾人が目擊する所のものと、吾人がそれにより再認識をなし得るものとの比較をなさない。吾人に取りては彼れが如く直接に存する所のもの丈で十分すると。吾人は又言うた。再認識に對する歡樂なるものは、是藝術品に對する歡樂たるのではなくて、正しく再認識作用そのものに對する歡樂であると。而も此の如き歡樂を體驗せんが爲には、吾人は藝術品の外のものに注目せざるを得ないやうになる。尙之をより精密にいふと、吾人は二樣の方法に於て此の如く藝術品の外に注目せざるを得ない。第一には、吾人は藝術品の外に存する所の原物に注目をせねばならぬ。第二には、藝術品の內容と原物とを關係せしめて見ねばならぬ。さうしてかゝる二樣の事をなすが爲に、吾人は美的觀照の外に脫出する事になる。

併しながら此の如き脫出は、吾人にして、上述したるが如き方法に於て、被再認識物をば直接に再認し得る場

合には、起らない。その起るのは、唯かゝる再認識をなし能はざるか、又はそれが、吾人の期待に適合しない時である。此の反對に、若しも期待に適合せらるゝならば、然る時には、意識的再認識の可能、即ち藝術品と現實との一致の意識の可能は、除却されるやうになる。ところが、その如く除却されあつて、又その除却されあるといふ事のみが、かういふ要求、即ち吾人が被描出物中に於て現實を再認するを得るといふ事、或は藝術品と現實との一致といふ要求の意義を構成するのである。之を簡言すると、此の種の一致といふもいふは、それが吾人の意識に對して、そこに存在しないやうにする爲に、そこに存在して居る。更に言ひ換へると、之に關する疑問、隨つて又かゝる疑問に對する解答が、美的觀照から除却されてあり、かくて美的觀照に對しては、唯藝術品中に於て與へられたるものが、如何なるものを吾人に提供するかといふ一つの問題のみが殘るといふ事の爲に、そこに存在して居るのである。

最後に、此の如く述べ來るといふと、曾て語り、さうして再生的藝術に對して要求した所の象徴といふものゝ必然的合現實性と、今いひ居る所の「美的眞實」との反對といふものも明瞭になるのである。美的眞實なるものは、象徴、又は象徴と被象徴物との關係といふものに交渉しなくて、被象徴物自身の中に於ける連絡、即ち藝術品の內容中に於ける連絡に迄交渉する。此の種の連絡とても、かの象徴と被象徴物との連絡と同樣に、經驗の作出したるものである。之を例へていふと、經驗は吾人に告知するのである。藝術品中にある肖像の實物たる所の人間が、如何なるそれ〴〵の特質を有するかといふ事を。此の故に吾人は合經驗的に、その代用物たると稱する肖像中に於て、此の種の特質を發見するべく「期待」する。して又之と同樣に、前に述べたやうな人間階級の中には如何なる特質が存するかをも、經驗が告知する。此の場合に於ても吾人は亦期待するのである。若しも一の人物にして彼れが如き人間階級の代表者であると稱するならば、吾人がかゝる特質を彼れの中に於て發見し得るといふ事、隨つて又、此の人間階級の代表者が、現實に此の如きものとして吾人に顯現するといふ事を。

或は又他の實例を擧ぐるならば、經驗は吾人に告知する。槲の木は槲の實を有しさうして薔薇の花を咲かないといふ事を。或は槲の木の固有の生活は、自然的に彼れが如くあつて、さうして薔薇のやうな方法に於て行動をせぬといふ事を告知するのである。かくて吾人は今や要求するのである。槲の木なるものは、藝術的描出に於ても、亦そのやうな實を帶有し、さうして薔薇の花を帶有してはならぬといふ事を。併しながら吾人は、若しも藝術家がかゝる要求に隨つて措置したといふ事を發見する時には、自然の事實關係の再認識、即ち藝術的働作と吾人の理科的知識との一致が、吾人を歡樂せしむるが故に彼れが如き描出上の要求をなすのではない。之に反し、若しも反對せる期待によつて攪亂されないならば、吾人が吾人の前に槲の木に於て見る所の自然生活の一部が、吾人に對して存立し得るからである。或は之を積極的に表出すると、槲の木の本性と槲の實との間の、自然的にして且つ吾人に熟知されある連絡が、その實の中に存する所の自然生活に矛盾なく吾人を沈潛せしめ、さうして同時に、かゝる生活をば、槲の木の全生活との連絡の中に迄、內部的矛盾なく、即ち吾人自身との矛盾なく、適入せしむる事を許すから、彼れが如き要求をなすのである。

五　美的眞實と歷史的眞實

最後に、上述したる如き事實關係は、その對象を歴史から取り來る所の描出に對しては、特殊なる意義を有する。されど之に關しては、二つの問題を區別せねばならぬ。先づ第一に、此の際に於ても要求せらるゝのである曰く、被象徴物、即ち描出された生活の運絡は、此の如き生活の經驗上の運絡法と一致せねばならぬと。之を換言すれば、美的眞實といふ一般的要求は茲にも存立するのである。今一例を擧げると、「マリア、スツアルト」が「シルレル」の戯曲中に於て語るやうに、實際に於て語つたかどうかといふ事は、美的にどうでもよい事であるけれども「シルレル」の筆にする「マリア、スツアルト」が、現實、特に心理的現實の法則に基いても、「シルレル」が語らしむるが如く語るや否やといふ事は、美的に最大重要の事柄である。尙之を一般的に表出すると、被描出物が現實の世界に於て存現するや否やといふ事は無關心的の事柄である。けれどもそれが、現實の法則に基いて存現し得るや否やといふ事は、決して輕視すべき事ではないのである。

此の事を理解する爲には、吾人は、作者なるものが、個體ではなく、之に反し、一の連絡、特に內部的現象の連絡を描出するといふ事を考慮せねばならぬ。更に又、吾人が享樂する所のものは、實にかゝる連絡、即ち部分を關係せしめ、之を統一體に總括する所の全體そのものなのである。されど茲にいふ所の連絡なるものは、是、現實的經驗によつて作出されたものであつて、さうして之以外の方法に於ては、決して作出され能はざるものである。但し斯くあればとて、美的觀照なるものは、比の種の連絡に就いて彼是熟考するといふのではない。即ちそれが如何なる性狀のものであつて、現實界の法則は之に對して何と言明するかなどとの疑問を提起するといふ事は意味されない。此の如くある事の代りに、美的觀照なるものは、此の全然たる反對のものである。即ち此の場合に於ても亦、美的觀照は、現實、並に現實的連絡に關して彼是疑問を提起しない。併し又、それが此の如き疑問を提起しないといふ事は、正しく、此の種の疑問が、美的觀照者の心中に浮出されないといふ事を前提するのである。さうして若しも現實的連絡の法則にして違反せらるゝや否、茲に、かゝる疑問は浮出さるゝやうになる。

そこで凡て此等の事は、次のやうな事を言明するのである。被描出物と現實界の法則との一致、或は之をより正當に表出すれば、被描出物の部分が、現實界の法則と一致するといふ事はいつでも次のやうな場合に要求せらるゝのである。曰く、その部分は、吾人の現實的經驗によつて相互に結合せられ、さうして唯之によつてのみ結合され得るといふやうな性質を該被描出物が有する時である。而も此の如く要求せらるゝのは、敢へて美的觀照の對象としてではなく之に反し純粹なる美的觀照の前提としてであると。此の如き一致は、正しくそれが美的觀照の對象であつてはならないが故に、必然的に前提される。さうして現實界の法則に照しての被描出物の可能は正しく吾人がそれに關する疑問を提起するやうな事を無くする爲に、明々白々無疑問にあらねばならぬ。吾人は、かゝる疑問をば、吾人の留意がそれに向注されない程度に於て壓伏する。吾人は斷言する事が能きる。かのやうな被描出物の各部分が現實界の法則と一致して居るといふ事は、美的觀照に對して確固たる基礎の意義を有すると。而もかゝる基礎たるや、吾人がそれに對し全然自由無顧慮にされて、精神的逍遙をなし得る程確固たるものでなければならぬ。換言すれば、かゝる基礎に何等の留意を拂ふ事なしに、吾人をして純粹美的觀照に打任さしめ得るやうにあらねばならぬ。

かういふ譯であるから、今茲に取扱ひ居るやうな實例に於ては、現實界の法則との一致といふ問題は、積極的意義ではなく、消極的意義を有するのである。即ち此の場合にも亦、かゝる一致は、美的觀照の際に、それに對する留意が起らないやうにする爲にそこに存在する。けだし若しも之が存在しないならば、美的觀照なるものは此の方に留意を引かれ、かくて純粹なる美的觀照を妨害さるゝやうになるが故に、そこに是非とも存在せねばならぬのである。或は若しも此の場合に、吾人にして「錯覺」といふ語を用ふるならば、現實界の法則との一致といふものは、吾人がかゝる一致の爲に被描出物を一の現實のものと思認するに至るといふ意義に於ける美的錯覺の積極的根據たるのではない。之に反し、合現實性の缺損といふものは、現實界に迄吾人を留意せしめ、かくて錯覺、即ち被描出物に迄の純粹なる觀照的沈潛の外に出でしむるといふ意義に於ける、錯覺の消極的根據である若しも合現實性が缺損するやうな場合に於ては、「如何にしてかやうなるものが可能であるか」などといふ疑問が吾人の心中に喚起される。ところがかゝる疑問たるや、正しく美的觀照を中止せしむるものである。美的觀照に對しては、此の如き可能は常に自明的無疑問にあらねばならぬのである。

して又、現實界の法則との一致が、全然茲にいふやうな意義を有するが故に、各の場合に於て、それの不存在が美的觀照を妨害するといふ程度に於て、その存在が必要となつて來るのである。

併しながら以上の如く述べ來ればとて、今此の所で取扱ひ居る問題といふものは、未だ解決されないのである。そこで進んで第二の問題の考察に移らざるを得ない。一體、吾人が今迄語つて居つたのは、唯描出と現實界の一般的法則、特に現實界に於ける生活連絡の一般的法則との一致であつた。ところが歴史よりその材料を取り來る所の描出は、特別に歴史的の現實的連絡をも計算の中に置かねばならぬのである。吾人は此の種類の連絡に關して知識を有して居る。そこで今や疑問は起るのである。かゝる知識に促されて一の豫想、即ち描出が吾人に知られたる歴史的連絡に合當してあるや否やといふ事に關する期待が何等の程度迄喚起せらるゝかと。ところが此の種の期待は二個の要素に依從するのである。第一には、彼れが如き知識の確實の如何、即ち此の知識が吾人の所有となつて居る程度、並に吾人の全歴史的見解に對するか、又はその見解の中に於て、その知得された連絡が有する意義に依從する。第二には、當該藝術家が、吾人の中に於けるかゝる期待を除却する事に關して成功する程度に依從する。之を例へていふと、一の作品の材料は、たとひ甚だ多く歴史より取り來らるゝにもせよ、その內容たるや、如何なる場合に於ても、歴史的現實とは、全然異他無緣にある所の理念的世界である。そこで茲に至つて一の問題が起される。曰く藝術家が、何等の程度迄、その描出したものが屬する所の理念的世界に迄吾人を昇達せしめて捕捉し、かくて歴史的現實界から吾人を離斷し、その結果、かゝる理念的世界に於ける人物の行動及び受動がどれ程歴史的現實に合當するかなどとの疑問が起されないやうに成功するか。或は之を換言すれば、全然それが藝術品となつて居るにも拘らず、何等の程度迄、その歴史的人物の姓名が、右の如き疑問、即ち歴史との一致の期待を吾人の心中に喚起するか、などとの疑問が起されないやうに成功するかと。さうして作者なるものは、此の問題に述ぶるやうな事に成功する程度に應じて、彼れは「歴史を超越する所の君主」となるのである。

更に他方に於ては、先づ第一に、或る性格、並に或る事業や運命に關する吾人の知識が、歴史的姓名と、吾人の心中に於て密接に結合せられ、その特異なる性格、事業、運命は、吾人の全歴史觀の中に於て、又はそれに對

し、大なる重量を有し、爲に最大の藝術家も、上述したるやうな疑問を十分壓伏する事の能きない場合がある。此の如き時には、最大の藝術家も、もはや歴史を超越する十分なる自由を有しない。而もかゝる場合に於て藝術品の純粹享樂を可能にする爲には、換言すれば、合現實性に關する疑問を除却し、さうして之により純粹美的觀照の自由なる通路を開拓せん爲には、唯一つの手段が殘り居るのみである。それは、自發的にその超越的自由を放棄し、さうして歴史的眞實の顯著なる容狀を忠實に描出するといふ事である。而も此の如くある程度に於て、藝術品と歴史的眞實との一致といふものは、是、それ自身に於ては全然異なつたる種類の藝術的眞實、即ち美的眞實の條件となるのである。

此等の次第であるから、歴史を超越するといふ事は、一方に於ては、藝術家の能力に依從する事柄である。更に他方に於ては、之は歴史から取られたる材料が一般の歴史並にそれに關する吾人の知識に對して有する重要といふものに依從するのである。

最後に、一の藝術家が、歴史的現實に對して、かういふ意義に於て全然自由であると假定する。それは、彼れが、自發的に此の現實に一致するを要しないといふ事である。此の如くある時には、彼れは始めから歴史的事實の範圍に遠かつて居る方がよい。けだし歴史的現實とても、藝術品中に於ては、正しく、歴史的現實として存在しない爲のみで、そこに存在するからである。

抑も一切の合現實性なるものは、上述したる所によると、第一には、藝術品に對して、單に一の前提、即ち正しくそれが前提であるが爲にもはやそれに就いて彼是疑問を起されない所のものであり、かくて又再生的藝術に對し、美的享樂の對象として意義を有しないものである。第二には、合現實性に對する違反は、唯吾人がそれが故に合現實性を期待し、さうして藝術品がかゝる期待を吾人に於て喚起する限りに於て、藝術品に損害を及ぼすのである。さうして此の如き二つの理由により、合現實性といふ要求は、藝術品がその性質上何等の合現實性を要求しない程度に應じて消失する。或はそれ丈の程度に於て、究竟の唯一の到達點たる美的眞實の條件たるのではない。此の場合に於ても亦、「藝術品が主張しないか又は主張しようと欲しない所のものを、吾人は期待しない。又期待しようとも欲しない」といふ言は成立するのである。さうして又藝術品なるものは、それを構成する要素が、現實界の法則に從つてそれ自身の中に連絡されあるといふ事をば、その性質に應じ、甚だ異なりたる程度に於て要求するのである。

之を例へていふと、かの童話なるものは、現實的連絡の或る一般的の根本容狀に關してのみ右の如き要求をなす。此の外に、之は、全然現實界の或る法則に遠かり居る世界の中に吾人を轉置する。而も此の如く吾人を轉置するのは、その本來の意圖であつて、吾人はかゝる世界を歡迎し、その中に吾人自らを投入する。併しながらかゝる世界に對しては、現實界の法則なるものはもはや何等の効力を有しないが故に、此の法則そのものも亦違反さるゝ事は能きない。言ひ換へると、その違反の爲に、吾人が、錯覺、即ち被描出物に迄の純粹なる美的觀照及び沈潛の外に驅逐せらるゝやうな事はないのである。

さうして又、此の如き關係は、右の童話に於て存するのみならず、或る彫塑的描出に於ても存するのである。かの半人半馬とか海馬とかいふものは、博物學上不可能なる形體である。さうしてそれが此の如く不可能である

といふ事は、誤つて、博物學の熱狂者をして、此のやうなる身體の藝術的描出を禁止せしめようとするに至らしめた。而も此の如きは實に奇怪なる錯誤である。由來彫塑家なるものは、決して博物學の教師ではない。彼れにとつての問題は、何が博物學上可能であるか否かといふ事ではない。之に反して、若しも吾人がそれ〴〵の形體に接した時に、かゝる形體から受取る所の吾人の直接的印象の言明に從へは、何が可能であるかといふ事である或は之を言ひ換へると、此の如き形體が吾人を轉置する所の世界、卽ち理念的世界の法則に從へば、何が可能であるかといふ事である。

更に吾人にして、之から尙一歩を進むるならば、吾人は、現實界の單に最高普遍なる法則のみが効力を有する所の建築世界及び技工的藝術品の世界に到達するのである。此等の世界を構成する所の形なるものは、自然連絡並に自然力の多樣なる活動から取出だされて、最高普遍なる器械的合法性の抽象的範圍中に移入されてある。此の故に、之に於ても唯、かゝる最高普遍なる合法性が邂由されてあるや否やとの問題のみが起る。隨つて又、かゝる合法性に對する違反のみが美的錯覺を廢滅せしむる。

最後に又、藝術の中には、吾人の外にある現實界中に於て吾人が遭逢する何等かの合法性と少しも交渉を有しない藝術もある。之に就いては先第一に、吾人は音樂に想到せざるを得ない。音樂的藝術品の元素、卽ち單音及び調音なるものは、吾人が外界に於てなす經驗の法則に邂由してではなく、之に反し、己れ自らの音樂上の法則に基いて關連結合せしめられる。此の如くある結果、此の音樂に對しては、もはや違反さるべき現實的法則なるものはない。隨つて又、吾人が、かゝる違反により、美的錯覺の外に驅逐さるべき可能も存しないのである。

而も此等の藝術の考察から發生し來る所の事項は、一般の藝術に對しても一の光明を放射するのである。卽ち音樂なるものは、一個の藝術であつて、さうして之に於ては、合現實性、卽ち現實の模倣といふ事を語るのは何等の意義を有しないのであるが、之によりて見るも、合現實性なるものは、藝術の一の要素たるのではない。尙又、その合現實性の意識なるものは、藝術品の美的觀照に於ける一の要素たるのでもない。之は唯、特殊の藝術に對してのみ重要である。さうしてかゝる藝術に於ては、その特殊の性質上、被描出物の各部の相關が、唯現實的經驗によつてのみ吾人に對して確定され得るが故のみにさうである。併しながらかゝる藝術に於ても、合現實性ではなく、之に反し、單に、現實界の法則と全體の各部の相互間との一致といふ事のみが問題となる。さうして此の事が何等の程度迄問題となるかといふ事は、此等の藝術に於ても亦、常に、何等の程度迄、藝術品が吾人を誘入する所の世界そのものが、現實界の法則に基いて構成された世界であるべき要求をなす程度に依從をするのである。

第四章　藝術品の享樂

一　藝術品の享樂の特質

一體藝術品の特質といふものは、その特殊なる美的理念性、客觀性、現實性、並に深さなどから發生し、更に其の美的眞實といふ概念により表示せらるゝのであるが、かゝる特質は、それ自身の爲に意義を有するのではな

い。之に反し、それが、美的觀照、即ち美的享樂の目的に役立ち、且つ美的享樂の質特を根據づけるからである。

之を例へていふと、かの大理石により描出された人間なるものは、吾人に對しては、現實的のものでもなければ又非現實的のものでもない。その結果、かゝる人間は、現實界にも屬しなければ、又現實界に缺損もして居ない。彼れは現實界を豐富にもしなければ、又現實界に於ける一の缺損となるものでもない。彼れは即ち、現實界に於て何等の場所を有しもしなければ、又現實界の經過中に於て何等の位置を占むるものでもない。彼れは、吾人、即ち此の現實的人格、並にその他の任意なる現實的事物から、遠隔もしてあらなければ、又近接をもして居ないのである。

更に之を詳しくいふと、大理石描寫品、又は繪畫、若くは戲曲、叙事詩等に於て描出された人間なるものは、地球上の如何なる場所、如何なる國にも、附屬しない。之は、吾人の想像に對し、單に當該造形藝術家が、その描寫品、或は作者が、その作品そのものゝ中に於て與へて置いた場所に於てのみ存在する。此の故に、各個のものは、藝術品の中に於て一の場所を有するのはいふ迄もないが、併し此の場所たるや、たゞ藝術品の中に於て藝術的に描出された空間の範圍内に於て與へられてあるのである。之と同樣に又、描出された時間的連絡の中に於て與へられてある所の時間的位置のみを有する。併し又、藝術品の内容といふものは、全體としては空間的にも時間的にも、無場所、無位置のものである。特に之は現在にも過去にも屬しない。又世界歴史の何等かの現象に對しても、かゝる現象が藝術品中に現出せしめられ、さうして被描出物と時間的關係に立たしめられる場合を除いては、前でもなければ又後でもなく、更に同時的でもない。さうして此の如くあるから、藝術品中に描出された現象なるものは、もはや世界歴史的のものではなく、之に反し藝術品中に描出されたものであり、今や美的觀照の爲のみに、その中に存在を有する事になるのである。

併しその此の如くあるといふ事は、藝術品の全内容が、或る方法に於て空間的並に時間的に規定され得るといふ事、即ち空間的並に時間的の色彩により規定され得るといふ事を妨げない。されど、此の如き規定は、それ自身に於ては一の純然たる質的の規定である。さうして藝術品が空間的並に時間的の規定を其の中に包有するといふ事は、是全然美的觀照以外に存する所の一の事實たるのである。

尙此の外に、藝術品の全内容に對しては、唯一の場所と唯一の時間とが存する許りである。即ち吾人の想像作用中に於ける非空間的並に非時間的現在、更に換言すれば、吾人が該藝術品を觀照する度毎の體驗が存する許りなのである。

更に又、藝術品に對しては、空間的の關係と時間的の關係とが缺損する許りでなく、該藝術品の外に存する所の何等かの現實物、即ち現實界に於ける吾人、又は他人、又は事物に對する各の因果關係といふものも缺損する。されど又、或る意義に於ては、固より吾人との關係に立つ。それはかの「美的感情移入」といふ語によつて表示せらるゝ所の理念的關係である。さうして右の缺損する關係といふのは、觀照する所の自我に對する此の如き理念的の關係ではなくて、藝術品中に描出されたものと、敢へて觀照をなして居ないところの現實的自我との現實的關係たるのである。藝術品中に描出された形像に對しては、吾人の現實的自我は、空間的に解釋さるべくないところの絶對的遠隔の關係に立つ。さうして其の此の如くあるといふ事は、二つの理由、否結極一つの理由

からである。それは、第一には、單に表象されたものは、吾人と何等の現實的關係に立つ事が能きないからである。第二には、此の如き現實的關係に於て現出する所の現實的自我なるものは、美的觀照に於ては除却されてあるからである。

特に又、藝術品中に描出されたものは、吾人にも、將たその他の現實物にも、利害を及ぼす事は能きぬ。之は世界に於ける現實的目的の實現に對し、何等の効果を及ぼす事なしに存在する。更に之に關する卑近の一例を擧げると、藝術品中に描出された雪景色は吾人を寒冷にする事は能きぬ。描出された樹木は、何等の山林學的價値を有しない。戲曲中に於ける人物は、吾人又はその他の現實的個人を威嚇する事は能きぬ。叙事的作品中の人物の計畫は吾人又は他人の計畫に交渉を及ぼす事はない。終りに又、吾人は、作品中の人物と、思想に於て競爭する事は能きぬ。吾人はそれに對し嫉妬の念を起さない。何となれば、かゝる人物の幸運、富有は、現實性を缺損し、隨つて吾人の幸運、富有を少しも損減せしめないからである。

固より此等凡ては自明の事である。されど一つの點は玆に特に高調せねばならぬ。吾人にして、かの欲望又は願望といふ語の下に、或るものを吾人の現實の所有となさうといふ事に向つての努力、或は現實物に迄向注する所のその他の努力といふものを理解するならば、然る時には、藝術品上の顯現及び內容、隨つて一般の藝術品はそれ自體としては、卽ち美的觀照の對象である限りに於ては、又それである間は、かゝる欲望又は願望の對象となる事は決して能きぬ。一般の美的觀照なるものは、此の意義に於て、絕對的に無欲望及び無願望のものである

但し吾人にして、かゝる欲望及び願望をば、藝術品の感官的顯現を接受し、その內容を體驗しようとの要求の意義に解釋するならば、その場合には勿論、藝術品に對する吾人の美的態度は、蓋し强烈なる欲望及び願望となる但し吾人は、之以外にも、美的觀照の對象、卽ち戲曲又は叙事的作品中の主人公に對しても、最も强い欲望及び願望を起し得るのはいふ迄もない。さうして此等の次第であるから、藝術品の享樂中に於ては、吾人の意志が沈默するといふ事を全然一般的に言明する程不當なる事はない。けだしかゝる際には、唯現實界に迄向注された意志のみが沈默する許りなのである。

さうして斯ういふやうな種類の意志が沈默するといふ事は、更に人により他の言語で表出される事がある。曰く、藝術品の中に感じ込まれたものには、動機力が缺損すると。又斯かる理由よりして、此の如く感じ込まれた る感情の力が微弱であるといふ事も結論される。終りに又、此の如く微弱なるが故に、此の感情は外面的感情の狀態を呈するといはれる。併しながら凡て此等の事は、實に珍妙なる誤解である。その實をいふと、藝術品の中に感じ込まれた感情なるものは、最高の動機力を有する事が能きる。吾人は、戲曲又は叙事的作品中に於ける人物が、その性格に相當する方法に於て衝突を解決せん事を最も熱烈に要求する。吾人は自尊者に對し、彼れが爭鬪及び不幸の中に立つて毅然として自尊者たる實を擧げん事を要求する。ところが此の種の要求たるや、正しく彼れが如き性格の爲に、最も判明に動機づけらるゝのである。

併しながら勿論吾人は、藝術品の中に感じ込む所の何物をも、現實の行爲に迄促進したり要求したりしない。之を例へていふと、現實の負傷を目擊するといふ事は、吾人をして之を繃帶するに至らしむる。然るに單に描出

された負傷に對しては、吾人は繃帶をなす事は能きない。かゝる繃帶は、唯藝術家のみが爲し得る。さうして之は正しく、彼れがその繃帶さるべくある所の負傷を描出するが故のみに爲し得る。而も之は、描出された負傷がどこ迄も描出されたものであるといふ單一の理由に基くのであつて、さうして負傷者に對する吾人の同情が、決して微弱卽ち單なる「外面的感情」であるが故ではない。いふ迄もなく、描出された負傷に對し現實の繃帶材料を持出すなどは、何等の意義をなさない。吾人にして若しも此のやうな事をしようとの單に思想だけでも抱くならば、吾人は痴愚たるを免れない。

之と同樣に、吾人にして、若しも舞臺に於ける主人公の威嚇に接して逃走したり、描出された火事を消す爲に消防隊を呼んだりするならば、痴愚となる。此の如き事を爲すのは、畢竟、美的に體驗されたものと經驗的の現實性とを混同するに由るのである。

併しながら吾人は既に知得した。美的事物の內容なるものは、吾人が、若しも、吾人の思想又は回想に吾人を打任す時に、此の如き內容に結合し得る所の各の他の表象連絡、又は思想連絡から、絕對的に離斷されてあるを。「人によりては問ふかも知れぬ。「ハムレツト」があの上生きて居つたならどうなつたかと。或はその主人公の悲劇的沒落に對し、最も眞面目に、彼れが天國に昇り、さうしてそこで報償されると思認して己れを慰藉する者もある。或は、彼れが現世の苦痛の後に「虛無の靜穩なる港」に入り、そこに平和を發見するといふ思想を以て滿足する者もある。けれども此等凡ては、次のやうな場合を除いては、全然背理である。それは、吾人が、藝術品の中に於て、如何に描出された人間が天國に行くかを目視するか、又は死者が藝術品の中に於て此の世に歸り、さうして謂ふ所の虛無の幸福なる平和の事を吾人に語る場合かである。

更に戲曲中の人物に對しては、その戲曲中に於て吾人に現出しない場所や時間といふものは決して存在しないから、其の人物が、幕と幕、又は第一現出と第二現出との間に於てどこに滯留して居つたかを穿鑿するなどは、此等の人物そのもの、又は戲曲中に於ける他の人物が、それを報告する場合の外は、亦不合理たるのである。

吾人は繰返して云ふが、藝術品の理念的世界なるものは、啻に一の理念的世界である許りでなく、更にそれ自身の中に絕對的に完結されある世界である、さうして此の種の完結せる世界なるものは、空間的並に時間的に、それが藝術品の中に於て延長し、さうして、そこに美的客觀性を有する丈の程度に於て延長する。人にして此の種の世界をば、その思想に於て擴大し、かくて藝術品の損傷を顧みずしてそれを敷衍する所のものは、恰も夢の中に於て得たる財產を以て覺醒後の今何にそれを使用するが最も有利であるか。又はその財產を基礎として如何に今その生計を營むべきかを、極めて眞面目に考究しようとする者と、同樣の行動をなす事になる。

今玆に及んでは、美的觀照に對して特異なる尙一の要素を格別に擧示せねばならぬやうになる。本來藝術品の美的觀照に於ては、啻に美的客體が、その客體でない所のもの、卽ちその客體と共に唯一の美的統一體を構成して居ない所の一切のものとの連絡から離斷せらるゝのみならず、更に美的主體といふものも亦、かゝる觀照享樂をなす所のもの、卽ち藝術品そのものゝ中に於て享樂する所の主體でない所の一切の主體から、離斷されるのである。かくて今や美的客體を觀照し享樂しながらその中に停留する所の自我は、現實世界の中に生活する所の自我、並に自己の思索に耽り、かくて之若しくは彼のものにより感動さるゝ所の自我から、離斷さるゝやうになる

之を簡言すると、己れ自身からの自我の解放、己れ自身を超越しての高上、各の他の理念的自我からの解放といふ現象が、發生するに至るのである。

されど斯く述ぶればとて、別に新奇なる事項が言明せらるゝのではない。何となれば、藝術品の理念的內容、卽ち藝術品の感官的顯現の中に感じ込まれたものは、究極する所、此の如き觀照し享樂する所の自我に外ならぬからである。美的觀照の客體と主體とは、美的觀照に於ては分割されてあらぬ。隨つて、觀照の客體たる美的內容にして離斷されてあるならば、それと共に、觀照する所の自我も亦、かゝる觀照の外に存する所の自我から離斷されてある。兩者はどこ迄も同一たるのである。

かゝる美的觀照に於て停留する所の自我は、是超個人的自我である。之は、かの科學的認識をなす所の自我、並に道德的評價をなす所の自我が、超個人的のものであると同樣の意義に於てさうである。右の如き自我は、觀照さるゝ事物の中に於て生活する。されど觀照さるゝ事物は凡てのものに對し同一であるが故に、超個人的自我が生ずるのである。

同時に又、此の自我は、他の意義に於て超個人的のものである。之は、吾人が他の場合に於て吾人の中に發見する所の個人的自我よりも、より高遠なるものである。吾人は美的客體中に於ては、次の樣な意義に於て吾人を「超越」して居る。それは、吾人の理念的にして同時に藝術品中に於て事實的に體驗された自我が、一の理想的の自我に變ずるといふ事である。さうして玆にいふ理想的自我とは、その內容に關しての理想的のものゝ謂であつて、卽ちより大なる力より多くの豐富を有し、藝術品の統一の爲に特に高度に統一化されある所の自我たるのである。

然しながら又、藝術品の美的內容の顯著といふ事を別にするも、かのやうな自我は是理想的の自我である。それは既に、藝術品の觀照、評價、享樂が特異なる性質を有するが故に此の如くある。此の如き觀照及び評價は、上述したるものに基くといふと、絕對的の客觀性のものと稱する事が能きる。その故は、これが客體によりてのみ制約されて居るからである。又その際、客體がその中に帶有する丈の價値を認知するからである。之は、客體の外に存する所の何ものによりても攪亂されざる限りに於ては、全然純粹なる觀照及び評價である。之は全然、美的客體と、吾人卽ち客體中に觀照し享樂しながら停留し、かくて此の客體と徹頭徹尾同一である所の自我との對話である。さうして又、其のやうに客體と自我とが徹頭徹尾同一となり居る限りに於ては、之は又かゝる對話の全然たる反對のものである。

美的觀照及び評價は、同時に、可能的に最强烈なる觀照及び評價である。吾人にして現實の自我から解放されてあり、且つ美的客體の外に存する所のものから解放されてあり、全然かゝる客體の中に停留するならば、然る時には、把捉及び評價の吾人の全き力は、その客體中に於て實現されてある。さうして若しも美的客體にして一の美なるものであるならば、同時にかゝる把捉及び評價、簡言すれば美的觀照といふものは、最も十分なる自由の働作となる。卽ち吾人は、啻に客體の外の一切のもの　及び吾人の現實の自我から解放されてあるのみならず更に客體中に於ても、吾人を自由に働かせたり生活せしめたりする。而も此の如き自由は、美的客觀性、卽ち美的客體に迄の吾人の被拘束狀態と反對に立たない。換言すれば、吾人が全然客體の魅力の下に立つといふ事は、

自由といふ事と少しも矛盾しない。之に反し、此の種の自由は此の如く魅力の下に立つといふ事により、始めて可能となる。世にいふ所の選擇なるものは眞の自由ではない。之は種々の可能からの選擇である。之に於ては、他の可能及び刺激が、常に吾人の決斷する所の可能に對立する。さうして凡ての選擇に於ては、かゝる相反性のものが存在する。而もかゝる相反性は十分なる自由の反對である。此の如くある事の代りに、十分なる自由なるものは、限定された範圍內、卽ち吾人自らの本性と客體が要求する所のものとの力及び憧憬の合體したる統一體の中に於ける自由なる自己活動中に存するのである。

此の如き自由は是「美的自由」である。之は最高種類の自由である。之はかの知力的自由、卽ち思惟の任意などから成立しないで、思想と現實の要求との自由なる調和から成立する所の自由と同種類のものである。或は又、之よりも一層直接に、之は倫理的自由と比較する事が能きる。倫理的自由とは、實に倫理的法則に對する自由なる一致、卽ち意志と當爲との自由なる調和たるのである。

ところが此のやうな美的自由は、唯藝術のみが、十分なる程度に於て與へる。さうして藝術が之を與へる事の能きるのは、それが、絕對的に自明なる美的理念性、美的離隔性、美的客觀性、現實性と深さ、場合によりては美的眞實を有するからであるのである。

二　美的象徵と非美的象徵物

抑も藝術品に於ては、一の感官的のものが、物理的の現實的連絡の外に取出さるゝ事により新奇にして特異なる官能を取得するのである。或は之を逆に言ふと、かゝる感官的のものをば、現實的連絡の外に出でしむる所のものは、實に此の如き官能たるのである。此の種の官能は是一の理念性のものであつて、さうしてかのやうな感官的のものは、かゝる理念的世界の物質的帶有者、卽ち感官的基體たるのである。吾人は又此の如き官能を稱して、象徵化の官能と呼ぶ事も能きる。而も此の如くあるとすると、藝術の本質なるものは、一の感官的のものに對し、それをして美的象徵となり得せしむるやうな存在法を附與するにあるといふ事が能きる。之を例へていふと、大理石の彫像者は、大理石塊をして、それが現實的連絡の一部として有する所の物質的官能から離脫せしめかくてその中に表出された生活の感官的帶有者たるべき官能を之に與へる。換言すると、之をしてかゝる象徵の帶有者とならしむる。ところが又、此の如くして象徵化されたものは、正しく是理念的のもの、卽ち一の生活である。して又、かゝる理念的のものが象徵化され、さうして感官的帶有者に結合せらるゝ事により、之は、その他の理念的存在を有し得る所の一切のものと異なりたる存在法を取得するに至るのである。

ところが此の如き美的象徵は、一切の非美的象徵と嚴密に區別されねばならぬ。否美的見地からすると、此の如きものは、是象徵ではなく、寧ろ象徵物と呼ぶ方が正しい。此の如き象徵物の中には、藝術品が言明しない所の一切のものが屬する。換言すると。藝術品の中に於て感官的直觀に供せられなく、之に反し單にそれが言明すべくある所のものが屬する。卽ち之は、藝術家が、藝術品の中に於て與へなくて、單に思認し、企圖し、眼中に置き又は置いたものたるのである。

かゝる非美的象徵物の中に入るべきものは、先第一に、一切の因襲的象徵物である。一例を擧げると、かの後光（ヘイリーガンシャイン）

といふものは神聖を意味し、鍵は使徒、人間の手にせる劍は、恐くは此の人間が劍難に逢ふといふ事を意味し、又更に之を「パウルス」と認めしめようとする。次に又、題詩布（シブルフペント）なるものは、或る人間が抱く思想を吾人に告知しようとるす。併しながら進んで之を推究すると、後光なるものは、決して神聖でもなければ、又その中に神聖なるものは「存在」しない。さうして鍵とても亦、それを帶有する所のものをば、單に鍵の帶有者とならしむる丈であつて、決して其の他の何ものにも之を爲さない。更に劍の中にも、少しも劍難の樣子は存在しない。又之を佩有するといふ事の中には、單に佩有、卽ち佩有といふ働作が存在するのみであつて、此の外の何ものも存在しない。さうして吾人にしてそれに倚托する人間を見るならば、吾人は正しくかゝる倚托作用のみを見る　成程沈思して悟性を働かす所の人に對しては、之が「パウルス」を意味するといふ事が言明され得る。けれども又、劍の佩有者は吾人に對しては未だ「パウルス」にはならない。さうしてかの題詩布とても、その實の所、一の描出された人間に對し、吾人が何等かの思想を歸與するやうにあらしめたいとの藝術家の願念のみを告知する。而もこれにも拘はらず、吾人はかゝる思想を「目視」しないのである。

之を簡言すると、此等の象徴が意味する所の凡てのものゝ中の何物も、藝術的に描出されてあらない。卽ち吾人が吾人の眼前に目視する所の感官的のものゝ中に直接に存在しない。若しも吾人にして、此の如き非美的象徴物が帶有する所の衝勵に追隨するならば、然る時にそれはかういふ事を意味する。吾人が藝術品によつて刺激せられて、藝術品の中に於て描出された理念的世界の外に存する所の思想界中に吾人を一任するといふ事を。吾人は此の如くある結果として、理念的世界のみを對象とする所の美的觀照の外に脫出し、さうして吾人の知識の世界

卽ち右の場合に於ては、吾人の歷史的知識の世界の中に吾人を投入する事になる。更に又、此の如き美的觀照の外への脫出に對する衝勵を吾人に與ふる所の藝術家は、正しく之によりて、藝術品を壞亂し、藝術の唯一の本質を否定する事になる。

世にいふ所の各の譬喩（アレゴリー）なるものは實に此の如きものに屬する。之に於ては、既に名稱そのものが、藝術品の言明せず又言明する事の能きないものをそれが言明しようと欲するといふ事を指示する。或る藝術家が正義を描出すると自稱する。ところが彼れが描出する所のものは、その實、飾帶と秤と劍とを有する婦人である。之は都合によると、自尊的態度や威嚴ある容狀の婦人であるかも知れぬ。或は又、彼女が秤を持つたり、劍を握つたりする仕方の中には、嚴肅なる優美や優雅なる崇高といふものが存在するかも知れぬ。さうして其の此の如くあるといふ事は、此の形像に對し、確に藝術的價値を附與するに相違ない。けれども此等凡ては、正義と少しも交渉を有しない。若しも吾人にして、此の如き藝術品に「正義」といふ題名を與ふるならば、それは吾人の思念し出す所のものであつて、決して藝術品そのものゝ描出する所のものではない。吾人は之により、吾人が美的に何を體驗するかを確定する事は能きない。之に反し、單に吾人の思想上の附加物を表示する許りなのである。

さうして正しく此の如き非美的象徴物に屬する所のものは、一切の宗教上、神話上、歷史上の描出である。此等にして、此の如き宗教上、神話上、歷史上の思想內容を描出する程度に於て、此等は藝術的のものではない。吾人は、今此の如き描出をする程度に於てはと言明する。何となれば、之が實際かゝる描出をなすといふ事は、是それ自身に於て一の矛盾であるからである。之を例へていふと、或る藝術家が「マドンナ」、又は末審日（コンダステス・ケリセト）を描出

するといふことが確言されるとする。ところが、前述したる正義の譬喩中に、正義が少しも描出されて居ないと同樣に、此の「マドンナ」又は末審日の描出中に於ても、「マドンナ」又は末審日は描出されて居ない。此の如くある事の代りに、被描出物は、第一の場合に於ては、恐らくは親愛、純粹にして且つ甚だ優雅崇高なる之若くはかのやうな性格の婦人である。併しながら之と同時に、「マドンナ」といふ語がその中に包有する所の特殊のものは少しも言明されない。さうして又末審日といふものとても、之若くはかのやうな感情的狀態及び方法に於て行動すべき大なり小なり處世上眞實の人物を示す。併しながら此の中に於ても亦、末審日といふ概念が意味する所の特殊の何ものも存在しなければ、又存在する事も能きないのである。

最後に、非美的象徵物即ち非藝術的なる象徵物に屬するものは、吾人が、目錄、標題、署名、名稱、番附註釋、哲學的解說等を基礎としたり、それに指示されたりして、藝術家にして此の如き思想上の附加を吾人に對して要求する所のものは、取りも直さず、吾人がそれを僞造せん事を希欲するものである。本來、目錄とか標題とか署名とかいふものは、主題を告知し、藝術家の心中に浮出した所の題目、對象、理念を表示する。されど此等凡てのものは、藝術品の內容ではない。題目なるものは、場合によりては、偉大、崇高なるものであるかも知れぬ。その時には、之は、その藝術家をば、藝術家としてゞはなく、之に反し人間として高貴にする。けだし藝術家を高貴になし得るものは、唯藝術品のみである。卽ち藝術品中に存在し、さうして吾人に迄進透する所のもの、簡言すればその內容である。ところが右の題目の中で、藝術品の內容となるものは、藝術家がその中から取出し、さうして藝術品中の感官的のものに迄直接に體驗し得るやうに轉置した所のもの許りなのである。

而もかゝる內容は、いつでも一の哲學的の「理念」のやうな普遍的のものでもなければ、又歷史的現象のやうな個體的のものでもない。之に反し吾人が單に目視し得るのみの個體的特徵を有するものである。之は此の如く規定されたものであつて、さうして決して數的に規定された之々のものではなく、その質的特性中に於て規定せられ、その上、今とか此の所とか、彼の所とか、その時とかいふものから離斷せられ、さうして常に且つどこにでも、現存し又現存し得る所の現在に屬するものである。之は普遍的であると同時に個體的のものである。之は一言以て覆へば、一の個體的範型（チプス）たるものであるのである。

此の如き言明は、又かの肖像畫に對しても成立する。吾人が藝術的肖像中に於て目視する所のものは、美的觀照に對しては、決して之々の姓名を以て呼ばるゝものではなく、之に反し之々の男子又は婦人である。さうして之が藝術的價値なるものは、吾人が目視する所のものゝ中に於て、吾人に對し、吾人が體驗し得る所の積極的人間性の如何なるものが存在するかといふ事によつて確定される。さうして人にして、一の肖像畫、例へばその父母を畫かしむる所のものは、意圖された人物が的中してあり、彼れがそれを再認識し得るやうにすべしといふ事を要求すべき權利は固より有する。併しながら此の種の顧慮は、これ非美的にある所の敬虔上の顧慮である。美的問題としては、此の如き特定の人間が的中してあるや否やといふ事ではなくて、その中に於て一般的の人間に的中されたものが存するや否やといふ事である。

そこで以上の如く言明し來ればとて、その語の最廣義に於ける「題目」といふものからして各の美的意義を奪

ひ去るには至らない。併しながら吾人は、此の語を最廣義に解するといふと、吾人は此の語により、藝術品の內容を該藝術家に於て發生するに至らしめたもの、卽ちその內容を彼れに於て形成するに至らしめた一切のものを理解しようとするのである。さうして此の如きものは、種々のものであり得る。卽ち一の一般的の思想、各個の體驗、又は藝術家により知得された各個の事實、各個の歷史的、神話的事件、彼れ一個人の體驗に屬する事件、或る人間、或る狀勢等である。都合によると、此の種のものは、先第一に當該の事物表象を產出するに至らしめた所の一の氣分、卽ち內部的心態に外ならぬ事もあらう。孰れにせよ、藝術家なるものは、以上諸種のものからして、藝術的のものを構成する。併しその場合には、彼れは正しく彼れに適當するもの、卽ち藝術的描出を可能ならしむる所のものを取出す。さうして此の如くすると共に、彼れは普遍を個體化し、個體をば普遍化する。換言すると、普遍と個體との兩者からして、個別的性質のものであつて同時に普遍效力的のものを形成する。而も此の如く形成されたるものは、是普遍的のものでもなければ、又個體的のものでもない。之は個體的普遍的のものにして、簡言すれば藝術的のものたるのである。

併しながら又、彼れが如き廣義に於ける所の題目の如何なるものが、藝術家の精神中に興起し、さうしてそれが如何に偉大顯著のものであるかといふ事は、當該藝術品の發生に對して決して無關心的の事ではない。されど又、かゝる問題は、是その藝術品發生の歷史に屬するのであつて、さうして斯かる歷史なるものは、藝術品そのものではないのである。

但し藝術品の享樂に對しては、その內容が、一の一般的にしてさうして享樂者に對して人間的に顯著なる思想的連絡中に適入し得るか、又は、それが、個々のもの、卽ち個々の事實、個々の體驗、或は都合によりては彼れ自らが經驗したもの等に、結合し得るや否やといふ事は、決して不重要の事ではない。此等諸種のものは、彼れが藝術品の內容中に進透し、それを固持する事に對し、一種の豫備として、彼れに取つて、基礎、反響板、支點といふものに役立つ。併し又、美的享樂に對するかゝる豫備卽ち基礎は、決して美的享樂そのものではない。美的享樂なるものは、藝術品の內容に對しての純粹なる美的觀照並に純粹なる沈潛である。されど此の種の事が實行せられ、さうしてそれが純粹である程度に應じて、かのやうな豫備、基礎は、意識外に消失し、さうして單に無意識的の餘響、無意識的の反響板、並にそれより發生する所の、藝術品の內容に對する用意として働く。之は此の故に、その享樂の對象ではなくて、單に享樂の高さに對する共働的條件である。藝術品に對する美的享樂なるものは、常に藝術品そのものゝ享樂である。隨つて若しも事實關係が之と異なり、藝術品に對して附加的に考へ込まれたものが、その觀照の際に働きを及ぼし、かくて觀照及び享樂の附加的對象となるやうな事があるならば、享樂者は、享樂に關して己れ自らを欺く事になる。卽ち彼れは、藝術品によりて快感を得ようと思ひ、さうしてそれをば、己れの思想からして得る事になるのである。

之を逆に言明すると、藝術品の享樂、隨つてその價値なるものも亦、若しもかの名稱とか標題とか、署名とか目錄とか、歷史的、宗敎的、神話的回憶、又は哲學的解說とかゞ、觀照者の意識の外に脫出し、その結果、彼れの意識に對して此等凡てのものが存在しない時に、殘存する所のものである。さうして藝術品にして、より高等のものであつて、且つより深く働けば働く程、益ゝ確實に、それは純粹なる美的觀照を强制し、かくて己れ自身

から、卽ち己れ自らの力によつて、美的觀照の外に存する所の諸動力をば、享樂者の意識外に排逐するに至るのである。藝術品によりては、特別に一般的思想を喚起せしめたり、その內容は、吾人に對し一層深い思想的連絡の中に適入する事もある。併しながら、此の如きものを必要とし、之を待ちて始めてその自稱的價値を取得する所の藝術品は、憐むべきものである。それが此の如くあると共に、藝術品としての價値を己れ自ら棄却するのである。

然かはいふものゝ、吾人は藝術史上に於ては、他の時代に於けるよりもより多く、觀照者が藝術品の外に脫出し、さうして各種のものを附加せん事を藝術家が要求する時代の存するを見る。かゝる時代は、是原始の藝術發達の時代か、又はその墮落の時代かである。卽ち此の兩種の時代に於ては、藝術品が低級であればある程、それは益〻多くのものを意味せざるを得ないやうになる。かくて藝術家は、その藝術品が、より僅少のものを言明すればする程、益〻多く藝術品に對し附加的の思念を促がす。簡言すれば「理念」が內容を補充するやうになるかの原始的藝術に於ては、後光や題詩布が、藝術品の「言明」しない所のものを「言明」すべくある。さうして墮落藝術の時代に於ては、吾人は哲學的解說を以て藝術品を補足せねばならぬ事になる。此の際、題詩布なるものは、比較的に顯著なる長所を有する。卽ち其中に言明するものではなく、之に反し題詩布其ものが少くとも描出せられ、さうして吾人によりて目視されるからである。之に反し、哲學的解說に關しては、吾人は何ものをも目視しない。之は此の故に、藝術品自體に對しては、何等の意義に於ても少しも交涉をなさない。けだし吾人は、哲學とか、一般的の思想とか理念とかを、彫刻したり、繪畫にしたりす事るは能きぬ。尙又、此の如きものを創作したり音樂化したりする事も能きぬ。吾人は唯體驗さるべき生活のみを感官的の形に迄轉置する事が能きる。而も藝術の一切の意義は實に此の如き點から成立するのである。

三　藝術品の「內容」と「形式」

世には、藝術品の內容と、その主題、題目、卽ち表書や「プログラム」が言明する所のものとを混同するようして、かういふ疑問、卽ち藝術品の價値を定むるものは、その內容であるか、又は形式であるかとの爭論をなす者がある。此の如き爭論は、彼れが如き混同をなし居る以上は、誠に無理からぬ事である。之に反し、若しも吾人にして、內容といふ語の下に、單に內容といふ名稱を價する所のもの、卽ち藝術品中に包含せられ、その中に存在するものと解釋するならば、然る時には、かゝる爭論は全然謂れなき事になる。けだし此の如き意義に於ける藝術品の內容なるものは、藝術品中に於て形成されたもの、その中に於て一定の形を以て組織されたものである。而も唯それが此の如く組織形成されてある限りのものである。さうして藝術的形式なるものは、內容の存在法に外ならぬものであつて、かゝる存在法により、內容は正しく內容となるのである。兩者は次に述ぶるが如き狀態に於て、藝術品の中に於て一つとなつて居る。それは、如何なる藝術品に於ても、若しも形式、卽ち內容の存在法を少しなりとも變更するならば、忽ちどこかに於て該藝術品が異なりたる內容を取得するやうになり、又此の反對に少しなりとも內容を變更するならば、形式が忽ち異なるに至るといふ事である。之を例へていふと、創作品の戲曲的形式をば、その內容を變更する事なしに、敍事的形式に變更する事は能きない。否降つては、一の

譬喩或は隱喩、五韻脚又は六韻脚の抑揚格（ヤンブス）をば、その內容を變更する事なしに、「アレキサンドリナー」語法、又は散文に改むる事は能きない。更にもう一歩を進め、吾人は、藝術的內容といふたなら、隱默の間に、それをして內容、而もそれ〴〵の內容たるに至らしむる所の特定の形式をば、併せ語らざるを得ないのである。して又、之と同樣に、藝術的形式といふたなら、同時に、その形式により存在法を與へらるゝ所の內容をば、同時に思念せざるを得ない。之を簡言すると、內容と形式といふ兩概念は、相關概念である。一の概念は他の概念を包括する。卽ち唯それを取入れる事により、始めてその意義を取得するのである。

併し右の如くある事の代りに、吾人にして、若しも內容といふ語の下に、題目、主題、理念又は材料と解釋するならば、關係は異なつてくる。此の如き材料とは、例へていふと、歷史的戲曲に於て、藝術家がその藝術品の內容を取來る所の歷史上の事實連絡の如きものである。ところが吾人は、此の如き材料に、形式といふものを對立せしむる事は能きぬ。寧ろ藝術的形成作用といふものを對立せしめ得る許りである。併し此の如き材料の形成作用といふものは、その實、藝術品の內容をば、その中から取出し、此の內容をその形式卽ちそれをして內容たるに至らしむる所の形式の中に轉置するといふ事に外ならない。「材料或は理念が藝術品中に於て一の形式を取得する」といふ言は、何等かのものが、その材料から取出され、形成せられ、かくて藝術品の內容となされるといふ事を意味する。又之と同時に言明せらるゝのは、題目といふ意義に於ける材料なるものが、藝術品の價値を構成する事の能きないのは、ちやうど、之が、形成されなく、かくて藝術品の內容とならない程度に於て、藝術品に對して少しも存在せず、此の反對に、全然藝術品の外に存する所のものを表示すると同樣である。かの「クリンガー」のいうたと同樣に、藝術品中に描出された人間が、「ペーター」であるか、「エンヂミオン」であるかなどといふ事は、該藝術品に對して無關心の事である。その無關心の事であるのは、かういふ理由である。藝術品或は美的觀照の範圍內にある人間なるものは、「ペーター」でも「エンヂミオン」でもある事は能きず、之は唯かゝる範圍の外に於てのみ此の如くなり得るからである。之に反し藝術品中に於ては、形式が萬能のものである。併しその此の如くあると言明するのは、吾人が、唯その內容のみに藝術品の價値が依從すると言明するのと同意義たるのである。

四　藝術品と享樂的主體

藝術品に迄は、材料、主題、題目、理念の中で、唯それに迄附屬する所のもの、卽ち材料から藝術品の中に取入れられ、その感官的顯現に迄轉置せられ、かくて藝術品の內容となされたもの、簡言すればそれに於て直接に描出されたものが、附屬すると同樣に、吾人卽ち觀照者は、吾人が藝術品の中に於て吾人を發見し　その中に感じ込んだ程度に於て、藝術品に迄附屬し、又藝術家なるものは、彼れがその藝術品の中に於て直接に彼れの本質彼れ自らの內部的のものを表出する限りに於て、亦藝術品に迄附屬するのである。

此の如くして、吾人にして、若しも之若くは彼のやうな形式に於ける藝術品の享樂の對象として、觀照する所の個人又は藝術家を擧ぐるならば、正しく右の事を意味するのである。さうして各の場合に於て、吾人は唯此の如く意味し得る許りである。

之を例へていふと、世には藝術品に對する享樂は亦その觀照に對する歡樂であるといふ事が云はれる。成程吾人にして、觀照といふ語の下に、感官的の「目視」と解釋せず、之に反し、享樂的觀照、即ち藝術品の中に於ける吾人の享樂的生活營爲、隨つて吾人の內部的働作、內部的擴大及び統括、內部的往來、遠隔への沒入並に復歸等、その中でも、吾人が藝術品に於て「目視」しつゝある間に吾人が體驗する所の內部的生活の全鼓動、さうして之と共に、吾人に對し藝術品に迄結合せられ、そのもの自らの內部的生活の鼓動として顯現するといふやうなものを意味せしむるならば、さうである。さうして此等凡てのものが、觀照といふ語の下に理解せらるゝ限りに於ては、觀照に對する吾人の歡樂なるものは、よしや吾人自らの享樂であるとはいへ、尙藝術品に對する歡樂たるのである。一例を擧げると、建築的形に對する吾人の歡樂といふものは、吾人が此の形に觀照的に追隨する事になり、吾人が仕遂ぐる所の、吾人の內部的擴張及び集中、全內部的運動に對する歡樂である。此等凡てのものは、觀照された形から吾人の中に進來する事により、その形に迄結合せられ、それに附屬する所のものである。一言以て覆ふと、此等は感じ込まれてあるのである。

されど之と同時に言明せらるゝのは、觀照に對する此の種の歡樂は、新なる一要素として藝術品の內容に對する歡樂に迄附加せらるゝのではなく、之に反し、正しく藝術品の內容に對する歡樂であるといふ事である。一切の生活、隨つて藝術品の一切の內容は、是吾人によつて感じ込まれたものである。

之に反し、若しも吾人にして、觀照に對する此の如き歡樂をば、藝術品の中に於てゞなく、之に反し藝術品に對立して吾人が行ふ所の觀照といふ働作に對する歡樂、例へば內部的摸倣の活動、かゝる活動の自由に對する歡樂、吾人が任意に藝術品並にその理念的世界の中にあり、次に再び吾人をその中より引戻しさうして現實に迄思念し得るといふ事から成立する所の自由に對する歡樂と解釋するならば、關係は異なつてくる。此の如きものに反對して吾人は言明せねばならぬ。かゝる自由をば、その實の所、吾人は藝術品に對してか、又はそれの享樂の中に於ても有しない。之に反し藝術品なるものは、吾人が意志すると否とに拘らず、吾人をその中に轉置し、吾人を捕捉し、吾人を牽引し去る。吾人にして、今は吾人を打任せ、次には藝術品を放棄するといふ自由を意識し居る間は、吾人は少しも藝術的享樂をなし居らないのである。

尙此の外に、此の種の歡樂は、藝術品に對しての吾人の自由に對する歡樂として、正しく吾人即ち藝術品に對立する所の吾人の自我に對する歡樂、隨つて藝術品の外の自我に對する歡樂である。之は、かゝる自我の能力に關する滿足であり、その結果藝術品に對する歡樂ではない。さうして人にして、吾人、即ち藝術品の中に存しなく之に反し藝術品に對立する所の自我に對する此の如き歡樂が、何時にか藝術品に對する歡樂に迄變じ得ると思認するならば、是取りも直さず、一の驚異、珍奇なる欺瞞を立證するものである。吾人の自由に對する此の如き歡樂は、かゝる自由が藝術品の中に存する時のみに、藝術品に對する歡樂となる事が能きる。併し又、藝術品の中には、勿論少しも此の如き自由は存在しない。藝術品なるものは、任意に己れ自らに打任せ、次に再び己れ自らの外に脫する事は能きないのである。

して又、摸倣の內部的「活動」並にかゝる活動の自由に對する此の種の歡樂を以て、「藝術品中に描出されたものが現實である」との確信と、「かゝる確信は誤謬」であるとの見解との間の往來逍遙から生ずるものとするならば

全然たる沒理となるのである。

されど究極に於ては、勿論かゝる「逍遙」も、かの「自由」と同樣に、異なりたるものを意味するやうになる。詳しくいふと、兩者は單に、感情移入、並に美的共同體驗の特性に對する一の異なりたる名稱たるに過ぎない事になる。卽ち此の種の共同體驗は、慥に、一方に於ては日常普通の生活に於ける實際的體驗、他方に於ては、藝術品の中に存する所のものに關する單なる表象との特異なる中間のものであるといふ事に對する異なりたる名稱であるとされる。之を例へていふと、描出された忿怒を美的に體驗する所のものが、それにも拘はらず、此の忿怒をば、己れに加へられた侮辱に對して忿怒する者と同樣に體驗しないといふ事、更に換言すれば、彼れは忿怒を體驗するがさり迚右の實地忿怒者のやうな實際的體驗をしないといふ事に對する異名とされるのである。されど若しも果して此の如くあるとさるゝならば、右のやうな名稱は、最も不便利なものを選擇したといふものである。特に彼のやうな逍遙などゝいふものは、玆では少しも問題とならない。要するに美的體驗なるものは、事實的に決して此の如きものではなく、之に反し、之はそれ自身に於て十分明瞭、確實、且つ一義的のものであつて、苟も一度なりとも美的體驗をなした所のものが、必ず知得し居る所のものたるのである。

五　藝術品と藝術家

更に他方に於ては、吾人は上に述べた。藝術家なるものは、彼れが藝術品の內容に迄附屬するに非ずんば、藝術品の內容に迄附屬しない。又その附屬する程度に於てそれに迄附屬すると。之に關しては、吾人は慥に此の第二の意義に於て意味せらるゝ所のあらゆる種類の語句を想起する。之を例へていふと、人によりては云ふのである。吾人は藝術家の形成力、その豐富なる想像、その個性に對して歡樂を感ずると。此の種の文句は固より正當のものであるには相違ない。けれども吾人が特定の藝術品に接し、藝術家の形成力に對し歡樂を感ずるといふ事は、たゞ、吾人は藝術家が藝術品の作成により表現した所の形成力に對して吾人を歡樂せしむるといふ事のみを意味する。隨つて之は、藝術家が所有するけれど決して表現しない形成力とか、又は彼れが他の藝術品に於て表現した所の形成力とかを意味する事は能きない。藝術家の形成力なるものは、彼れが藝術品の中に於て或るものを藝術的方法に於て形成する限りに於てのみ、藝術品の中に存在し得る。されど藝術的手段を以て藝術品の中に於て形成されたものは、是藝術品の內容である。此の如くして又、藝術家の形成力に對する歡樂なるものは、結極する所、藝術品中に於て形成されたもの、卽ち藝術品の內容に對する歡樂の別名たるに過ぎない事になるのである。

次に、かの「豐富なる想像」、並に藝術家の「個性」に關しても、關係は之に異ならない。藝術家の豐富なる想像に關しては、藝術品なるものは、唯それが豐富なる形成作用、或は之をより普遍且つより正當に云ふならば、內部的活躍といふ要素をその中に包藏し、さうしてそれを直接に表現する程度に於てのみ、吾人に之を言明するのである。此の故に、藝術的想像の豐富とは、藝術品中に於て吾人に提供せらるゝ所のものゝ豐富、卽ちその內容の豐富である。さうして此の如くして、かゝる豐富に對する歡樂は、藝術品に對する歡樂であるといふ事を假定するに於ては、此の豐富が、之以外の如何なるものを言明するかを理解する事は能きないのである。

更に又、吾人が藝術品の中に於て見、さうして吾人の歡樂を感ずる所の藝術的個性とても、藝術品の內容中に

於て吾人に提供さるゝ所のものゝ個性、即ちその特異性に外ならぬのである。藝術家なるものは、それ〴〵の個性に應じて、此の方面又は彼の方面からして、その題目を考察し、さうして此の中からして、之若くは彼のものを取出す。併しながら彼れがその題目を考察する所の方面なるものは、彼れが藝術品の中に於て提供して、それを表現する所の題目の方面たるに外ならぬのである。して又、彼れが、かゝる題目からして、之若くは彼のものを「取出す」といふ事は、彼れが、題目中の之若くは彼のものを、藝術品の內容となすといふ事の謂に過ぎないのである。或は又、人によりては、藝術的個性を以て、藝術家が藝術史家の言明に從ひて所有し、それかというてその藝術品、特に吾人により今觀照され居る藝術品中に於て表現しないといふやうな個性を意味せしめようとするかも知れぬ。ところが藝術家の此の如き個性なるものは、いふ迄もなく、藝術品の美的觀照とは、少しも交渉を有しないのである。

勿論その此の如くあるといふ事は、各の人が、啻に藝術品のみならず、更に藝術家に對しても諸種の關心配慮をなし得る權利を有するといふ事を妨げない。其中でも、一の藝術家が、他の藝術家、彼れの同僚又は朋友が作成した所の藝術品の觀照に際し、その者が如何なる藝術家としてその作品中に於て顯現するか、その藝術品の作成に際し如何なる努力をなしたか、隨つて如何なる種類の作成を目的とし、又目的とせねばならなかつたか、如何なる手段を使用したか、それは彼れ自らも知つて居つたものか、又は新奇なるものか、若くは新奇なる方法に於て、都合によると特に巧妙に之を使用したかなどといふ問題を起し得るのである。併しながら此等凡ては尙、正しく藝術品に關係しないで、藝術家並にそれと藝術品との關係、藝術家に於ける藝術品の發生過程等に關する問題である。されど藝術家なるものは、決して藝術品ではない。隨つて又、彼れに對する關心配慮は、是藝術品に對する關心配慮ではないのである。

最後に又、藝術家の「筆跡」といふものに就いて語り、之を賞美する所のものは、之により單に藝術品の特性その特異なる印象力、隨つて藝術品中に存在し、その內容を構成する所のものゝ特性を意味せしめようとする。彼等は藝術品の此の如き「筆跡」をば、藝術家の筆跡と呼ぶ。何となれば、此の筆跡は、その藝術家を待つて始めて存在するに至つたといふ事を知得し居るからである。併しながら、藝術品中に存する所のものをば、藝術品の外に立つ所の藝術家などに迄思想的に關係せしむるといふ事は、是美的觀照には附屬しない。成程藝術品なるものは藝術家を待つて始めて存在する。併したとひそれがさうでなく、之に反し藝術品が天から落下し來つたとするも、尙それは、それが正しくある所のものであり、さうしてその結果、その有する所の價値を有するのである。

さうして或る意味に於ては、實に各の藝術品は天から落下した。即ちそれは天の贈物である。更にそれが、藝術家の手を透したとか、又は不可解の機會により天から吾人に落下したなどは、その價値に對し少しも關係のない事たるのである。

六　「藝術的享樂」に關する概說

美的享樂特に藝術品の享樂といふものは、一の感官的事物の享樂に對し、ちやうどかの美的觀照が、任意なる

感官的事物の觀察に對すると、同樣の關係に立つ。けたし美的觀照も亦、感官的事物を觀察する。けれども之はかういふ觀察である。卽ちそれに對しては、感官的事物なるものは、その中に存する所の何等かの生活に對する象徵であるといふ事である。卽ち之に於ては、かゝる事物それ自體を觀照しない。之に反し之を正しく一の象徵として觀照する。他語を以て云ふと、之は、或る感官的事物を觀照するが、併し此の中に於て、又は之を通して、その中に理念的に與へられたる生活を觀照するのである。

して又、此の種の觀照が、一種特異なるものであると同樣に、美的享樂も特異なるものである。卽ち一の感官的事物の享樂とても、その實の所、一種特異なる生活活動の享樂である。換言すれば、感官的事物の把捉及び領得から成立する所の享樂である。併しながらかゝる享樂は、吾人の意識に對しては、感官的事物、而もそれのみに關係せしめられてある。之に反し、美的歡樂なるものは、一方に於ては、享樂者の內部の生活活動の歡樂である。併し之は同時に、かゝる生活活動に「對する」歡樂である。換言すれば、之は、かゝる生活活動をば、同時に意識的の對象となす。卽ち意識的方法に於てそれに關係せしむる。之は客觀化された自己活動の歡樂。卽ち客觀化された自己享樂である。之は、吾人自らの體驗中に進透する所の、或る事物の生活に對する歡樂である。或は之をより精密に表出すると。吾人の中に進透する所の生活の調和の享樂、生活活動の自己の需要、自己の生活憧憬の調和の歡樂である。

かの倫理的享樂、卽ち倫理的歡樂も亦、此の如き享樂である。吾人にして他人の高貴なる意志に對して歡樂を有するとするならば、此の事はかういふ事を言明するのである。曰く、他人のかゝる意志が、吾人の中に進透しさうして吾人が、此の如く進透し來る所の意志と吾人自らの意志の法則との間に調和を感ずると。之に關しては先第一に、吾人は、此の調和、又はその調和の感情をば、「可認」（ビルリーグング）と稱するのである。而も斯くなるといふと、倫理的歡樂の感情とは、是倫理的可認の感情となる。併しながら又、美的享樂なるものは、此の如きものとも異なるのである。さうして其の異なるのは、敢へて、美的享樂に於ては、享樂の對象が美的理念性を有し又同時に美的客觀性を有するのに、倫理的歡樂に於ては、歡樂の事物の客觀的現實性といふものが、その前提となつて居るといふ事許りではない。此の差異に關し特に重視すべきは、次のやうな事である。かの美的觀照が、美的內容それ自體の觀照ではなく、之に反し一の感官的のものを透しての內容の觀照、卽ちかゝる感官的のものゝ中に存在するものとしての觀照であると同樣に、美的享樂といふものも亦、美的內容それ自體に對する享樂ではなくて、之に反しそれが正しく內容卽ち一の感官的のものゝ中に存在する限りに於てゞあるのである。或は之を他語を以て表出すると、美的享樂なるものは、かういふ特性を有するのである。それは、それが何等かの理念的內容の享樂であると同時に、一の感官的事物の享樂であるといふ事である。兩者は一つの事實中に結合される。曰く美的享樂なるものは、何等かの感官的のものに對する享樂であり、而もその中に於て一の理念的內容が存在する限りに於てゞあると。或は吾人にして再び「美的事物の內容なるものは客觀化された自我である」といふ曾述の文句を想起するならば、次の如くなる。美的享樂とは、一の感官的のものに對する享樂である。併しながら、その中に於て、享樂的自我が客觀化されてある限りに於てゞあると。之は此の如き特殊の意義に於ける客觀化された自己享樂たるのである。

以上の如くあるから、美的享樂なるものは、普通の感官的のものに對する享樂と、倫理的快感との中間に位するものである。併し之は此の如くあればとて、又決して兩者の結合したるものではなく、之に反し一種特異にして、兩者と性質的に異なる所の第三者たるのである。

昭和三年五月二十日印刷
昭和三年五月廿五日發行

美的觀照と藝術品
定價金六拾錢

著作者　稻垣末松
發行者　森山讓二　東京市神田區表神保町二番地
印刷製本者　山縣純次　東京市神田區今川小路一ノ一
印刷所　山縣製本印刷株式會社

リップス
美學大系
第七分冊

著作權所有

發兌　株式會社　同文館
東京市神田區表神保町二番地
電話神田九三三・三〇八〇番
振替口座東京一三五番

同文館

發行所　東京市麻布區三軍町一三番地
振替口座東京六一三三三・三〇八〇番

東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地

印刷所　東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地

印刷者　東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地

著作者　東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地
東京市麻布區三軍町一三番地

著作權

大正十年十月廿六日印刷
大正十年十月廿八日發行

定價金六圓

不許複製